
君からのメッセージ

月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君からのメッセージ

【Zコード】

Z6801X

【作者名】

月詠

【あらすじ】

高瀬蓮は、中学の頃付き合っていた彼女と、とある事情により別れることになる。

高校へ入学したら、新しい恋を始めよう。

そう思つて入学した高校。けれど、近づく女子といつも比べてしまう。なかなか次の恋へ進めない蓮は、ある日、図書館で一通の手紙を見つける。それが、自分が高校に入つて、初めて気になり出していた相手だと知つて・・・?

別れ（前書き）

マザコンのように感じられる、プロローグです。

.....。

いえ、大丈夫ですよ? —マザコンじゃありません!

ちよつと言葉を間違った結果、マザコンのように感じられるだけ
です! —ちゃんと、自立した男になります! —マザコンではない!

大事なことなので、再三言いつ。

マザコンじゃない!

自分で言つのも変だが、俺のお袋は凄い。そう、幼い頃からずっと
と思い続けていた。

そんなお袋に育てられてきた俺は、お袋の期待に副つほどどの、お
袋に恥をかかせないような大人に、なつただろうか？

なつていればいいなと思いながら、でも、お袋から見ればまだま
だ、いやこれからずっと、俺は子供のままなんだろうって。だつて、

紛れもない、
お袋の子供なんだから

そんな俺には、幼い頃、すゞく不思議だったことがあった。そし
て、無邪氣にお袋に尋ねたことがあった。

『どないしてパパは
かえつてこうへんの?』

あの時は、酷く焦った。

いつも笑顔を絶やさず、どこまでも優しく穏やかなお袋が、あれまで乱れ喚き、暴れるようにして泣き出したのだから。

理由は全然分からなかった。でも、ようやく元に戻つて笑つたお袋の笑みは、悲しい色に染まっていた。

今でもハッキリと覚えてる。あんな、とても辛くて苦しそうな笑みを見たときに受けた、鋭いくらいの衝撃を。

お袋は笑つていて当然。

お袋は向でもできて当然。

お袋は優しくて当然。

そんな、全然当然じゃないことを、俺は当然のように受け入れていた。

今思つと、あのときの俺はまだ4歳だ。無理もなかつたのかもしない。でも、それでも、あのときの無邪氣さには今でも吐き気がする。

それでも今、お袋は当然のように笑つている。だから、俺も決めたんだ。

お袋のよひな、懐のでかい奴にならうつて。

お袋がずつと幸せな笑顔を作つていらるよひこ、何でも頑張ろうつて。

お袋が胸を張つて、"この子が自分の息子"だつて言えるよひな、そんな子にならうつて。

心にずつと誓つてきた。お袋のためになら、他人の為になら、自分の中をはれるよひな男にならうつて。

あ～、寒い。

俺はズボンのポケットに手を突つ込むと、無人の屋上で空を見上げた。どこまでも高くて澄んでいる空は、秋特有の色合いであるような気がした。

「あ、やつぱりいた

そう言いながら俺の隣に躊躇なく座ったのは、1年のときに知り合った、神崎 馬鹿だ。

「……今、馬鹿って聞こえた気がする」

「氣のせこじやないー絶・対に今馬鹿つて言われたー」

それからうつむかひとりがばかり勘が冴える奴。

本当に、何でこいつ…………こや、やめておこう。鬼のよつた形相をした化け物が今にも角を出さうと鼻息荒くして助走をつけてやがる。

「で？菖蒲が何でこことこいるんだ？友達と飯、食うんじゃなかつたのか？」

「うへん、そうだったんだけど……」

すると彼女は「アハハ」と乾いた笑みを浮かべながら、俺の隣に座り直した。

「あー、もしかして、”彼氏と食べる”ことになつちやつた、テヘ”つて言つ……”

「お前が　とかキモイし。やめろや馬鹿

「馬鹿に馬鹿つて言つて何が悪いのよ？」

「少なくとも俺はお前よりテストの点数はいいぞ？」

「学力の話しじゃなくて性格の話しよ、大馬鹿野郎」

これが俺と彼女のいつもの会話だ。いつから、と言われば多分、会つたときからずっとだと思つた。

最初に「こんな」と言い出したのは、確か、彼女だ。

「お前さあ。
男だけじゃなく女にまで振られる可哀想な奴だつたん
だな」

「なつ？！ち、違うし！つてか、男子に振られてないし！」

慌てて体裁を取り繕つ彼女を見て、俺は「あー、はいはい」と片手をヒラヒラと振つた。

「ふが
そんな俺の態度が、もちろん気に食わなかつた彼女は、
つ！！！」と意味が分からぬ唸りを上げていた。

そこがまた、可愛かつたりする。

神崎 菖蒲。中学1年の夏から付き合い出した、俺の彼女だ。

よく笑つてよく怒りてよく泣く馬鹿で、ひどいことをした」といっても
よく怒つて泣いてる。セツキみたいな変な声をよく上げる、単純馬
鹿だ。

単細胞でできてしまつてゐる頭が痛々しい。

「蓮……？今君、すごく失礼なこと考えてない？」

「ほほまでも笑顔で、そつ、笑顔なんだが、怖い。

背後にあるオーラが赤を通り越して黒になるほどに黒い彼女を見て、俺は内心だつたらだらに汗を流していた。

むひろん、冷や汗だ。

「いーえ？ そんなことありますよお～？」

「あらあ、蓮君が敬語で話すなんて、珍しいですねえ？」

あー、駄目だ。完全にキレてる。

そう感じた俺は、素直に頭を少し下げた。

「すんません、失礼なこと考えてました」

「フン、よろしい。私に逆らはなんて、200万年早いのよー。」

仰るとおりです。

そんなことを考えて顔を上げると、彼女と目が合って、噴出した。

「こんな日常も、後少しもすれば終わってしまう。それが分かっているから、とてもやりきれなくて切ない。」

「後、少しだな……」

俺の言葉に、彼女はピクッと肩を震わせた。そしてそのまま、力

なく頷く。

「2ヶ月、だね……」

俺たちはどちらからともなく、手を繋いだ。そして、どこまでも高い澄んだ空を見上げる。

後2ヶ月もすれば、俺たちは中学を卒業する。そして、俺は彼女と別れる。

学校でも有名なくらいのバカップルである俺たちが別れるのに、複雑、なのかよく分からぬ理由があるからだ。

今はそれを思い出すのも、辛い。

そんなこんなで迎えた卒業式は、今までのどんなことよりもずっと、空虚で無意味な、悲しい式だった。

『卒業生が退場します』

その言葉と一緒に聞こえてくる無数の拍手。その中に聞こえてく

る、周りの奴らの鳴咽。

ハンカチを握り締めている校長や、涙を必死に堪えている担任。1・2年でも泣いている後輩がいて、そこには少し驚いた。

それでもやつぱり、俺は泣けなかつた。

本当の悲しみは、ここじゃない。ここに、本当に俺が恐れている、悲しむべき別れはないんだ。

「お前、何で泣かないんだよ！ 昨日言つただろう？ 泣けつて！」

「なんでやねん！ そないゆうなら自分が泣けばええやろ…」

出身が大阪だつたと言つ」ともあり、俺は時々大阪弁になる」とがある。と言つても、小さな頃に少し喋つていたくらいだから、正しい大阪弁なのかどうかなんて分からない。

多分、間違つてるんだろうけど……。

「俺じや駄目なんだよ！ お前が泣くから」と、周りの女子がもつと泣くんだよ！ そうすれば俺がその子たちを慰めて……」

「まずはその下心を消せ、ドアホ」

ゲシッ！ と尻を蹴り上げると、そいつは「ふあぎや？！」と大きな声を出して講義の声を上げている。それを周りの男子たちともつと大げさにしながら楽しんでいるのを見て、ようやく感傷的になれた。

こないじやれあうんも、これが最後やんな。高校行けば、相手が
変わるんやから。

だから思つた。今日だけは、今日だけは絶対、最後までずっと笑
い続けていようって。

そうする」ことができれば、きっとこれからも、ずっと笑つていら
れるから。

「そうだ、蓮」

弄られていたはずの親友 高橋 直人が俺の隣に並び、壁に背中
をつけて呼吸を落ち着かせていた。そんな直人を見て、俺は「あ？」
と声を出す。

「お前、神崎と別れるんだって？」

「つ」

ドクンと、心臓が大きく波打つた。

それを知つてか知らずか、直人は続けた。

「理由があるらしいけど、それはお前が俺に教えたいと思ったら、
教えるよ？絶対に」

その日はどこまでも真剣で、こうこうときやつぱり、こいつが親
友でよかつたと思うんだ。

「ああ」

頷いてそう答えると、満足したように笑った直人が、その笑みのままで、

「で」

と続けた。笑顔で言つてゐるはずなのに、その笑顔が少しづつ黒くなつてゐる気がする。

「神崎は女子高生じゃねえーか？何でだよーおいー。」

「はあ？」

最後に怒られる意味が分からなくて、怪訝そうにしていると、直人は心底悔しそうに拳を握り締めていた。

「神崎がフリーになつたんだつたら、俺が神崎を手にするつもりだつたのにいへー！！！」

「…………」

何故だろう。とても哀れに見えてきた。

そんなことを思いながらため息をつくと、直人はそんな俺に気がついて不敵に笑つた。

「まつ、ぜつてえー無理だわつとは思つてゐるけどな」

「…………直人」

無理だと分かる程度の正氣は残つてたのか。

驚いている俺に気づいた直人は、田を半田にした。

「お前今、ぜつてえー失礼なこと考えてるよな」

「んな」とねえよ

シレッとそう返しながらも、俺の田はあいつを追つていた。そのことに気づいて、自嘲してしまつ。

今日で終わりだと、そつ分かっているからこそ、田で追うのかもしない。少しでも長く、少しでも多く、彼女のこと覚えておきたいから。彼女を想つてみたいから。

「なあ、蓮」

「んー？」

「俺も、本気で神崎が好きなんだ」

.....。

しばらくの間が空いてから、俺はようやく直人を見ることができた。そしてその田は、やはり予想していた通り、真剣だった。

「.....本気、なんだな」

「だから、言つたら？本気だつて」

そう言つた直人は、笑いながら菖蒲を見ていた。

その目が、少し前までの俺を思い出させて、酷く切ない。

あんな事情がなければ、俺たちはまだ、付き合い続けることができたのだろうか？それとも、直人の気持ちに気づいて、譲つただろうか？

俺はフツと静かに笑うと、後者を消し去つた。

譲るも譲らないも何も、その前に俺は、絶対に直人の気持ちに気づけなかつた。

そして直人も、俺たちが別れなければ絶対に、そんなことは言わない。そういう奴だ。

だから。

「……後で、話すよ。　菖蒲を頼むな」

言われた側の直人と言えば驚いた表情をしたかと思うと、すぐにニヤッと不敵な笑みを浮かべた。

「頼まれなくともやつてやるよ

何故だか今、無性にこいつが頼もしくて、大きく見えた。

背は、俺よりも低いのに。

「一言余計だ、アホ」

「アホにアホって言わるとかなり傷つくもんなんだな。覚えてお
い」

「だあ～からーお前はシビアに終わらせられないのかよー。」

勝手に心の中を読んだお前が悪い。

そう思いながら、それでも心の中では本当に感謝している俺は、
「いつを弄りながら思つてこる」とがあった。

「いつなら、絶対に彼女とつまくやつていけるつて。そんな、俺
が考えたつて意味のないことを、ずっと考えていた。

夕焼けの空を見上げながら、俺たちは歩いている。別れのために、
1歩ずつ、噛み締めるように歩いて歩いている。

卒業式が終わった後、近くのホテルで懇親会を盛大に盛り上がり
せ、『氣づけばもう夕暮れ時だつた。流石にこれ以上は駄目だ』と言つ
ことで、最後の別れを惜しみながら、俺たちは会場を後にした。

「これからは、俺たちが一番恐れている別れの始まりだ。

「夕日つて、こんなに綺麗なんだね」

ポツリと呟く彼女の声が、微かに震えていた。

「せやなあ

そして俺の声も、同じように震えていた。

繋いだ手をむきより強く握り締めて、足を止める。田の前にはもう、彼女の家の門がある。彼女が門の中に入ってしまえば、もう俺たちは恋人ではない。

ただの、中学のときのクラスメートになる。

それが分かっているから、俺たちはこれ以上進めない。進みたくない。

「……いつまでも、いはしてられへん？」

彼女は体を震わせながら、コクンと頷いた。そんな彼女が痛々しくて、でも同時に、とても愛しくて。

だから俺は、ゆっくりと、手を離した。

離した瞬間の彼女の横顔は、今でも忘れられない。

「…………」

大きく見開かれた目には、涙が溜まっていた。瞬きをして流れ落ちた涙は、頬を伝つてあごに行き、やがては地面に落ちた。

その様子をじっくり見ているなんてことは、できなかつた。

地面上に落ちる少し前に、俺の体は動いていた。

「れ、ん……」

グッと力を入れて、彼女の体を自分に押し付けた。

どうしようもないくらい、好きになった。気づいたときにはもう、止められないほど大きくなっていた想い。悔しいほど膨らんだ想いを、俺達は今、手放さなくてはいけない。

「運命つて」

「……うん」

「残酷やんなあ」

「つ！」

息を詰まらせた彼女は、小さく首を振って、無理矢理笑った。

「そんなこと、ない、よ……？」だつて、運命が残酷だつて、言うんなら

ゴシゴシと田を擦つて、精一杯の笑顔を作る。それを見て、俺も熱いものをじうに堪えて、笑うことができた。

今日は、今日だけはずつと、最後までずつと、笑つてゐるつて決めただろ？

「私は、蓮に……出会えなかつたもん」

どんな別れであつたとしても、これが最後ではない。死別しない

限り、また会える可能性はある。

例え今、ここで彼女と別れなければいけないとしても。それでも、出会ったことを後悔はない。

「めっちゃ、楽しかったで？ホンマに楽しかった」

「……うん、私も」

短い間だった。でも今は、短くてよかつたって思う。

もし付き合っている時間が長かったら、想っていた時間がもっとと長かったら。今こんなふうに、別れることなんてできなかつたから。

今ならまだ、身を引ける。前に、進める。

「楽しかったから。ホンマに、好きやつたから。せやから俺は、また恋するわ」

微かに俯かせていた顔を上げた彼女は、「え？」と不思議がるような表情だった。

「お前に恋して、両思いになつて、それで知った気持ちもあって、付き合つて樂しいつて思えた。こんなに樂しいことはなかつた。お前がいたから、だから楽しかつた」

恋がどれだけ素晴らしいもので、そして同時に、どれだけ辛いもののかを知つた。

「だから今度もまた、そう思える相手を見つけようって思つ。それが一番、手つ取り早い諦め方だろ？」

しばらく呆けていた彼女も、やがて小さく笑つて、「うん」と頷いた。

きつと彼女は、思つていたはずだ。

新しい恋なんて、できるわけないって。でもそれは間違いだって思う。それに、彼女には直人がいる。あいつが、彼女のそばにいてくれる。

だから、安心して別れることができる。

「だから今度、お前に彼氏ができる、俺に彼女ができたら、また会おう。」

そうやることで、きつとまた、前に進めるか。

「約束、やで？」

「……うん。」

一ヶ「ひとつ」と、花の咲いたかのような笑みを、最後に見れたことが救いだった。

もしこの場で彼女が、悲しい表情をしていたら。きつと俺は、そのまま彼女を連れて、どこかに行つてしまつたかもしれない。

だからこのとき、本当にホッとしたんだ。変なことを、しないで

すんでもよかつたって。

「約束破つたら、何にする?」

「せやなあ～……。ほんなり、マジで不味いプロテイン一気飲みとかどや!？」

「ええ!~あんなの飲まないといけないの?~!」

「約束を破つたら、や。破つたら。破らなええねん」

「せやなつ!~

指切りをして、彼女が玄関のドアに手をかけて、ゆっくりと振り返つた。

「バイバイ、蓮

「……またな、菖蒲

バタンと閉まつたドアの重い音の分だけ、俺たちの間に壁がある。

もう2度と、女として、彼女に接することはないだら。

そう考えて、胸が痛んで。

「……少しやつたら、ええよな?~

流れる涙を無視して、俺は走った。

またもう一度、彼女に会うためにも

。

1、日常生活

高校に入学して、早2週間。高校生活にも慣れて、ようやく周りの顔と名前が一部一致するようになつて来た頃だ。

「おはよーさん」

声をかけると、そいつは「おうー」と嫌に元気一杯の声で答えた。

一応親友の高橋 直人だ。シンシンの髪は茶色で、ピアスが合計3つついている。赤、黄、緑の信号色だ。

「一応つて何だよ、一応つて！しかも信号色じゃない！」

「だから心読むなつて」

そんなことを言い合いながら登校するのが、俺の毎日の始まりだ。教室に入れれば何人かの女子が話しかけてくるが、速攻で話を終わらせて教室を出る。もちろん、直人を引っ張つて。

「何でお前女子と話さないんだよ！俺が女子と知り合いになれないだろ？！」

「意味分からん。つーか、そない下心ある奴を好きになる戯けがあるんか？」

「タワケって何だよ、タワケって！あれか？ 煙を耕す、あれか？！」

「それ、鍬やろ？ 戯けと全然ちやうがな。アホか」

何で“戯け”が“鍬”になるのかが分からなくて呆れたため息をつくと、直人は物凄い驚いた表情で飛び上がった。

「何？！ タワケって、畠を別けることじやないのかよ？！」

どうやら、“田分け”だと思っていたらしい。つーか、それ鍬と関係ないじゃんかよ。

俺は「ハア」と盛大なため息をつくと、屋上に出ですぐ壁に戯け”と言つ漢字を書いた。それを見た直人はと言つと……。

「……何だそれ？ 蛇か？」

何でやねん。

「漢字や、漢字。ふざけること、おどけの意味を持つ漢字や。少しは辞書引きい？」

「何で俺がそんな面倒なことしないといけ

「馬鹿だからやろ？」

シレッ とそつ返すと、直人は「馬鹿だと？！」と怒鳴り声を上げていた。そんな声を聞きながら、何となく、あいつを思い出す。

今頃、何してんのかな……。

そんな俺に気づいたのか、直人はため息をついて俺の隣に腰を下ろした。

「新しい恋、するんじゃなかつたのかよ？」

「……まあ、そのつもりだつたんだけどな」

『気づけば彼女を思い出してる自分がいる。彼女を探している自分がいる。そして、女子を見て、話して、触れるたびに思つ。』

彼女じゃない。

当たり前の事なのに、その事実が胸を切り裂くかのような痛みを伴つてくる。だからどうしても、女子と接したくなくなつてくれる。

「IJのままじや、いつまで経つても約束守れないってな

最後に見せた、最高の笑顔を思い出して、思わず苦笑してしまつ。

わざわざ餓鬼っぽい指きりを律儀にしてまで交わした約束なのに、このままだと果たせなくなつてしまつ。

「俺から、約束したくせにな」

踏ん切りがつかない。

彼女以上の奴を、見つけられない。見つけようと思わない。

過去に縛られ続けていたいと、願つてゐる自分がいる。

「……色々考えすぎなんだよ、お前は」

そう言つなり立ち上がった直人は、俺の頭を軽く叩いた。

「つ？」

軽い痛みを覚えて頭を押さえると、ケラケラと笑つている直人の顔が、目に入ってきた。

「周りから完璧って言われてるお前が、恋では不完全な人間になるんだな」

「……完璧な奴なんているわけないだろ？ いたら見てみたいよ」

すると直人は、俺の顔を指差して、また笑つた。

「俺から見た、完璧な奴だ」

「アホ」

手を払つて時間を確かめてから、俺は屋上を出た。もちろん直人もその後に続く。

「お前、どうやつたら恋できるか、知ってるか？」

後ろからの声に、俺は振り返ることなく「はあ？」と返した。振り返れば見えるはずだ。ニヤニヤと笑つている直人の不気味な顔が。

「不気味って何だよ、不気味って！」

「ゲシッ！」と背中を蹴られ、かと思つたらバランスを崩して倒れた音が聞こえた。振り返ると案の定、直人が尻と頭をシコタマ階段にぶつけていたところだった。

「アホ」

「つむせーー！」

顔が赤くなっているのは恥ずかしいからだろう。俺はため息をつくと、直人が立ち上がるのを待つことなく歩き出し、席についた。高瀬と高橋だから、席は近い。と言うか、前後だ。それが何だかムカツク。

「で？ 恋の仕方とやらは？」

何気に気になっていた俺がそう投げかけると、直人はやはり、ニヤニヤと不気味に笑つた。

「お前、意外に一目惚れするタイプだろ？」

「は？」

思わず出た声を聞くことなく、直人は更に続けた。

「で、一目惚れしたこと気にづかないでドンドン好きになつていくタイプだ。菖蒲のときだってそつだつただろ？」

当時のこと思い出し、俺は苦笑した。

一目惚れした覚えはない。ただ、何とはなしに気になりだし、

よく見ているうちにいいところも悪いところも見つけて、全部見た上で好きになっていた。が、今思うと確かにあれは一目惚れだ。

「なんや、悲しいわ」

「何でだよ？」

「お前に恋を教えられる日が来たつちゅーことが」

「何発殴ればいい？」

既に拳を作っている直人を見てケラケラと笑うと、やっぱり直人もケラケラと笑った。笑い合って実感した。

「こいつの隣が、1番居心地がいい。　男の中では、

「だから、お前は待つてればいいんだよ。気になる奴ができるまで」
平然とそんなことを言われてしまつては、これ以上あまり言えない。

「……今日からお前は、俺の恋の師やわ。頼りますわ、師範！」

「何か嫌だな、それ」

そんなこんなで、今日の授業も早々に終わつた。

俺はバスケ部に入部した。もちろん直人もだ。

今思つと、直人と俺は小学校のときからずっと一緒にバスケをやつてきていた。一番連帯プレーが上手くいくのもやっぱり直人だ。

「何や、複雑やなあ」

「何でだよ」

少し怒つた口調で言われた俺は、ペロッと舌を出すとショート練習に戻る。

俺と直人はいつも練習後に、ゴール下、フリースロー、3Pの順に打ち、本数の少ないほうが負けと言つゲームをする。

もちろん、負けた奴はプロテイン。

「あ、～～～～～～～～～！」

「いよっしゃ！」

グツー！と高らかに拳を振り上げる俺の横で、直人は自分の手を見つめてブツブツと何だか恐ろしいことを呟いているような気がしないでもないが、この際無視だ。

「今日は特別マズイやつだから、気合入れて飲めよ？」

そう言つてプロテインを差し出すと、恨みがましい目で俺を睨んでくる直人が、ゆっくりと手を伸ばしてそれを飲んだ。

「～～～～～～～つ？！」

喉を押さえて吐きそつになつてゐる直人を見て、これからこのプロテインだけはやめよつと、密かに心に誓つた。

「マネージャー！悪いんですけど、スポドリ貰えますか？」

声を上げると、3人いるマネージャーが我先とスポドリを持つて、鬼のような形相で競い合つていた。

「へん……。

俺は自分の隣で寝転がつて瀕死状態の直人の耳に口を寄せ、ボソッと呟いた。

「怖いな」

「おう」

「これは、恋は盲目つていうやつの一種なのだろうか？といふか、本当にそうなつちまう奴がいるんだろうか？　この人たち以外で。

家に帰つた俺は、珍しく上機嫌なお袋を見て目を細めた。

「どないしたん？」

するとお袋は、困ったような笑みを浮かべて、「へん」と言おうかどうか迷つてゐるよつだつた。

「隠し事はなしやべ、前に約束したやべ」

「……せやね。堪忍」

彼女のことを思ってじいか、お袋せむつあよつも表情を曇らせる。 しまつた。そんなお袋を見ると、胸が苦しくなる。

「それでへビなこしたん?」

「うん。あんね?お母さんのお兄さん、覚えてる?」

「ああ、智治の兄貴?」

お袋は「やう」 と頷いて、それから口を開いて、口を動かした。

「……実は、お兄さんとお義姉さんが、この家に住むことになった んよ」

「何だよ、そんな…………ん?」

今、何て言つた?

呆然と頭を上げた俺を見て、お袋はやつぱつ困ったよつて笑つた。

「うん。一緒に住むの」

……。

「智治の兄貴が?」

「お兄さんと、お義姉さんが」

正直に言おう。

俺は智治の兄貴は好きだ。それはもう、めっちゃ可愛がってくれたから。だが、対する姉さんは違う。

……いや、いい人なんだけれど、人をからかって遊ぶ人だから気疲れしてしまう。嫌い、と言つわけじゃないが、苦手意識は持っている。

「でも、何で？」

智治の兄貴は俺が小学3年だったかのときに、大阪からこじら込んで引っ越してきた。何でも喫茶店をやりたいからだそうなのだが、詳しい事情は聞いていない。

「お兄さんが喫茶店をやる言い出したんは、お兄さんの親友さんがお亡くなりになつて、その親友さんがやつてはつた喫茶店を誰が継ぐんか問題になつたかららしいねん」

「ほあん」

んで？それが何で同居の話になんねん。

俺の顔を見てそれが伝わったのか、お袋は苦笑した。

「その親友さん、3人の子供があつてん。当時はまだ長男が成人する前やつたから、お兄さんが継ぐことでその喫茶店続けてられたん

やけどな？」

「その長男さんが成人したお陰で、智治の兄貴は追い出されたらしい。」

「蓮」

窘めるように名を呼ばれ、俺は「堪忍」と呟いた。

確かに、言い方が悪かった。

「お兄さんは自分から言つたらしいねん。自分は手を引くせかい、後は自分たちで切り盛りせえやつで」

で、住む場所を失つた。

「アホやん、智治の兄貴」

「まあまあ。

でも本当は、長男が成人してすぐにお兄さんは出のつもりだったらしいねんけど、その長男がまだいてくださいこやつて、ここまで持つたんやで？」

んじゃ、もうとつぐのとつに成人になつてた、と。

俺は「ふつと」と言いながら茶を飲み、何となく尋ねた。

「今何歳なん?」

するとお袋は、腕を組んで顎に手を添えた。考えるときのいつも
の癖ポーズだ。

「確か、25やつたなあ」

「25……。なんや、ほんばせんなあ」

「蓮」

「堪忍」

お袋は「もつ」とため息をつくと、苦笑して「まあ」と続けた。

「去年から決めてたらしくて、来年から同屈することになるからね。今は様子を見ないといけないらしいから」

少し曇った表情のお袋を見て、俺はそれ以上追求することはしなかつた。ただ、少し気になつた。

今は様子を見る、って……事情持ち?

「来年からは正社員として雇つて話になつてね?長男がマスター、次男がサポートに回るらしこいんよ」

「ふうん……。末っ子は?」

「まだ高校生やで。せやから、アルバイトかな。確か、蓮と同一年

「」

「同じ年?ふうん。」

さほど興味がないと言つ顔で食器をキッチンに持つて行き、妙に

嬉しそうな顔をしているお袋を見た。

「……どないしたん? サッキから」

「ん~へ~」

明らかに上機嫌だ。

理由は分からぬが、それほどに嬉しいのだろう。何かが。

「お風呂掃除、お願ひね?」

「ん」

俺は風呂を沸かしに風呂場に行き、またリビングに戻つてソファーに座る。それでもやつぱり、お袋は嬉しそうだ。

何がそんなに楽しいのか、と言えば、やつぱり智治の兄貴と住むことしかないだろう。ないはずなんだが、何だかそれにしても異様に楽しそうだ。

…………ん? ああ~!

カレンダーを手にして、よつやく氣づいた。

「結婚記念日か」

「大正解!」

クルツと振り返ったお袋の手には、白い封筒が挟まれている。

「蓮が学校に行っている間に届いたんよ。お父さんからで」

ははあ。それで上機嫌なわけだ。

俺はようやく納得して頷くと、ソファーに深く腰掛けた。

別に今の俺は、親父が嫌いとか言う感情はない。

憎んでもいないし、恨んでもない。中学のときは、月に一度フアミレスで会っていたのだが、彼女の件があつてしまはなかつた。

寂しい、と言つわけでもないが、何だか物足りない気分にはなる。

それに、親父を恨んだって仕方がないし、何より今のお袋を見れば、恨みなんか消えるだろう。

「…………ハア」

恋は恋つて、本当だな。

微かに甘い香りだった。

しつこくない甘い香りが、鼻腔をくすぐっていた。独特なのにすんなりと馴染んでしまいそうになるその香りは、例えると菓子みたいだと思った。

そんな香りを、俺は朝、登校中にかいでのいた。

……かいでのいた、つて何だか変態っぽいな。

「あ、あの、高瀬君」

顔を上げると、そこにほ頬を微かに赤らめている女子がいた。同じクラスの子じゃないのに見えた。

「ん？」

「あの、これ……」

差し出されたのは、所々が焦げているクッキーだった。それを見て、また今朝の匂いを思い出す。

「くれるの？」

「あ、はーー！」

微かに震えている手からヒョイッとその袋を取ると、今朝の匂いとは少し違う匂いがした。でも、どこか似ている。

「……もしかして、わざわざ作ってくれたの？」

「あ、うん。あの、高瀬君に食べてもらいたくて」

モジモジとしている女子を見て、俺はようやく笑った。

「ありがとう」

すると、何人かの女子が後ろからズドドドドッと駆け寄ってきたかと思うと、俺の机の上にたくさんの菓子をバンバン置いてキヤー叫びながら教室を出て行つた。

「…………」

山のよくなつた菓子を見て、周りの男子の恨めしげな視線を見て、物凄い困つた。もちろん、誰より先に話しかけてきたのは直人だつた。

「なあ蓮」

「ん？」

「殴つていいか？」

拳の準備ができている直人はチラチラと俺の目の前でそれを左右に振つてゐる。俺は苦笑しながら首を振つた。

「嫌に決まつてんだる」

「なら、一つでいいからくれ

「駄目だよ」

伸びてきている手を全て叩き、カバンから紙袋を取り出して中に入れた。それを見た直人は、「紙袋持ってきてんのかよ」と、半ば呆れたように言っている。

「一つくらいいいだろ?...」

周囲にいた男子たちが「そーだそーだ!」と抗議の声を上げている。俺はため息をつくと、苦笑しながら言つた。

「これは、あの子達が俺にしてくれたやつなんだから、俺が食わないや駄目だろ」

すると、周囲にいた女子たちが一気にキャーーン!と騒いだ。それを見て、恨みがましい目がより一層深まる。

「もてる男は一味違うねえ」

「凡人の俺たちと言つことが違つ」

「あー、やだやだ。完璧なやつほど嫌な奴はない」

そう言いながらも人のよさそうな顔をしているから、俺も安心しながら笑つた。

2、理由

8月と言えば夏。

夏と言えば夏休み、プール、海。

夏休みと言えば宿題。プールと言えば水。海と言えば

「ナンパだあ！！！」

と、拳を高らかに振り上げている海パン野郎が俺の隣にいた。目をギラギラさせて周りを　女子を見ている。

「……なあ直人」

「あ、あ、？！」

「お前、菖蒲はどうしたんだよ？」

ため息混じりにそう尋ねると、直人は動きを止め、それからこつちを振り向いた。その目は真剣と言ひ乍ら、怒つていてるような色合いだ。

けれどすぐにその目を逸らしたかと思つと、

「誰のせいでも身動き取れないと思つてるんだよ、この大馬鹿野郎」

と、ボソッと呟きやがった。

理由は分からぬが、どうやら今は身動きが取れないらしい。俺のせいで。

好きな子に構つてもらえないから、今は違う女子で気を紛らわそうと。そう言つことだらう。

「お前、呆れるくらい女子好きだよな」

「もちろんだ！」

そう言いながら駆け出した直人を見て、俺は深々とため息をついた。

「高瀬じゅん」

いきなり後ろから声をかけられた俺は、手に持っていたかき氷を落としそうになりながら振り向いた。

茶髪の髪で、前髪がない。というか、前髪が左右上に分けられている。筋肉マッチョのこいつ、 笹原 健太は、クラスの友達だ。

「海に男1人って、悲しすぎるだろ」

呆れたような哀れむ視線に、俺は苦笑を浮かべた。

「残念。男1人じゃなくて、男2人だ。もう一人は女子をはべらせようと頑張っている最中らしい」

海のまつに指を向けると、健太も納得したらしく頷いた。

「ナンパ、か

「ナンパ、だ

俺たちは顔を見合わせると、「ハア」と大きなため息をついた。

「で？お前はどうしたんだ？彼女と、なわけねえよな」

「なんでないんだよ！彼女とだよ！」

怒ったよつに声を出した健太は、言つてから「こや」と口元をついた。

何や？ いつまでも色々と複雑のよつだ。

「彼女、ではないか。まだ

「まだ？」

「そのうち、なるかもしないやつ

「つまりは、まだお前の斤想い」

「ぬせーか。いつまでも

そう言つなり俺の隣に座つた健太は、重いため息をつくと、俺の髪をじつと睨んだ。

「ん？」

「……お前、何で髪染めねえーの？」

俺は茶髪にした健太の髪を見て、自分の髪を触つて唸る。

「何でつて言われても、面倒だからつてしか答へらんねえーな」

苦笑している俺を見て、「だよな」と健太も苦笑を返す。何でいきなり髪の話になつたのかは知らないが、どうやら悩み事らしいと言いつことだけは分かる。

「悩み事なら、相談乗るぞ？」

そう言つて健太を見ると、

「お前に言つてどうすんだよ」

と、苦笑を返されてしまった。

……む？

「んじゃ、俺はもう行くわ。直人がションボリ肩落として帰つて來たしな」

そう言われて海のほうを見ると、確かにナンパに失敗した直人が肩を落としているのが見える。

後ろで「じやな」と健太が言つたと、俺が直人のほうに歩き出しそ

たのはほぼ同時だった。

「おい、直人」

あからさまにいじけている直人の肩を叩き、俺は隣に腰を下ろす。

「ナンパの1回や2回や3回や4回の失敗で落ち込むなよ。たかが15回だろ?」

「もう15回だ。たかが何て言えるのはお前くらいだつての」

彼氏持ちの女子を狙つお前が悪い。

恨めしげな目を向ける直人を無視して、俺は空を見上げた。

あの頃の空とはまた違つて、晴れ晴れとした晴天だ。日差しが暑く、体中が砂の熱で焼けるかもしれない。

「……俺、振られたんだよ」

「さつきの女子たちにか?」

「違う! 菖蒲に、さ」

咄嗟には反応できなかつた。ただゆっくりと、直人のほつに目を向けた。そのときの直人の目は、酷く静かだった。

何故彼氏持ちの女子ばかりを狙つているのか。その理由は、最初から分かつていた。

「どうしても、忘れられないからって言われてや」

「…………」

「あいつ、ずっと苦しんでる。

お前を忘れようと思つて、でも、忘れ方が分からないんだって。思つ出にできないくらい、想いが膨らんだんだって。だから、辛いつ。

「ずっと言つひたよ」

空を見上げている直人が、田に映る。無表情のその顔から分かるのは、彼が悲しいと思つてることだけだ。他の感情は、一切見えない。分からない。

「…………」

俺は、何も言えなかつた。言えるはずがなかつた。

だつて今もまだ、俺は彼女を忘れられない。彼女以外を、愛せない。同じ気持ちだなんて言えないし、でも嘘だつて言えるはずがない。

だから俺は、何も言えない。

「別れなくとも、いいんじゃないか？」

この言葉を、実行できたのなら、どんなによかったか。

「互いに想い合つてるなら、無理して別れる必要ないだろ？何で別れなきゃいけなかつたんだよ。何で……なんであつ

それ以上は口にしない直人の目から、涙が滑り落ちていくのを、俺は見た。その涙が、砂の上に落ちるのを見て、あの日の彼女を思い出す。

「……俺たち、双子なんだ」

あの日、あいつは必死に笑ってた。涙を流すまいとして、それでも涙が零れ落ちてた。そんな彼女が愛しくて、愛しくて。

「姉弟なんだから、結婚なんて、できないだろ」

どんなに強く想つっていても。どんなに心が惹かれていても。

超えてはいけない1線がある。超えられない1線がある。そしてその1線が、これなんだ。

「どんなに好きになつても、それは姉弟愛なんだよ。それ以上になることもなれば、それ以下になつてもいけない。

そう考へると、恋人よりも姉弟のほうが、絶対に繋がりは強いつて。だから、我慢していく。忘れられるつて、高をくくつてた

でも、そんなことなかつた。

いくら姉弟だと知らされていても、今まで培つてきた想いに変わりはない。崩れることもない。むしろ、知つてから増した想いのほうが強い。

姉弟じゃ、駄目なんだ。恋人としてじゃなきや、駄目なんだ。で

も、恋人には、なれないんだ。

「……決めたんだ。2人で」

真実を知った、あの日に。俺たちは自分たちの意思で、別れを決めたんだ。

あのとき、意地を通しても付き合つと言ひ張つていたら、きつとお袋も親父も承諾してくれていただろ。でもそれは、お袋と親父が悲しむことだつて知っていたから、できなかつた。

育ててくれた、親だから。

俺たち2人の、親だから。

「だから」の約束は、「」の約束だけは、絶対に果たさないといけないんだよ。

どれだけ大きな想いを抱えていたとしても。それを、踏みにじることになるとしても」

これだけは、変えられない。

空は晴れ晴れとしている。悔しくらいの、眩しくらいの色と一緒に流れ込んでくる景色がある。

あのときの、彼女の涙。そして、笑顔。

「……あいつが忘れられないって言つない。あいつが自分から、俺のことを忘れられないって言つなんら」

空から海へ、海から直人へと視線を移し、俺は頭を下げた。

「でもしなければ、真っ直ぐにこいつを見れなかつた。

「お前が、俺を忘れさせてやつてくれ」

息を呑む音が、微かに聞こえた。波の音と、カモメの鳴き声と、周りの奴らの雑談。そんな音に混じつて聞こえてきた音が、一つ。

「……なんで、俺なんだよ？」

直人の、消え入るような小さな声だった。

「何で、振られた俺に言うんだよ……？そんなに想つてるなら、何でそばにいてやらないんだよ。何で両思いのくせに、他人に預けられんだよ。お前ら、意味わからねえーよ！」

その目が、涙でそれ以上声が出ない代わりに、雄弁に語っていた。

自分じゃ、俺を忘れさせることなんて出来ないんだつて。自分の一番好きな奴を幸せに出来ないのに、他人にそいつを頼むんじゃねえーつて。

分かつてゐるんだよ、そんなことくらい。それでも駄目なものは駄目なんだつて、お前も知つてるだろ？

「いつに限つて人の心を読まない馬鹿を見て、俺は呆れたよつて笑つてやつた。

「俺じや駄目なんだよ。あいつのためにも、俺のためにも、俺たち

は離れなきやいけない。じゃなきや、前に進めない

進まなければいけないって、分かつてゐるから。

「俺は、お前に菖蒲を任せたい。お前だから、任せられるんだ」

お前じゃなかつたら、お前がいなかつたら、俺は絶対に、あのときにはキッチパリと別れられなかつた。あの日、お前の想いを知らないままだつたら、俺は今も付き合つていた。

だからこそ、頼みたいんだ。

「だから、頼む。お前との思い出で、俺との思い出を消していくてくれ

「……嫌だと、言つたら？」

顔を上げると、俯いている直人がいた。さつと今、こここの心は激しくらい揺れている。菖蒲が好きだと言つ気持ちと、俺じや黙目だといつ気持ちで。

でもひ。お前が“嫌だ”なんて、口が裂けても言えないだろ？

「本気だつて、言つたら」

あの日、お前は真つ直ぐに俺を見て、言つたじゃないかよ。だから俺は、安心して別れたんだ。

「あれは、嘘だつたのかよ？」

違つただろ？マジだつたから、あんなこと書つたんだろ？

「菖蒲のことが本氣で好きで、ナンパだと言ひながらラブな彼氏持ちの女にしか声をかけないお前が」

自嘲するかのような笑みを浮かべた直人を見て、俺はニッカリと笑つてやつた。

「嫌だなんて言えるわけないんだよ」

菖蒲が好きで、だから忘れられない。だから、ナンパと言つて女子に声をかける。だが、その女の子に答えられても困るから、わざわざ彼氏持ちに声をかけていたんだ。

だから、失敗するんだよ。

だから、お前に頼むんだよ。

そこまで本氣で、菖蒲に惚れているお前だからこそ

託すんだよ

夏休みが終わり、登校初日に、またあの香りがした。やっぱり登校中のこととで、俺は何故だか、その香りが嫌に印象に残っていた。

「で？」

俺の目の前に立るのは、クラスの半分くらいのやつりだった。

「お前らは俺に何の用なんだ？」

大体察しはついてる。大方、宿題を~~与~~をせてもらいたいところだとだり。

つーか、俺の前に並んで立ってるこの時間を勉強に使えよ。

「何でやつてこないんだよ」

そう言いながらも宿題を手渡してしまつ俺に、隣の女子が呆れたように笑っていた。

「高瀬君も大変だね」

「そういう瀬川はやって来てんのかよ？」

「もうつー。」

そう言ってパラパラと捲った宿題は、

「白紙じゃん」

「Y e s！」

……ハア。

そんなこんなで、俺の宿題はいつの間にかクラス中を回り、ついには他クラスにまで旅に出てしまっていた。

「なあ直人」

「おん？」

俺の宿題を事前に写していた直人は、それはもう涼しい顔で汗水たらして頑張っているクラスメートたちを見てニヤニヤしていた。

「お前、さつきからキモイで。何があつたんや」

すると直人は、俺に向き直つて俺の肩を叩いた。その顔は、どこまでも嬉しそうだ。

「いいことがあつたんだよ」

「ほお？」

何が?と促す前に、直人は立ち上がって拳を振り上げていた。

「ようやく今日会えるんだあ！――！」

……そこかよ。

俺はまたため息をつきながら、ニヤニヤと気持ち悪い直人を尻目に、何とはなしに朝の香りを思い出していた。

お菓子に何より近い香りで、甘すぎないあの香り。懐かしいようなその香りは、どこかでかいだことがある気がする。

「……ど、だったかなあ」

気づけばそればっかり考えている俺は、どこかおかしいのかもしれない、直人を見ながら思つた。

……あんなふうにはなりたくないな。

3、喧嘩

「馬鹿やろ」

「るせー……」

そっぽを向いてムクレタ表情の直人の左頬は、赤く腫れている。それをやつた犯人は俺だが、状況が状況だった為に、特に喧嘩になるようなこともなかつた。

「何であないなこと言つたんや、自分。馬鹿やろ？」

やつぱり“馬鹿”を繰り返す俺を見て、直人はますます口を逸らす。

「だから、つるせーっての」

「「」のままやと嫌われるで。どないしてくれんねん、この馬鹿」

とつとつため息をついた直人は、やつと俺を見た。そして、すぐに口を逸らす。

「…………」

もちろん、今の俺はかなりキレてる。当たり前だ。あんなことに
なってキれない馬鹿はいない。

多分。

「ハアー……。 なあ、直人」

「んだよ」

口をへの字に曲げながら睨むように見てくる直人は、とうやく体
をこちらに向けた。

だから俺は、直人の右手に思い切り、消毒液が染み込んだ脱脂綿
を押し付けた。

「だだだだだだだつ？！」

「黙れ馬鹿」

さりに強く押し付けると、流石の直人もキレた。

「だあああああーーー！ いてえーーんだつーのーーー！ アホか？！」

目に溜まつた涙と吊りあがつた眉を見れば、確かに痛く怖いかも
しない。ただ、頬の腫れがあるせいでアホ面だ。いつもの俺だつ
たらここで大爆笑しだろう。

「お前ほどやない」

淡々と言葉を返す俺を見て、直人は物凄くバツ悪そうな顔をして

座り直した。

「……悪かったよ」

俺は直人を見て、それからため息をつくと、冷えピタを左手に持ち、そのまま直人の左頬を叩いた。

バチッ！

「だあつ？！」

跳ね上がつて痛がる直人を見て、俺はようやく爆笑した。

「ばあか！」

そう言いながら直人の手を包帯で巻くと、救急箱を閉じて肩を鳴らした。

今から一時間程前。

夏休みが終わって、衣替えになつた今日。どちらかと言うと暑がりの直人は、まだ夏服のまま登校してきた。俺はもう冬服に変えていたが、クラスではちらほらとまだ夏服の奴らがいた。

そして馬鹿な直人は、夏服の奴らを集め、「夏よ戻つて来い」やら「冬よ来るな」やらと叫んでいた。

そこまではよかつた。全然まったく持つて問題はなかつたんだ。

事件は放課後に起つた。

「それじゃ、HRを終わります」

担任がそう言つと、クラスの奴らははしゃぎだした。

今日はほとんどの部活が休みで、いつもの倍以上の人数が教室に残っていた。直人はまた夏服談論を始め、俺はそれが終わるまで、少し離れた席で本を読んでいた。

そして、彼女が来たんだ。

ガラツ！

息切れをしている少女が、教室のドアを開けて教室中を見渡していた。もちろん、クラス全員の視線が、そいつに集まつた。

白ワンピの制服は、ここらでは1枚しか着ていない。

結構有名な、女学院の制服。

短い茶髪に、大きな瞳。見覚えのあるその姿に、直人が呆然と呟いた。

「菖蒲……？」

直人の声を聞いた彼女は、ホッとしたように俺の後ろにいる直人に駆け寄った。

「よ、よかつた、まだ……帰つてなかつた」

安心したように笑つてゐる彼女を見て、もちろん周りの男子は黙つていな。

「何だよ直人！誰だよ、この可愛い子！」

1人の男子がそういうい始めるど、もちろん周りの男子たちも便乗し始める。

「メチャクチャ可愛いじやん！名前は？」

「君、直人のなんなの？フリーなら俺にしない？」

「合図しようよー。」

「マジでタイプだつて！」

口々に男子にそう言い募られた彼女は、今きっと、困つたような表情で直人を見ているんだらう。それを考へると、本より興味はそちらに引かれた。

そして、次の1言が全ての原因だった。

「何しに来たんだよ」

「冷たい一言だった。」

「……え？」

怯えたような彼女の声を聞いてから、男子たちもハッとしたように口々にまた言い出した。

「何だよ、直人！そんな言い方ないだろ！」

「そうだよ！せっかく来ててくれたのに」

「何言つてんだよ、らしくないぞ？」

直人はそれに対しても何も言わなかつた。俺は何やら様子のおかしい直人が気になつて振り向き、怯えた表情の彼女を見た。

久しぶりに、間近で見た気がした。

「何でここに来たんだって、聞いてんだよ」

その声を聞いた彼女は、酷く怯えた表情をした後、確かにこちらを見た。俺を見て、助けを求めるかのように泣いた彼女を見て、次の瞬間に大きな音を聞いた。

ガシャンッ！！！

驚いて音のするほうに目を向けると、右手で窓を割つた直人がいた。怒りのせいなのか肩が震えていて、微かに俯いているせいで表情が見えない。だが、一瞬だけ見えた。

苦しそうに、歯を食いしばっていた表情を。

「……なんで来たんだよ」

右手を下ろした直人は、彼女を凝視した。それはもう、かなり怒つている田で。

「お前、女子高だもんな。たまには男子を見たいとか思つて来たとか？」

嘲笑うかのような笑みを浮かべる直人を見て、俺はため息をついた。本を机の上に置き、直人の周りにいた男子に少し下がるよう指示を出す。

男子も、遠巻きに見ていた女子たちも、何が起ころのかとハラハラしているのが目に見える。

「やめとけって、蓮」

そう呴かれた俺は、一へラツと不敵に笑つて見せた。そしてその男子の頭を小突いた。

「平気だよ。俺は、な」

その言葉に眉を顰めた周りの男子は、俺が直人を見た瞬間に遠くへと移動した。多分、直人を見る俺の目がかなりやばかったんだろう。

「そん、なんじゃ……」

震える声が、あのときを思い起しにれる。

あの時も震えてたよな、お前。

「大方、男子といつよりは、蓮を見に来たんだうけどよ」

嫌味たっぷりの口調に、彼女はつい、と言つような感じで言葉を荒げた。

「何なのよ、さつきからー蓮は今関係なー」

ガンツ！

直人が近くの机を思い切り蹴り、彼女の肩がビクッと震えた。そして、直人は怒りが頂点に達したようだつた。

「じゃあ、何でさつきから蓮ばかり見てんだよ？ーいい加減にしろよーそんなんだからいつまで経つても忘れらー」

それ以上は言わせなかつた。

俺はギリギリのところで止めようと考へていたのだが、それよりもっと早く手が出ていた。

妙に乾いた音が、教室中に響き渡り、同時に倒れるような音も聞こえた。

直人は自分が蹴った机に体を乗せると、驚いたように俺を睨み、掴みかかってきた。

「何すんだよー！」

鬼のような形相の直人を見て、俺はどこまでも低く、冷たい声で言った。

「触んなや」

直人の手を振り払うと、直人は「なつ？！」と声を上げ、固まつた。

「自分、俺の前の言葉忘れたん？」

怒りは、じゅぢゅら俺にもあつたらしい。フツフツと煮えたぎつて、いの怒りを静めるように、俺は努めて低い声で言った。

「本気なんやつたら、傷つけんなよ」と叫ぶやないで、ドアホ

その声でようやく我に戻ったのか、直人はその場に立ち去へした。それを見てから、彼女に視線を移す。

「菖蒲

俺の声に彼女は、ビクッ！と肩を震わせた。そして、ゆっくりと俺を見て、怯えるように眉を垂らした。

「……大丈夫か？」

極めて優しい声でそう尋ねると、彼女は「クク」と震えながら頷いていた。

そんな彼女を見て、ついつい手が伸びた。

頭をクシャクシャで撫ると、彼女はゆっくりと緊張を解いた。

「すまんな。」こいつはよおつて聞かせるやかい、今日は帰り?」

「でも、

不安げにチラツと直人を見た彼女は、訴えるように俺を見た。だが俺は、頑として首を縦には振らなかつた。

「今自分が何言つても逆効果や。分かつとるやうひ?
それに、こいつがこない怒るんもしゃーないで? 悪いんは、俺らなんや!」

彼女は口を大きく見開くと、乾きかけていた涙をまた流した。その姿を見て、あの口を思い出す。

俺は震える手をギュッと握り締めると、笑つて見せた。精一杯、平氣を裝つて。

「……今日は帰り。どうじてもつちゅーんやつたら、送つてくれさかい

い

するとゆつくつと首を振り、「大丈夫」と震える声で言つた。そんな彼女を見て、俺は苦笑した。

「そないな顔するなや。

それから、こいつから謝るまでは、絶対に自分からメールしたらあかんで?電話もや。ええな?」

もう一度笑つてやると、よつやくホツとしたのか、彼女は「うん」と頷いた。そして、切なげに小さく笑つた。

「『めんね、約束……破つちやつて』

「ええで、別に。お前が、そらもび『ジシまつす』にプロテイン、飲むだけなんやから」

.....。

「ええつ?...」

素つ頗狂な叫び声をあげた彼女を見て、俺はメッチャ笑った。

「約束やろ?俺はないゆうたんになあ……約束破らなかつたら、飲む必要ないつて」

「待つてよーこれもカウントされるの?...」

「結果的に俺と会つたやろ?せやから、カウントや

「そんなの聞いてないー卑怯だよー」

「聞いてなくとも約束や。

明日、直人と一緒にプロテイン持つて家に行つたるさかい、楽しみに待つとれな?」

「嫌だ!絶対に嫌!」

「約束やもん、しゃーないわ

シレッと返すと、彼女は「うげえ」と気持ち悪そうな顔をした。

そんな顔を見て、俺は思わず噴出していた。

「そないアホ面しどつたら、男が逃げるで？」

「そ、そんなことないもん！」

「あるある！」

「ないつー！」

必死になつてゐる彼女に、「はいはい」と手をヒラヒラと振ると、やっぱり前と同じよつに、「ふが つー」と妙な怒り方をする。それを見て、俺は彼女の手を自分の手で覆い隠した。

これ以上はもう、そばにいてはいけない。

「もう、大丈夫やんな？」

彼女は動きを止めると、しばらくしてから小さく頷いた。震えが止まつた手を、また微かに震わせながら。

「せやつたら、もう帰り。俺はこれから、馬鹿を治したらなあかんさかい」

「……分かった」

ようやくいつも通りに戻つた彼女は、駆け足で教室を出て行つた。それを最後まで見送つた後、俺は盛大なため息をついた。そして、振り返ることなく言つた。

「あんまあいつ、泣かせるなや?」

あの時の涙と、今の涙と。どちらも辛かつたけど、今の涙のほうが切なかつた。

あの涙を止められたとしても、拭つてやる手を、俺はもつ捨てたから。

「……せやないと、俺が搔つ攫つで?」

振り返つて直人を睨むと、あいつはこれ以上ないくらい田を大きく見開き、衝撃を受けていた。

それで十分だつた。

「さて。

保健室行くぞ、直人。早く怪我の治療しないと、化膿するだらうしな」

そう言つて教室を出た俺を、しばらくしてから直人が追つてきた。
妙に氣まずそつこに、田を逸らしながら。

救急箱を元の位置に戻した俺は、息を思い切り吸い込んで肺が空になるまで吐いた。

「帰るか」

時計を見ると、もう5時を過ぎていた。

「今日は早帰れる思うててんけどなあ……」

「それでもいつもよりは格段に早いだろ」

「せやな」

階段を登つて教室のドアを開けると、意外なことにクラスのやつらがまだ残っていた。

「…………」

驚いた表情の俺たちを見て、クラスのやつらはハッと息を呑んでいた。緊張しているような感じだ。

「何してんだよ？みんなして」

そう言いながら、中に入つて直人の鞄を持つと、みんなが何故かホツとしたように、肩の力を抜いていた。

「直人、かえ る前に職員室だ」

「は？」

声を出した直人に窓を指差すと、物凄いゲッソリした表情を返された。

「また俺まで叱られるのかよ。勘弁しろっての

「堪忍して～な、おかん！」

「誰がおかんやねん、アホ。お前のおかんになんてなりとーないわ、馬鹿」

そう言つて頭をバコッと叩くと、「こつてー」と声を上げて俺を睨む。そして同時に教室の空気が引き締まつた。

妙にみんな気構えしているようだ。

「ハア。ほんま、お前とおると、退屈せんわ。 色んな意味で」

屈託なく笑つた俺を見て、直人は複雑そうに口を尖らせていた。それがまた面白くて、俺は大爆笑しながら職員室に向つた。

4、手紙

あの事件の翌日。

俺たちは予告どおり、プロテイン 前に、直人が俺との勝負に負けて飲んで、ヤツバイ不評だったやつ を持つて、彼女の家に行つた。

もちろん、彼女は物凄い顔をして飲んでいた。

そして何故か、俺も飲んだ。つーか飲まされた。

彼女曰く、“今私に会いに来たことになるよね？” らしく、無理矢理飲ませた。

もう2度とあのプロテインは飲まない。絶対にっ！

そんなことを考えながら登校し、またあの香りに気づく。

「…………」

そう思いつつ、何気にこの香りがすることが嬉しい俺は、今日も妙に高いテンションで学校へと向つた。

「つーわけで

「ひむ

「付き合つことになりました」

「一ヤーハーハーハーでも嬉しそうな直人を見て、俺はため息をついた。

あの事件から1ヶ月ほど経った、文化祭の準備期間中の今、俺たちはクラスの出し物である喫茶店の準備をしていた。

「直人と菖蒲に先越されるんは、なんや悔しいなあ」

「だつたら誰か好きな奴作れよ」

そう言いながら少し切なげな直人を見て、何となく感じた。

「お前、本当に付き合つてはしないだろ？お試し期間中、か？」

動きを止めた直人は、俺を見た。それはそれは、とてもとても恨みがましい目で。

……直人がこの目をするつてことは、図星つてことか。

「……お前を」

「ん？」

「何で普段は鈍いくせに、一〇一ゅーときばっかり鋭いんだよ？」

知るか。

そんなこんなで始まった、学園祭だ。

学園祭に彼女が来るのかと思ったのだが、今はとても揺れてしまつているらしい。だから俺を見て心が折れてしまわないよう、自分から行かないと直人に言つていたらしい。

学園祭が終わつたら、夕方デートがあるので、直人は朝から上機嫌だ。

感じていた。少しずつ、少しずつ、彼女の心が直人に傾いているのを。

分かつてた。少しずつ、少しずつ、互いの想いが薄くなっていること。

思つていた。いつもいつも、毎日毎時間、同じことを、繰り返し自分に言い聞かせるように。

いい傾向なのだと。菖蒲が俺を忘れて、直人を好きになつて、付き合つことが。それが何よりもいいことだと。だから、だからこん

な感情を持つてはいけない。

「直人？」

立ち入り禁止の階段に座っていた直人は、携帯画面を見て優しげに笑っていた。小さく開かれた口を隠すように、右手で口元を覆っている。

その表情がどこまでも嬉しそうだったからなのか、俺は踵を返して元来た道を歩く。そして、またあの香りがした。

「？」

振り返つても、そこには誰もいない。

「…………」

行くあてがなくなつた俺は、何となくといつノリでその香りを追つた。そして着いた先は

「図書室？」

呴いてから、ハツとなつて周りを見る。文化祭でここいらは使われないが、何となく気になった。

甘い香りはある。けれど、その香りの正体が未だに分からぬ。

「…………」

好奇心。

どうしてこの番号に興味が引かれるのかは分からなかった。

でも、何かに指示されたかのように、俺は図書室に入つて一冊の本を手に取つた。

『sentimento? 何だ、これ』

白い表紙のこの本は普通の文庫本ほどの大きさで、真ん中に黒字でそう書かれていた。パラパラと捲ると、あるページで何かが落ちてきた。

「ん?」

拾い上げてみると、それは紙だつた。2つ折りにされたその紙には、“誰か読んで下さい”と書かれている。俺は挟まれていたページを見て、眉を顰めた。

『inconsolato(悲しみのページ)』

そう、ページ数の横に書かれていた。そしてそのページに書かれていた文は、酷く悲しかつた。

『伝えたいと思う。けれど、伝えられない。伝えられなかつた。伝えてはいけなかつた。伝えることは出来ない。』

分かりたいと思う。けれど、理解できない。理解できなかつた。理解してはいけなかつた。理解してはいけない。

触れたいと思ひ。けれど、やつぱりそれだつて。

悲しみとは、切なさとせ、何だらひ。

それを感じて、人間は成長すると書つ人がいる。けれど自分は思うんだ。

そんな思いをしなければ成長しないのならば、大人になれないといつのならば。

子供のままで、いいよと

それじゃいけないのだとこいつ」とくらじ、分かつてゐる。頭では、ちゃんと理解できてる。でも、心だけは、簡単に動かない。動けない。

分かつてゐよ。分かつてゐんだよ。でも、それでも と、その
『思いが消えない』

俺は試しに次のページを捲つてみた。また文が書かれているが、次のページには堂々と *Laughter* (喜びのページ) と書かれていた。

「…………」

わざわざ悲しみのページに手紙を挟めたのは、『』の手紙が悲しい内容だからなのだろうか？それとも、偶然？

俺は手紙を開き、目を見開いた。

紙から、微かに漂つた香り。それは、俺がずっと氣になっていた香りだった。

『』の手紙を、書いた人が……？

誰なのか。『』の香りは何なのか。『』になんにも氣になるのか。

俺はドキドキと高鳴っている心臓を抑えながら、ゆっくりと綺麗に整っている字を田で追つた。

『名前は明かせません。

でも、名前がないと不便かもしれないでの、『』と呼んで下さい。『』とは、イタリア語で雪を意味する言葉です。

私がこの手紙を書いた理由は、『』しても、誰かに知つてもらいたいことがあつたからです。

私の周りの人たちは優しくさるから、『』しても伝えられないか

だからできれば、誰でもいいから知つてもういたいと想つたからです。

もしこの手紙を読んで、私と文通をしてくださるのなら、この本のどこかのページに返事を書いてはさんでください。文化祭2日目の夕方に取りに来ます。『new』

その字を見て、内容を読んで、何故だか無性に悲しくなった。

優しすぎたら、話せない内容。でも、誰かに話したいという思いがある。そしてできれば、知つていて欲しい。『気にして欲しい。でも、誰かに心配をかけるのは嫌だ。』

そんな思いが、伝わってきたような気がした。

そしてそんな思いを、俺も知っている。

「.....」

俺は手紙をポケットに入れると、本を元の位置に戻した。

伝えられない思いがある。伝えてはいけないのだと黙つて、自分を自制した。

分かり合いたい想いがある。分かり合つてはいけない関係だと、自分を自制した。

触れたいと思う人がいる。触れてしまつたら戻れないからと、自分を自制した。

子供のままでいい。周りに“まま”と“だ”と言われたつていい。俺たちが本気なら、それでいいんだ。子供のままなら、どんなワガママでも多少は通るんだ。

でももう、餓鬼じゃないから。無知じゃないから。大人に近づいているから。

進まなければいけないから。

分かるから、分かつているから、だから

辛い

どの言葉も、共感できる。だからこそ、やつぱり辛く苦しい。

できることなら

知りたくなかつた

もう日が沈み、文化祭も終わりに近づいていた。明日はもっと盛大に盛り上がるだろう。

キャンプファイアやらフォーラークダンスやらがあつて、終わる時間もかなり遅くなるからだ。

直人はもういない。

俺は1人で、沈んでいく太陽を見ていた。ガランとした教室には俺以外誰もいなくて、それが逆に心地よかつた。

「…………」

俺は手紙を開き、文を見る。綺麗に整っている字は読みやすい大きさで、その人の性格を物語つていた。

誰なんだろう?」の香りは、一体何なんだろう?

「ねえ、か

ポケットに手紙をしまった俺は、ゆっくりと窓の外へと目を向け

た。見えるのは、山に沈んでいく夕焼けだけ。

「……菖蒲」

ポツリと、無意識のうちに呟いた言葉。

呼びたかった。

あのとき、この名を呼んで。呼び止めて、抱きしめて、キスをして。

でもそれは、許されないことだと分かっていた。だから、気持ちを殺して彼女と離れた。

それがどんなに辛いことであったとしても、俺たちは、やがては「」としかできなかつたから。

そうしなければいけないと、分かつていたから。

分かつて、いたんだ。ちゃんと。

「……っ」

視界がぼやけた。頬を、何やら生温いものが滑り落つる。俺はそれを拭うことをせず、夕焼けに見入つていた。

分かつていても、それに抗おうとする気持ちがある。自分じゃ、自分だけじゃ、抑えられない思いがある。

溢れる想いは、易々と止められるものではない。

それを知ったのは、つい最近だ。

……忘れるんだ。俺にできるのは、それだけだ。彼女への思いを殺して、直人の背中を押す。俺がしてやれることは、それだけだ。

力タツ。

小さな物音だった。でも、誰もいない教室にその音は響く。俺はゆっくりと振り返り、そのまま固まつた。

流れのくのよくな綺麗な茶色の髪。右耳についているピアスは、長さが不揃いの鎖が3本ついている。耳はどちらかと言づと細めで、まつげが長い。そんな目から、流れ出ているものを見た。

俺はしばらくその顔を見た後、小さく笑つた。

このとき、自然と笑みが浮かんでいた。

作った笑みじゃない。無理した笑みじゃない。ただ何となく、自然と、口元が緩んでいたんだ。

でも、俺が笑つた後に先ほどよりも多くの涙を流した女子を見て、俺はギョッとした。

「え、あ、ちょ……」

アタフタと慌てている俺を見て、相手も慌てて首を振つた。形の整つた唇からは、しかし何の言葉も零れ落ちない。

俺はガシガシと頭をかくと、やがてふうとため息をついたから苦笑した。

「「めん」

すると、わざとよりもつともつとたぐさん首を振る。そのままでは首が痛くなってしまつだらうなど、わざと頭をこねてしまつほど。

「……「めん、や」

小さな声だった。震えている声が、あの時の彼女を思い出せじて

酷く、切なかつた

1、返事

朝の図書室はシーンと静まり返っていた。それが寂しいようで、居心地よかつた。

俺は本に手紙の返事を挟むと、小さく息を吐き出した。

ポケットにまだ入っている手紙に触れ、昨日の帰りを思い出す。

あの後、昨日会った女子が泣き止んでから、俺たちまじぱりく話をした。

「俺、高瀬 蓮。君は？」

「中山、千沙、です」

聞くと隣のクラスらしくて、俺の評判は聞いているだとか。

……評判？

「今から帰るの？」

「え？ あ、はい……」

固い口調の中山を見て、俺は苦笑する。

「気楽に行こうよ。 同い年なんだしさ」

無言で頷いた中山は、カバンをとりに教室に戻った。

そのうちに俺は帰る準備を済ませ、廊下に出た。そして、気づいた。

あの香りが、微かに残っていること。

大きく目を見張ったときに、中山は小走りで一息ちうに駆け寄ってきた。そして、またふんわりと匂つたんだ。

俺の気になっていた、大好きな香り。

この子が。

そう思つた途端、嬉しさがこみ上げてきて。俺は、無意識のつむに満面の笑みを浮かべていた。

「え、あ、あの……」

アタフタと慌てる中山を見て、俺は「行こうか?」と声をかけた。

中山はまめに大きく頷くと、俺の歩調に合わせて歩き出した。

この子、普段はどれだけゆっくりなんだろう? このペースだと速いのかな? そう言えば、どうしてみんな手紙を書いたんだろう? この子、いつもこんなに硬いのかな?

「」の香りは、何なんだろう？

でもそのどれも聞けず、ただ自分の大好きな香りに包まれながら、中山の家まで送り届けたことしか、記憶になかった。

「あれ、蓮ちゃん。何してんだ？」

「おん？」

振り向くと、そこにはやっぱり直人がいた。片手には携帯が握り締められている。それを見て、俺は苦笑した。

「なんだよ、また喧嘩か？」

「う……」

「馬鹿だな」

そう言いながら、図書室を出た俺を追いかけてきた直人は、「お前が言づか」と文句を言つていた。

「どうせ、昨日のパートで菖蒲に言われたんだろう？」 馬鹿は好きになれないって

「誰が馬鹿だ！」

条件反射で返してきた直人に笑いかけながら、俺は教室へと向かつた。

やつぱりこんな気持ちのままじゃ、直人と付き合えない
きつと彼女はそう言った。だから直人は落ち込んでいたんだ。
意識のうちに携帯を握り締めて、苦しげに顔を歪めていたんだ。
俺を見て、憎く思つたんだ。
無

「分かつてゐる」

ポツリと呟いた言葉を、直人がどう感じたのかは分からない。でも俺は、もう一度繰り返した。

「分かつてゐるから、や」

直人の一言が、それ以外に言えない自分を、酷くちっぽけで無力
な、情けない餓鬼だと痛感させる。

「……だろ」

「？」

「本当は、嬉しいんだろ?」

驚いて振り返ると、直人はその場に立ち尽くして俺を見ていた。
その目は真剣で、同時にかなり怒っていた。

「今ならまだ間に合うだろ。今ならまだ、互いに想い合つてるんだ
から、付き合えばいいだろ」

「…………」

「何で、何でっ！何でお前は俺に任せられるんだよ？！」

……直人。

口を開いて、すぐに閉じた。頭をガシガシとかきながら困り果て、俺はゆっくりと言葉を選びながら言つた。

「ああ。確かに嬉しいよ」

「つ！」

過剰に反応する直人を見て、俺は「ただ」と続けようとして、一瞬後ろを振り返つた。あの香りが、した……気がした。

気のせいか。

そう思い直してもう一度直人を見ると、肩を微かに震わせている直人が目に入った。

「嬉しい、けど……それ以上に悲しい」

「？ どういう意味だよ」

訝しむ直人を見て、俺は苦笑した。なんと言えばいいのか、よく分からぬから。

「分からないけど、俺は多分、次菖蒲に会つても……もう、好きにはれない」

そんな予感がする。いや、予感なんて曖昧なものじゃなく、揺らぐ」とのない確信がある。

理由は、分からないうが……。

「自分の姉だから好きだけど、でも女としてはもう見れない。そんな気がするんだ」

「それで、何で悲しいんだよ」

まだ不機嫌そうな直人を見て、俺はニヤリと笑つてやつた。

「菖蒲が孤独死しちゃうんだろうと思つと悲しくて」

そうおどけて言つて見せると、直人は「よく言つて」と苦笑した。

悲しい理由は、一つだけ。

「あいつはモテるだろーが」

「なら、直人が孤独死するな」

「何でだよ」

「モテないからじゃないか?」

「はあ?...」

ようやくこいつもの調子に戻ってきたことに安堵して、俺はハハハ

ツと笑つた。

直人は俺の親友で 彼女は俺の双子の姉で

「お前知らないのかよ？俺はお前の次にモテる最きょ　」

「女子たちも地に落ちたな」

「何だよそれ！……！」

「どいつも自分と同じ、いやその何倍も何十倍も大事な奴らだから

「お前みたいな奴を支持するなんて、その女子は周りに男子がいなかつたんだろうな」

「それ、言い過ぎじゃないか……？」

本当に幸せになつて欲しいって、いつまでも笑つっていて欲しいって思うから

「言い過ぎ？……まだ抑えてるほうだぞ？」

「蓮ーお前なあー！」

「ハハハツ！」

だからお前たちの“別れ”は、自分のことより辛いんだ

俺は昨日、文化祭に参加していた。だが、その大半は図書室で過してしまった為、俺はこの学校で何が行われているのかサッパリ分からぬ。

……困った。

俺は、今頃2人で仲直りをしているであろう奴らを思い出し、首を振つた。

「流石に、邪魔しちゃ悪いしなあ」

だからといって、一緒にいる奴がいるかと言われると、いない。

そう唸り続けている俺を、クラスの奴が呼んだ。

「隣のクラスの奴が呼んでるだ？~」

その言葉ですぐに思い出すのは、中山だった。

あれから、どうしたんだろ？~家でも泣いたのかな？今日学校に来てるのは分かったけど、元気にしてるかな？

考えながらふと顔を上げて廊下を見ると、中山がいた。

「……え」

思考がまとまらない。

脳が働かない。

驚きすぎで、思考が停止した。ついでに動きも停止した。

「あ……」

俺に気づいた中山が声を上げて、その声によつやく体が動く。
何でここにいるんだ？ つか、わざわざ俺を呼んでくれた？ え、何
で、何で俺、こんなに嬉しいんだ？

早足で近づいた俺は、けれどそれ以上何も出来ずにただ「あー」と困ったように唸るだけだった。中山も困ったようになオドオドと顔を上げたり下げたりとこう動作を繰り返していた。

すると突然、俯いたままの中山が「あのー」と声を出した。

「えっと、あの、あのね？」

さう言つて少ししてから、勢いよく両手を差し出した中山を見て、
俺はさらに混乱する。

「……？ 手が、どうかした？」

すると中山は顔を上げて、呆然と自分の両手を見つめていた。そ
して「あれ？」と声を出し、それきり動かなくなつた。

「…………」

もしかして。

俺は中山の足元に落ちている紙袋を見て、苦笑した。

ああ、この子ドジなんだ。

「中山」

そつと呼びかけると、中山もは俺を見上げて首を微かに傾げた。小動物のような動きが妙に可愛らしくて、俺は思わず微笑んだ。

「？」

俺は笑いながら足元を指差し、次の中山の言葉に爆笑した。

「誰の？」

「ブツー！アツハハハハハハハツハハ！……ま、マジ腹いてえええ
！！！」

やつベーコンツーマジで天然だ！ドジでアホだ！……つかマジ
可愛い！

俺は失礼なくらい大声で、しかも腹を抱えて笑ってしまった。

そして後から聞いたのだが、あの時の俺たちは注目されていたらしく（当たり前だが）、後夜祭では格好のネタとなってしまっていた。

顔を真っ赤にして紙袋を拾い上げた中山は、まだヒーヒーと笑っている俺をよそに中身を確認し、安心したようにホッと息をついた。

そしてそのまま首を傾げ、何かを懸命に考えていた。

だが、やがてその紙袋を、涙を拭つている俺に差し出した。

「俺に？」

中山は無言で頷くと、両手をギュッと強く握り締めた。

それからゆっくりと顔を上げて、俺を見上げた。上目遣いに見る中山は、俺はギツーとする。

か、可愛い……。

「昨日の、お礼……なんだけど……」

さらに手に力を加えた中山は、言ひ出しつづけに切つ出した。

「多分、って言つより絶対、硬い……よ。わざと落としたのに形崩れでないし

俺はキョーンとの言葉を聞き、それから熱いよく紙袋を開いて中身を見た。確かにスコーンは壊れていない。

……粉々どころか、キッチリと形が残つている。

なるほど。だから考へたのか。俺に渡すか、渡さないか。

「まあ。俺の腹も頑丈だから、大丈夫だろ」

とか言いながら笑うが、その笑みは引きつっていたらつ。自覚がある。その証拠に中山は「やつぱり」と言こながら、俺の手の中にある紙袋に手を伸ばした。

その先に続けられる言葉は、もう分からきついていた。

俺は右手で中山の手を遮ると、中山が取り上げられないよつて左手で強く握り締める。

「返して、はなしな? これはもつ俺のもんやせか?」

そう意地悪く笑つて見せると、中山は田に浮かべていた涙を堪えながら、俺に遮られていた手を胸に当てる、一ヶ口と笑つた。

「ありがとう」

でもその笑みは、無理して作ったような笑みだつた。痛みを孕んだその笑顔を見て、よつやく分かつたんだ。

護つてやりたい

中山の痛みを消してあげたい。中山の苦しみを、辛酸を、悲しみ

を消し去りてしまいたい。中山の為に、何かをしてあげたい。

中山を譲りたい。

いつしかその思いが、俺の中では芽生えていた。

「……中山」

やつと中山を呼びかけると、「？」と首を微かに傾げた。そしてゆつぐつと、笑みを浮かべていった。

「どうしたの？高瀬君」

俺は下唇を噛むと、意を決して言った。

「これから、一緒に回らないか？……文化祭」

俺はじつと中山を見ていたのだが、やがて浮かんだ満面の笑みを見て、思わず目を逸らした。

護りたいと思った。それを自覚して、何だか一人で恥ずかしくなつている自分がいて、滑稽に思つ。

困つた。前はもつと、すんなりスマート且つ完璧に男らしかつたはずなの。

「えつと、じゃあ、行いつか？」

「あ、う、うん」

中山もかなり緊張しているのか、先ほどから落ち着きが無かつた。隣を歩きながら、香りを嗅ぐあの甘い香りに頬を緩めながら、どうやって中山と打ち解けあつかを考え、考え、考え、考え。

「 「 」 」

「うすればいいんだよ-----

心の叫びが中山に聞こえるはずも無ければ、その声を聞きつけ助けがくるわけでもなく。

俺たちは妙によそよそしい雰囲気のまま、文化祭を回る事になつた。

2、文化祭

「うん……。何か、なんだかなあ。

俺は青空の下にある（当たり前だナゾ）ベンチに座り、目の前でカキ氷を買っている中山を見ながら、ボンヤリとしていた。

流れるかのような綺麗な茶色の髪は、腰までの長さ。右耳についているピアスは、長さが不揃いの鎖が3本ついている。田はじけりかと言づと細めで、まつげが長い。背は160くらいだろう。

そんな中山を見ていると、周りの男子の視線が意外なことに結構集まっていることに気づく。

.....。

何となく分かつていたが、田の当たりにして不機嫌にならない奴なんていいないだろう。

「たつかーせくうーん！」

「え？」

顔を上げると、そこには瀬川が立っていた。

夏休み後少しまで隣の席だった女子で、ショートの髪を揺らしながら俺を見ていた。二二二二、と言づよりは、ニヤニヤ、という表

現が正しこよいうな笑みを浮かべて。

「ジャジャジャジャーンッ！」

「？」

差し出された紙切れを見つめ、俺は胡乱げな表情で、瀬川を見上げた。

「で？」

「……しちゃけるなあ、もつ」

そう言って不機嫌になつた瀬川は、無理矢理その手紙を俺の手に押し付け、二ツコリと笑つた。

「ラブレター」

「お前から？」

「ナワケナイデショッ」

だよな。

田の前にいるこいつは、一応彼氏がいて、第一告白するなら直で言つよくな、ストレートな性格なのだ。ありえない。

「あなたもよ～つべ知つてる人からだよ～」

「はあ？」

よく知つてゐるつて、直人？

……。

お前、菖蒲はどうしたんだ！直人おおおおおおおおおおおおおお…！

「…………一応言つておくけど、直人じゃないからね」

「だよなあ…………」

「じゃあ誰だよ。」

「でも、直人に近いね。今はあんたよりも、直人に近い。でも、彼女の心にはあんたしかいない。そう言えば分かる　みたいね」

険しい表情になつた俺を見て、瀬川は面白そうに笑いながら、手を振つて去つていった。

俺はと言えば、手紙を見つめたまま、どうすればいいのか分からず、ただ黙つて、彼女のことを思い出す。

菖蒲。

「…………高瀬、君」

後ろから聞こえた声に振り返ると、力キ氷を持った中山が立つて、俺は慌てて受け取つた。ポケットに手紙を突っ込んで。

「悪いな、待たせちゃつて」

すると中山は首を振り、「大丈夫」と言いながら、ベンチに座った。その顔はどこか、寂しげに見えた。

「…………悪い」

隣に腰を下ろして、ストローをこじりている中山の顔を見るとなく、俺は少し反省しながら言つた。声が硬かつたんだろ？ 中山が、慌てたように頭を上げていた。

「そっ、そんだっ？！ んん……そんにゅひほ、ひゅい」

変な言葉を言つからいぶかしんで中山を見ると、舌を口から出して顔を顰めていた。

もしかして。

「……舌、噛んだ？」

中山は無言で頷くと、少し涙目になりながら顔を顰めている。そんな中山を、俺は穏やかで温かな気持ちで見やる。

笑いを堪えるのはなかなか難しい。口元が緩んで、それを目敏く見つけた中山が、先ほどよりも険しい表情となつた。

「高瀬君で、意外に酷いんだね」

「ん？」

「見逃してくれればいいのに……」

「いやいや。あんな派手に舌噛んでおきながら、それを言つちや黙田だろ」

苦笑しながら、「むう」と唸つた。そしてその顔が、彼女と重なった。

『何を何ぞ、蓮のばあか！』

『これくらい見逃してよー。』

確か、初デートの日だ。

足を捻つて近くの電信柱に寄りかかった、までは良かつた。だが、ヒールがはまつて抜けなくなっていることに気がかず、歩き出さうとして前のめりに転んだのだ。

そして、顔面を強打して鼻血を出し、結局そのままの状態でデートは延長。あの時、起き上がつてすぐの言葉が、それだったのだ。そして、俺が返した言葉は、やっぱり中山に言つた言葉と同じだった。

……あいつの場合は本当に、『これくらい』、なんともんじやなかつたしな。

思い出し笑いしてしまった俺は、中山が座っている場所と逆のほうに顔を向け、小さく笑つた。

「……ばあか

ドキッ。

思わず中山に田を向けて、俺は微笑んだ。

ああ、そつか。俺、”彼女”のことが、好きなんだ。

「高瀬君なんか、大ッ嫌い」

口を尖らせて、力キ氷の氷を懸命に溶かしている彼女の頭を、俺は笑いながら軽く叩いた。

「悪かつたって！」

「絶対に思つて無いじやん！」

「あ、ばれた？」

「もう！……」

クスクスと笑つてやると、彼女は頬を膨らませてそっぽを向いた。そんな彼女が愛らしくて、俺は爆笑した。

「やつぱりお面白いな！」

「絶対に褒めてないでしょー！」

「そりゃな？」

「もう……」

「ハハハツ！」

腹を抱えて笑つてやると、彼女は立ち上がり歩き出した。それを追いかけながら、俺は笑い続けていた。

「悪かつたつてば～」

「思つてないのに言われても、嬉しくないもん

「いやいや、思つてゐるつてー…………少し」

「少しい？」

振り向いた彼女は、鬼のような形相をした化け物に変わっていた。今にも角を出そうと、鼻息荒くして、助走をつけてやがる化け物に見えて、俺は笑った。

いつだつたかな。あいつもこんな風に見えたんだよな。今となつたら、懐かしいだけだけ。

「ほらほら、カキ氷がこぼれるぞ？」

慌てて手を持ち上げた彼女は、1点を見つめたまま、黙り込んでいた。その視線を向けると、俺のポケットらしい。

さつき瀬川から貰つた手紙を入れたポケットだ。

「……気になるか?」「

ハツと顔を上げた彼女は、すぐに手を逸らして首を振った。俯き加減だったため、髪がさらりと落ちる。

「じめん」

「いや」

俺は力キ氷にさしているストローから手を離し、ポケットに突っ込んで手紙を取り出した。そして彼女を見る。

「読んでもいいか?一応、気になつててや」

すると彼女はゆっくりと頷き、階段まで移動してくれた。1階の踊り場付近に座り込むと、窓から中庭の様子がよく見えた。何かのイベントの準備をしている。

本當なら、彼女のすぐそばで読んではいけないだろう。そんな無神経なことをしちゃいけないって事くらい知ってる。なら、どうしてそんなことをするのか。

決まつてる。

「…………」

寂しそうな悲しそうな表情で俯いている彼女は、切なげに手を伏せていた。そんな表情を見て、確信したかった。

彼女が、俺に好意を寄せてくれていると言つ事を。

自意識過剰だ。

でも、それでもこんな態度をとられたら、思わず止まらない。
そして、俺の気持ちは浮上していくのだ。

手紙を見る前までは。

『蓮へ。 3時に中庭に来てください。 薑蒲よつ』

いつもなら“アヤメ”と書くのに、今日に限って漢字で書いている。それを見て確信した。何を言つつもりなのかを。

「……今、何時が分かる?」

「え?え?と……1時、だけど」

どうして?と言つ表情を向けた彼女に文面を見せる。それを見た彼女は、開けていた口を閉じて俯いた。

「確かに3時って、中庭でイベントがあるんだったよな

「うん」

「どんなだけ?」

さう意地悪く笑いながら問うと、彼女は泣きそうな顔で俺を睨む。

「……告白タイム」

「まんまのネーミングだよなあ

クックックと笑つて見せると、彼女は怒つたよつと立ち上がり、階段を登つていぐ。それを追つことなく、俺は一言だけ、

「行かないよ

と言つた。

足音が止まり、彼女が立ち止まつてこじを、知らせてくれる。

「俺は中庭に行かない。菖蒲に会いに行かない」

「……………？」

震える声が耳に届き、泣いているのだろうと思つた。いや、もしかしたら泣くのを堪えていいのかもしれない。

「どうして、行かないの？」

何故。

そんなの、決まってるだろ。

行っちゃいけないからだ。

「何で、答えてあげないの？」

お前が、好きだから。

「どうして……彼女を選ばないの？」

お前を、選びたいから。

階段前にある窓のある中庭では、せっせと準備が行われている。

「行けば、あいつは俺に、呪すらんだひつな。でも、もし俺が行かなければ、あいつは諦める。

そういう奴だ

いつもそうだ。あいつは大切な何かをする時、いつも勇気が出なかつた。だから賭けに出でていた。もじこいつなつたら実行して、ならなかつたら諦めよう、と。

それを知っているから、行けない。俺たちも、もう別々に歩き出さなきやいけないから。

「……そういう奴だつて、分かっているの、行かないの？」

「ああ

「どうして、君それなによつとしてるの？答えてあげればいいじゃない。その答えがいい答えでも、悪い答えでも、それでも言つてあげればいいじゃない！ うしなわせ、菖蒲さんね……つー

振り返ると、溢れ出た涙を拭つてゐる彼女が田に飛び込んできた。そして、泣きながら俺を睨む。

「高瀬君の馬鹿！」

走り去る彼女の背を見送りながら、俺は深いため息を吐いた。

3、追いたくて

時計の針は、3時を差していた。それを見ながら、俺はため息を吐く。教室の机に腰をかけ、今頃、グラウンドで準備をしている直人を思い浮かべた。

後2時間もすれば、他の奴らも一旦、教室に戻ってくることになる。そして、LHRをしてから、グラウンドでまた騒ぐ。

だからそれまでは、ここで1人きりになれるのだ。

あいつは、知ってるのかな。

「…………」

外に目を向けた俺は、沈んでいく夕日を見たまま小さく笑う。あの日を、彼女と初めて話した日を、思い出す。

結局、俺は行かなかつた。

あの後しばらくしてから学校中を走り回つたのだが、彼女を見つけることは出来なかつた。

探していないのは、屋上と図書室。さつと今、彼女は図書室にいるだろう。だが、今はいけない。

ポケットに入っている別の手紙を取り出して、俺は自嘲気味の笑

みを浮かべた。

『文化祭2日目の夕方に取りに来ます』

だから彼女は今、図書室にいるだろ。忘れないのであれば。
外を見たまま、俺は手紙をポケットに仕舞つて、ため息をつく。
何度思い返しても、悪いのは俺だ。だが、それでも嬉しかったんだ。
あいつの為に、泣いてくれた。俺の為に、怒つてくれた。

他人の為に。それが出来る彼女を、本当に尊敬して、そして嬉しく思った。感謝した。

そんなことが出来る人は、本当に少ないものだ。損得関係なく、
無意識のうちにしてしまう人というのは。

『私の周りの人たちは優しすぎるから、どうしても伝えられないか
ら』

その言葉に俺も共感した。

同じような思いを、してきたから分かるものもあるだろ。でも、
彼女と俺の境遇がまったく同じと言つことは、決してない。

そう考へると、あの言葉でよかつたのか、不安になる。

手紙の内容を思い出して、またため息をついた。

「……どうつか」

さつと彼女は、あの手紙をもつ持つてこる。書き直さうと迷つてペンを持つても、また同じような内容になる。だから仕方がなく、そのまま出した。

出した、んだが。

「…………はあ」

ため息はなくならない。

手紙の内容を思い出して、またため息をついた。

『ねえさんへ

俺も似たような思いをしたことがあります。そして今も、俺は苦しんでいます。だ

から君に苦しんでもしづくはない。俺が話を聞くことで、君の重みが消えるなら、俺が君の文通相手になります。

俺の名前は高瀬 蓮。

もし、俺と文通して、心が少しでも軽くなつたなら、いつか、君から会いに来てください。

それから、俺の悩みも、聞いてほしい。

会いにきててくれたとき』、俺は、俺の悩みを、君に打ち明けます。

だからどうか、会いに来てください。

蓮

…………。

ものすうじいクサイ台詞のよつたな気がする。

言つちやいけないような気がする。

つーか、恥ずかしそぎて、もう彼女の顔が、見れないかもしけない。

「あああああー」

悶えている俺は頭を抱え、ため息をつきながら、窓の外に目を向けた。そして、無意識のうちに、呟いていた。

「…………菖蒲」

俺は、お前の気持ちにはもう、答えてやれない。俺は、お前から離れると決め、お前も、俺から離れることを決めた。

それは一方的なわけでもなく、押し付けられたことでもない。俺たち2人が考えて決めたことだ。

それを、今更“やめよう”なんて、言つよつた奴じゃない。一度決めたことは、決してたがえることなく、貫き通す。

それが、俺の知ってる “菖蒲”だ。

「でも、なあ……」

手紙が、俺宛だったことも、また事実。

またため息をついた俺は、時計の長針が6を指していることに気づき、自嘲する。あれから30分もの間、俺はここで、一人悩み続けていたらしい。

立ち上がって、教室を出ようとドアを見たところで、俺の足は止まつた。目の前にいたのは、俺が今、1番会いたくないと思つていた奴だった。

「直人……」

「…………

「……悪いな」

ポツリと呟かれた言葉に、一瞬驚く。

「んで、お前が謝るんだよ?」

「……約束しただろ? “菖蒲から、お前を忘れてやる”、って。

“俺だから、菖蒲を任せたい。俺だから、任せられる”。

そう、言ってくれたのに……、さ。結局、無理だったから

そう言つた直人の目は、悲しみと切なさと、悔しさと苦しさが混じつていた。

どれだけ直人が、彼女のこと好きだったのか。それは、痛いほど、よく分かっているつもりだ。だから、任せたかった。

重荷だつたんだな。

好きだからこそ、任せた。でもそれは、直人にとっては、直人にとっては、とても重いことだったのかもしれない。だから、こいつは今、こんなにも苦しい表情で、ここにいるんだ。

「俺との思い出で、お前との思い出を消していくってくれ、って……
言われたはずなのにな」

もういい。

俺は頭を伏せ、直人から頭を逸らした。だが、すぐに頬に痛みが走り、気づけばその場に座りこんでいた。

直人が、俺を殴ったのだ。

「……俺は、お前が憎い」

「なお

「黙つて聞いてくれ

俺は開いていた口を閉じ、黙つて直人を見つめた。苦しげな表情は、けれど静かな目をしている。

まるで、俺に全てを託そうといつ田に見えて、嫌な汗をかく。

「俺はお前が菖蒲を好きになる前から、菖蒲が好きだつた」

「一。」

「だから、俺は菖蒲の相談役になつた。お前のことが好きだ、って、教えられたときからずっと、あいつのそばで、お前らの恋を取り持つてた。」

菖蒲が、好きだつたから

直人の目が、どんどん静かになつていいく。それを見ながら、俺はまた目を伏せて、直人に殴られる。

「逃げるなよ。目を逸らして、逃げるな」

同じところに、躊躇も戸惑いもなく殴りやがつた直人を、真つ直ぐに見て、俺は立ち上がつた。血の味がするのは、絶対に氣のせいじゃないだろう。

「でもあいつは、どう頑張つても、足搔いても、お前を忘れられなかつた。」

これは本当に、姉弟愛なのか？違うんじゃないのかよ？

あいつはお前を、1人の男として、見てるんじゃないのかよ？だから今も、あんなに苦しんでる

「…………」

「あいつはお前を、好きなんじゃない。もう、愛してるんだよ。だから引き返せない。俺に乗り換えることも、思い出を消す事も、お前への思いを、無くすことも。

……俺は、あいつの一番近くで、あいつがどれだけ頑張ったのかを、知ってる。だから、言える

直人は目を逸らすことなく、俺を見ている。俺も、もう逃げられないと腹を括って、直人を見つめた。

分かっていたんだ、本当は。

彼女は俺を忘れないだろう、って事くらい、彼女が学校に来た時から、分かっていた。

でも、気づきたくなかったんだ。だから、気づかないフリをして、俺は逃げた。そうしなければ、前に進めないと思つたから。

“彼女”と、真っ直ぐ対峙するのが、恐かったから。

「無理だ」

「……」

目を見開いて、直人を見た。あいつは俺を見たまま、黙つていた。

「……無理なんだよ。あいつが、自分から忘れるなんて事。できるわけがないんだ」

「…………」

「お前が、直接伝えなきや。そつしなきや、あいつは忘れられない。
諦めきれないんだ。だから俺は、お前に聞きたい」「

気づけば廊下に、『彼女』がいた。制服姿で、真っ直ぐに俺を見て、泣いていた。その隣には瀬川がいて、不安げな表情で、俺たちを見ていた。

「…………」

「お前は、菖蒲と中山。どっちを取るんだ？」

彼女の痛みを孕んだが笑みが浮かんできて、俺は思つ。

護つてやりたい。

そして、泣く『彼女』を見て、思つんだ。

笑つていてほしい。

答えなんて、決まつてゐる。

「…………菖蒲」

呼ぶと彼女は一歩に下がり、けれど俺が近づいていくと、自分がもう近づいてきた。

自分よりも、背が低いカノジョを見下ろして、俺は頭を上げる。

「「」めん」

誠心誠意を尽くして。ただ頭を下げるまま、それ以上何も言わない。

「……好きな人が、できたの?」

震える声に、俺はゆっくりと起き上がり、静かに頷いた。

「私じゃ……駄目なの?」

涙で揺れる瞳や、震える声、肩。そのどれもが愛しいと思えるのに、そばにいてほしいと願っているはずなのに、それなのに。

なにかが違う。

笑つていてほしいと、本当にそれがほりほりの。△

「どう、して……。私じゃ、駄目なの?」

彼女じゃないと、駄目な理由。彼女では、いけない理由。

それは常に、俺の心の最奥にあった。

「俺は、お前に笑つていてほしい。泣いてほしくない。できるなら俺が笑わせて、その笑顔を護りたい。笑顔でいさせてやりたい。そういう想ひ。

でも、違うんだ

「何、が?」

必死に震えるのを堪えている彼女を見て、俺は逸らしそうになつた目を、必死に彼女に向けた。真つ直ぐに、彼女だけを見る。

「あいつは、俺が護りたい、つて思うんだ。俺がそばにいて、護つてやりたい、支えてやりたい、力になりたい。笑わせてやりたいし、涙を拭つてやりたい。そのどれも、俺じやなきや嫌なんだ！」

でも、お前は違う。お前には、笑つていてほしいと思う。でも、その対象が、俺じやなくとも構わない、つて思つてるんだ。俺じやなきや嫌だとは、……思えないんだ」

その違ひだ。それだけだ。でも、それはとても大きな違ひだ。

それが彼女と彼女の、最も大きな違ひ。そして、彼女じやなればいけない理由。

「だから、『めん

「……嫌だ、よ」

俯いた彼女は、カタカタと震える手で、俺の手を掴む。涙が俺の手に落ちてきて、でも、それを拭おうとは思わなかつた。

「嫌だ。私は、私は蓮じやなきやイヤだもん！――！」

叫ぶように言つた菖蒲を見て、俺は首を振つた。そしてチラツと廊下を見て、そこに中山がいるのを見て、思わず叫んでしまつた。

「中山！」

すると彼女はビクッと震え、そのまま走り去ってしまった。

「中止ー待てー」

「行っちゃヤダ！」

そう言つて、俺の手を掴む手に、より一層力を込めた“彼女”は、子供のように首を振つていた。

「ヤダ！ 嫌だよー私は蓮じゃなきゃ嫌なのー！」

「菖蒲」

「イヤだもんーーー私は、私は蓮が！」

「菖蒲ーー」

叫んだ声に、彼女はビクッと肩を震わせる。田線を合わせるよう^ひに、しゃがみこんだ俺は、目を手で覆つて言い聞かせた。

「俺たちは双子だ。それを忘れるな。
……俺は、お前を好きにはなれない。お前を、女として見ること^は、もうできない。これから、どれだけ時間が経つても、俺から見たらお前は、いつまでも姉だ。
だから、お前ももう忘れる」

「れ

「忘れてくれ。頼むから……ツー

俺は、好きな奴の元に行きたいんだ。彼女の後を、中山の後を追いたい。中山を、1人にしたくない。そばにいてやりたい！

「追わせてくれ」

のろのろと、手が開く。

俺は立ち上がると、菖蒲の頭を叩いて「ありがとう」と礼を言い、そのまま教室を走り出た。

その後のことは全て、直人に任せて。

4、空白

「中山一。」

廊下を走る彼女を追いながら、俺は必死に考えていた。

教室を飛び出しますぐ、廊下にうずくまっている彼女を見つけた。そして、近づいてすぐに走り出した彼女の表情は、真っ青だった。

もしかして、病気とか……？

嫌な予感がして、けれどそれを打ち消す。

今日の前にいるやつは、全力疾走してやがるわけで？バスケ部なのに、追いつけないわけで？

…………。

「オイコラ中山一。」

何でそんなに速いんだ！――！

とか何とか、色々考えつつ喋りつつ、着いた先は、意外なことに保健室前だった。

…………何故ここに？

そんなことを思いながら、俺は闇にこびりつくまつていてる彼女を見つけた。そして、静かに近寄る。

三

「ツ！！！」

怯えたように肩を震わせ、ゆづくらと顔を上げた。その田には、涙が溜まっている。あまりにも痛々しいその姿を見て、思い切り抱きしめてやりたくなる。

だが、まだその権利は俺ない。

代わりにグツと手を握り締め、俺は彼女の目線に合わせるよう立派に片膝を立ててしまがむ。

「何で、逃げたんだ？」

...
[

彼女は答えることなく、目を逸らしていた。

俺はどうしようか迷つてすぐ、彼女が持つている紙切れを見た。

十一

すると、彼女はハツと手を引つ込め、両手でそれを膝と腹の間に隠した。俺は、それ以上そこに触れることがなく、息をついて彼女の頭を撫でる。

ビクッ！

思い切り震えた彼女を、なだめるかのよつこ、優しく、ゆっくりと。

すると、彼女の涙は徐々に消えてゆき、深呼吸をして、呼吸を整えていた。

「……もう、大丈夫か？」

「クンと頷いた彼女は、上目遣いにこちらを見て、すぐに目を逸らした。

「いつから、聞いてたんだ？」

「……菖蒲さんご、謝つてるとこから」

つーことは、最初からつてことか。

俺はため息をつき、またも怯えるように体を震わせた彼女の頭を、ポンポンと叩いた。

「んじゃ、何でお前は逃げたんだ？」

呆れているのが丸分かりの声に、彼女はバツの悪そうな顔で呟いた。

「怖かつた、から……」

「……は？」

俺は最初キヨトンとした後、そう言えば直人に殴られていたことを思い出す。

傷が怖かつたから、か？

俺は自分の頬に触れ、顔を歪めた。血もまだ微かに流れている上に、赤く腫れているのかもしない。

……こんな顔の男に追いかけられれば、といつか目が合つてしまえば逃げても当然、か？

彼女を見てため息をつくと、俺はその場にドッカリと座り込んだ。そして上を見上げ、「うーん」と唸る。

どうすればいいのか、分からぬ。

追いかけた。そして追いついた。今彼女のそばにいる。じゃあ、次は？

「……高瀬君、ホツペ」

そう言って近づいてきた彼女の目は、とても不安そうな、心配そうな色合いだった。

「だい、じょーぶ？」

震える声音に、俺は小さく笑つて見せ、すぐに顔を歪める。意外に痛い。

直人め、後で覚えてヤガレッ！

そう思つてゐると、スッと、何やら冷たいけれど柔らかなものが、頬に触れた。少し痛いが、我慢できないほどでもない。見ると、彼女の細く長い、綺麗な指だった。

「保健室、行こう?」

その言葉を聞いてようやく分かった。

「それでここにだつたのか

「え?」

不思議そうな顔をする彼女を見て、俺はニッとした。 と思う。

痛いから、あまり口角が上がらなかつた氣もするが。

「何で保健室前だつたのかな、つて思つてさ。傷の手当で、してくれるつもりだつたのか」

「…………」

彼女はポカーンとした表情で俺の後ろを見つめ、それから俺の頬を見て瞬きした。

「うん?」

「氣づかなかつた……」

……は？

見れば、彼女も驚いた表情で保健室を見ていて、俺は思わず噴出してしまった。

「アツハハハハハハツー！ つづく~~~~~！」

そして、痛みに顔を歪める。

「た、高瀬君？！」

驚いて声を上げる彼女を手で制し、俺は痛みに悶えつつ耐える。

「へーき、だつて」

「でも……」

「大丈夫だよ」

そう言つて頭を撫でると、彼女は不承不承頷き、俺の手を引っ張る。

「とにかく、早く手当しないといつー！」

小動物のような彼女を見て、俺は苦笑した。今にも泣き出しそうな彼女は、うれしそうに元気な顔で思えた。

真っ白い毛のように純粋な心、あまりに泣きすぎて赤くなってしまった目と頬。潤んだ目に、寂しそうに垂らされている眉。不安そ

うな、その表情。

本当、つさぎみたいに可愛い奴。

フツと笑つて見せると、冷えピタと絆創膏を持ってきた彼女は、「へ?」とマヌケな声を漏らした。

「いや、つさぎみたいだよな~って思つてさ

「…………?」

「そつ。何か、もつ、色々と」

そう言つて笑うと、彼女は首を傾げ、濡れたハンカチで頬の血をふき取つてから、絆創膏と冷えピタを恐る恐る貼る。

「痛くない?」

わけがない。が、俺はニツと笑つて頷いた。

「ごめんな

「え?」

「ハンカチ」

そう言つと彼女はブンブンと首を振つて小さく笑つた。

「大丈夫、役に立てて嬉しいし」

「そつか。 ありがとな、わっせよつ痛くなくなつてゐ。中山のお陰だ」

すると彼女は頬を赤らめ俯き、小さく首を振つた。

「……ごめんなさい」

「何が?」

「話、聞こちやつたから」

そういうつた彼女の手は握り締められており、微かに震えていた。
俺は先ほどの彼女を思い出し、小さく息を吐く。

「悪いつて思ううなり、俺の質問に答えてくれるか?」

「……うん

消え入りそうな声に苦笑しつつ、俺はやはり、可愛い彼女を見つめた。

抱きしめてやりたい。

そんな衝動に駆られるが、ギリギリのところで必死に理性を保つ。

「怖かつたつて、何がだ?」

ピクッと肩が動き、けれど顔を上げようとしない。ただ黙つて、下唇を噛んでいる。言い辛そうな表情を見ていると、俺の意地悪な心が顔を出す。

しばらく黙つてその様子を見ていると、手をノロノロと開いた彼女が、ポツリと呟いた。

「また、いなくなつちやつたじやないかつて、思つて」

「……は？」

意外な言葉に、俺はそんなマヌケな声しか出せなかつた。

いなくなる？何でそんなこと思つたんだ？

「…………」

「…………」

意味が分からぬ。

俺は色々と考えた挙句、分からぬまま「そつか」と呟いた。彼女はまたも頷き、黙り込んでいた。

時計を見ると既に5時を指している。あれからかなり時間が経つてこるらしく。

そーいや、「HRの時間だよな。ヤツベ、叱られるかも。

「戻るか、教室に」

そう言つて立ち上がり、彼女を振り返ることなく、保健室のドアに手を掛けようとする。と、後ろになにやら違和感を覚え、振り返

つた。そこには、彼女の頭があった。

「中山？」

そう呼びかけると、彼女は俺のブレザーを握り締めたまま、頭をくっつけてきた。まるで、それ以上行くな、と言っているかのように、少しづつ後ろに引っ張られている。

「……中山」

ピクッと動いた彼女は、離そうとした手に更に力を加え、震える声で呟いた。

「……で」

「ん？」

「行かないで……」

「……へ？」

「行かないで？　いやいや、行かない。教室にはもう、生徒が集まっているだろ。」

「中山、どうしたんだよ？」

振り向いて彼女の肩を掴むと、彼女は涙を流しているのか、嗚咽が聞こえる。

「中山？」

顔を覗きこむと、彼女は俺を見るなり抱きついてくる。

「おわつ？」

ガツツンッ！！！

「！」！？！」

あまりの驚きに後ろに足を引いてしまい、見事に頭を扉にぶつけてしまふ。いつもなら顔を上げて、必死に謝るはずの彼女は、けれど、俺に引っ付いて離れようとした。

可笑しい。

俺はそう思つて彼女を離そつとするが、彼女は首を振つて嫌がる。

「中ヨ、本当にどうしたんだ？ 具合でも悪いのか？ なあ」

そう言いながら彼女の様子を伺つが、反応はない。ただ嗚咽が聞こえ、俺を掴む手の力は緩まない。

困つた。

理性は強いほうだらう。鉄のように。が、この状況で、彼女と2人きり。そして、ここにはベッドといつものもある。
たいかつて？

我慢しづれえんだよ――――――――――

わう叫びながら我慢する俺は、本当に健気な気がする。うん、本
当に。

「「めん、なせー」

そう言いながらも、手を離さない彼女を見て、俺はため息をつきながら背を撫でる。

「いいよ、別に。惚れちまつた女にこんなことされて、嫌がる男はないだろ」

言つてから気づく。

……俺、今なんて言った？

顔を上げている彼女と目が合い、熱が上がつてくるのを感じながら、俺は彼女の頭を自分に押し付けた。心臓がやばいくらいに高鳴り、頬が熱くて熱くて仕方がない。

「たか、せく……。今、なんて」

……。

……。

……。

ああああああああああああああ！――

「~~~~~つーだからー！」

どうにでもなれだ、畜生ッ！

「中山が好きだって言つたんだよつ……！」

「ああ、本当に……。俺、なさけねえ……。頬、喋れば喋るほど
いてえーし……。」

「…………」「…………」「…………」

無言の時間がかなり長く感じられ、俺は恐る恐る、彼女の頭から手を離し、覗いてみる。すると彼女は、泣いていた。

「？！」

驚いて、アタフタとする俺を見て、彼女は華のよつな笑顔を浮かべた。それを見た俺は、頭が真っ白になっていた。

もう何も考えられず、何もできない。ただ黙つて、彼女を見つめることができなかつた。

「…………私、も」

ワタシモ？

「…………私も、高瀬君が好きだよ

気づけば、俺の目からは一筋の涙が流れていった。

「ほ、んど……」

「うん。本当に、高瀬君が好きです」

そう言つて真っ赤になりながら、けれど俯くことなく微笑み続けてくれる彼女を見て、俺は思い切り抱きしめた。

痛いくらいの力で抱きしめて、それでも何も言わずに抱きしめ返してくれる彼女の腕が、先ほどの言葉が現実なのだと教えてくれていた。

「…………っ！」

ああ、本当に。こんなにも幸せになれていいのだろうか。

そう思つてしまつぽいの幸せで、俺は止められない涙を流し続けた。

「でも、いつから？」

保健室から教室に戻り、小言を喰らつた後、後夜祭の最中に俺たちは抜け出した。後夜祭では俺たちの話でもちきりらしく、丁度いいから俺たちが付き合い出したことを報告した。

女子の間では悲鳴が、男子たちの間ではヤジが飛んだ。

「ええっと……」

困ったような、照れた表情で笑っている彼女の隣で、俺は答えを待ち続ける。

屋上には、俺たち以外にも、カップルが何組かいた。グラウンドが見える隅に座り、フォークダンスをしている奴らを眺める。

「高瀬君、泣いてたでしょ？菖蒲さんの名前を呼んで

「……あ、初めて会ったときか

そう言つと小さく頷きながら、「その時」「と弦いた。

「……は？」

「だ、だから！高瀬君が泣いちゃってたときー…

……。

泣き顔見たから惚れたって、ビーカー

そんなことを考えて落ち込んでいると、今度は彼女が、恐る恐る問いかけてくる。

「た、高瀬君は、その……えっと、いつ、から？

「俺？」

素っ頓狂な声を上げた俺は、そつまえぱいつだらつと思ひを馳せる。

好きだと気づいた、自覚したのは、彼女がドジだと思った時。護りたいと思ったのは、その前に見せた、無理な笑顔。特別なんだと、そう思つた。

でも、もしかするともつと前から、この気持ちを抱えていたのがもしけれない。

例えば、登校中の香り。

あの香りに気づいた日は、妙に気持ちが高ぶっていた。多分気づかぬうちにその香りに、その香りを漂わせている人に、好意を寄せていたのかもしれない。

人とも限らないのになあ……。しかも冷静に考えてみると、もの凄く変態っぽいしなあ……。

「…………

あ、ヤバイ。俺今、自分で自分を傷つけて凹んでる……。

「た、高瀬君?」

ドヨンとした空氣を背負つた俺を見て、彼女は心配そうに声を掛ける。こんなにも優しい彼女に、俺はちょっと、疲れた笑みを返すことしか出来なかつた。

「そうだなあ……。

自覚したのは今日」

「じ、自覚？」

頷いて、そう言えば今日は、色々ありすぎたよなあと思っ起^ハす。

「……中山の作ったスコーン、まだ食つてねえーなあー……」

本当に、色々とあります。

「あ、あれは……。食べないほうがいいと思ひけど……」

「やうやく」と言つ彼女が可愛らしくて、俺は小さく笑いながら
言つてやる。

「何言つてんだよ。俺の為にわざわざ作つてきてくれたのに、食わ
ないわけにはいかないだろ？」

「そ、そんな無理しなくていいって！また作つてくるからー！」

「いーや。俺は好きな奴が作ったヤツは一つ残らず絶対に食べきつ
てやる。どんなに不味くてもどんなに苦しくてもどんなに食いたく
なくともー！」

「……それ、すげー酷い言葉だよね」

大慌てで手を振つていた先ほどとは打つて変わつて、殺意と呆れ
が2割ずつ、落ち込みが6割を占めるなんとも微妙な表情をしてい
る彼女を見て、俺はやっぱり笑つ。

「でも、中山が作ったんだから、絶対上手いに決つてるよ」

多少硬いだろうが。

そう言つてやれば、彼女は頬を赤らめて小さく俯き、「ありが、とう……」「ん

と囁いてくれる。そんな些細なことが、こんなにも嬉しい。

そう返して、彼女の頭を撫でる。ビクッと身構えたのは、一瞬。髪を梳いていけば、気持ちいいのか、目を細め、俺に体を預けてくる。

ああ、彼女なんだ。

たったこれっぽっちのことでも、こんなにも嬉しくなってしまう俺は、とても単純なんだろう。でも、たったこれっぽっちのことだからこその、何よりも愛おしい。

「なあ、中止」

「…………ん？」

「うつとつとしたよくな声が返ってきて、幸せ気分に浸つてゐるのが自分だけじゃないって思えて、くすぐつたい気持ちになる。

「俺の」と、好きになつてくれて、ありがとうな

「……………」

「ううんで、田を閉じた彼女は、ゆっくつと確かめるかのような
口ぶりで、

「高瀬君も。私のこと、見つけてくれて、好きになってくれて、受け入れてくれて。本当に、ありがとうございます」

ああ、何でお前はうやうやしく。

苦笑して、彼女の頬に触れて。微かに震えた彼女は、反対の俺の手を、きゅっと握り締める。それを合図に、俺は彼女の唇へと、自分 그것을寄せた。

俺の気持ちを上回るほど気持を、そんなにも上手に、言葉に乗せることが出来るんだよ。俺はあれで十分恥ずかしくて、十分過ぎるべからくなえられて、思ったのに。

彼女には敵わない。

じつして俺たちはめでたく結ばれ、全てが解決した。

なんてことではなくて。

俺はこれから、彼女の過去を知ることになる。

1、新しい自分

ある火曜の放課後。

久々に部活がないから彼女と一緒に帰っていた俺は、ふんわりと香ってきた大好きな香りをかいで、ふと思い出す。

「あ、そうだ」

ずっと聞いとつと思つて忘れてた。

「どうしたの？高瀬君」

俺は、自分の隣を歩く彼女を見て、小むく苦笑した。

「なあ、俺一応彼氏なんだしさ。苗字じゃなくて、名前で、呼んでくれないか？」

「え……」

ピタッと動きを止めた彼女は、俺を見たまま、どんどん頬を赤く染めていく。それが可愛らしくて、つい意地悪をしてしまつ。

「なあ？千沙」

耳元に唇を寄せてそう囁けば、ビクッと肩が跳ね上がり、耳まで赤くなる。そつと離れると、彼女は俺が唇を寄せた方の耳を手で覆

い隠し、田尻に涙を溜めて見上げてきた。

「れ、れ……ん、くん」

.....。

「だ、駄目……？」

「うん、駄目」

アッサリと頷けば、彼女は真っ赤な顔を更に赤く染め、俯いてボソボソと呟いた。

「れ、…………れん」

「何？千沙」

ふつと耳に息を吹きかけると、「ひやつー？」と声を上げて距離をとる。思わず、くすくすと笑みを零せば、彼女は「むうー」と頬を膨らませた。

「あつははー」

「…………高瀬君って、案外酷いよね。悪戯っ子って言つか、いじめっ子って言つか…………」

「蓮」

「え？」

「高瀬じやなく蓮」

「……………蓮」

そっぽを向いて、口を尖らせながらボソッと呟いた彼女の手を取つて、俺はまた歩き出す。とてとてと後を追つてくる彼女の影を見ながら、嬉しくて頬を緩ませる。

「それで、ビうじたの？た れ ん

頑張つて名前を呼んでくれるのが嬉しくて、俺は「ん~？」と鼻歌交じりに尋ね返した。

やつぱり、彼女は可憐らしく。

「最初に話しあしたのはたか 蓮じやない」

「…………ああ、そうだった

あまりにも、可愛い反応をされてしまつたので忘れていた俺は、苦笑しながら彼女を見る。俺より低い位置にある頭が、微かに傾げられた。

「自分じや気づかないかもしないけどさ。お前から、何か甘い香りがするんだよ」

「甘い、香り？」

あ」に手を添えて、考える彼女を見ると、お茶を思って出す。彼女もまた、同じ癖があるらしい。

「菓子が一番近いんだけど……。クッキーじゃ、なかつたんだよなあ」

彼女は何か思い当たるといふがあるのか、苦笑しながら「ええと」と言葉を探してくる。

「……今週の日曜に、家、来る？」

……は？

「いや、誘いは嬉しいけど……。何でいきなり？」

香りの話をしていたはずだ。それなのに、彼女はいきなり家の話をする。ってことは……。

「もしかして、千沙の家に行けば理由が分かる、とか？」

「うん……、多分」

どんな家なのかを考え、思いつかないため俺はその提案を受け入れることにした。

金曜の昼休みに図書室に行けば、何人かちらほら人がいたが、無視。

そのままある本を手に取り、パラパラとめぐる。そして何か挟まつているのが見え、それを引き抜いた。

よく見ると、ページは前と同じ場所。

「…………」

俺はため息を吐くと、その手紙を開く。

『蓮さんへ。

優しい言葉を、ありがとうございます。

あなたの優しい方に見つけてもらえて、私はとても幸せ者だと思います。グチのような話になってしまつかもしれませんが、無理をなさない程度でいいので読んでください。

もし私なんかでいいのでしたら、会いに行かせていただきます。これから、よろしくお願ひします。

『eve』

そう書かれている手紙を、ポケットに突っ込んだ俺は、時計を見て教室へと戻る。そして、ポケットの中でその手紙をいじりながら、

彼女を思い出す。

いつも優しく穏やかに笑っている彼女は、度々寂しそうな顔をする。俺を見てハツとした表情になつたり、驚いたり。まるで、俺と別の誰かを重ね合わせているかのようで、少し胸が苦しい。

もうすぐ1ヶ月も終わる。この1年で、俺の環境は一変した。

直人は菖蒲を溺愛しているため、今もずっとそばで支え続ける。

支えられている菖蒲は、流石に1ヶ月ではまだ忘れられないらしく、泣きながら日々を過ごしているらしい。

それを思い出して罪悪感に捕らわれたが、すぐに振り払う。俺はもう過去の人間とならなければいけないのだ、と言い聞かせて。

仲のいい“姉弟”に、ならなければいけない。だから、今は何も考えずにいなければいけない。

菖蒲のために、直人のために。俺は俺で、幸せにならなければいけない。

じゃなきや、菖蒲はいつまで経っても俺の面影を追い続けるだろう。それではいけないのだ。前に進むと2人で決めたのだから。

「あ、蓮！」

声をかけられて振り返れば、彼女が友達らしき奴と一緒に俺のところに駆け寄ってくる。

「よう、千沙。……」「こつは？」

「あ、始めてー千沙の親友の三上 春奈でっすー」

「デジャビュ？ ああ、瀬川だ。こいつ瀬川のヤローに似てやがるんだ。んで、つい最近（と言つても一ヶ月ほど前だが）言われたんだ。この台詞。

「…………で？」

「じりけるなあ、もう」

「ねえ千沙。本当にコイツでいいわけ？」
「え？ うん。何で？」

「いたつて普通に、当たり前だと言わんばかりの口調で返された三上は、ガクッと肩を落とした。

「あ、そ」

「…………？」

「一ヶ口こと笑つてやつされると、俺が照れるんスけど……。

そんなことを思つてこると、三上は顔を上げて「じゃなくて」と

声を上げる。本当に、この騒がし 賑やかなところが、無駄に元気なところが瀬川に似てる。

……ああ、嫌なこと思い出しちまった。

そう言えば瀬川に見られていたのだ。菖蒲をフルといろを。

「チッ。後で話とかなきやな……」

小声でボソッと呟くと、不安そうな表情で首を傾げてる彼女が視界に入り、俺は笑う。

「何でもないから、気にするなって」

そう言つて頭を撫でてやれば、彼女は嬉しそうに笑つて頷く。それが嬉しくて俺も笑みを深くした。

「ウオッホン！」

「ものす」「ーくわざ」とらしくて、「ものす」「ーく苛立たしくて、ものす」「ーく空氣の読めた咳払いが聞こえ、俺はどうするべきか迷う。

面白こと笑えればいいのやら、スルーして彼女を甘やかすか。

どちらを選ぶ?そりゃ もちろん。

ナデナデナデナデ。

.....。

— 1 —

ナデナデナデナ

「知るかボケ」

「ああああああーーーー！」イツ今暴言吐いた！吐きやがつた！」

「え？ あ、うん。蓮は意外に口悪いよ」

のほほんと、本当にのんびりとした口調で返す彼女を見て、三上は「ええええええ!!!!」と頭を張り上げる。

……なんだかんだで、バランスが取れてもんだな、ここにいら。
と言つよ。この1ヶ月で、俺の本性見抜いてたんスね。鈍いと思つたのに。

「ウザイ黙れボケ」

「口悪シ…」れのど…が爽やか…じや…あたしの千沙を返せ…」

そう言つて、彼女の腕を引っ張るから、俺の負けず嫌いな心に火が点く。

「い・や・だ・ね」

ぐこっと肩を抱き寄せて、腕の中に閉じ込めれば、「ひょ、ひょ
つとー」と抗議の声が上がる。それでもお構いなしに、俺は三上に
言ひ。

「こつはもう俺のものなんだね。ダチだろーがなんだろーが、俺
からこいつを奪うなり受け立つ」

「なんですか～？！黙むといふよ……！」

わざわざくちゅみ付けて三上を見つけると、ずいぶん楽しかった。
なんか、前にこいつ馬鹿なことを、あのアホとやつてた気がして、
そつと言えばあれからまともに話したことない気がづく。

彼女と、上手くこいつてるところだけじゃ

「お前に心配されるほど、俺は女慣れしていないわけじゃ、ねえーつ
ての！」

パコッと何かで頭を叩かれ、俺は肩越しに振り返る。そこにいた
のは、茶髪の信号ピアスをつけた男。

「だあーからー信頼じゃねえって言つてんだろー？」

「相変わらずだな、お前。つか、だったら俺の心を読むな

「のせー！」

思わず笑つた俺を見て、三上が「直人じゃん！」と声を上げる。

「おん？お前ら、知り合いなのか？」

「あ？ん……まあ、な」

.....?

言葉を濁した直人を見て眉を顰めると、「気にすんな」と言つて話を逸らす。それくらいで、騙されたり、流されたりする俺ではない。

ないのだが。

「んー！んんんー！ー！」

「おん？ああ、千沙。どうした？」

いつの間にか、思い切り抱きしめていたらしく、ドンドンと胸を叩かれた。解放してやれば、かなり苦しかったらしいへ、ゼヒーハアーと荒い呼吸を繰り返していた。

「れ、蓮、の、馬鹿ッ！」

「ああ、悪い悪い（笑）」

悪気がなかつた分、罪悪感が生まれるもの、そんな彼女も可愛らしくて思わず笑つてしまつ。

そうすれば、いつも通り「絶対思つて無いじゃん！」と拗ねる。

だから、ついつい「あ、バレた？」と返す。そうすればいつも通り、彼女は言うのだ。

「もう……！」

と。

そんな些細なことが嬉しくて、俺はもっと笑ってしまう。前に「高瀬君は笑い上戸だ」と、涙目で睨まれたことがあったが、そんな彼女もやっぱり、可愛いのだ。

「それで？」

直人がそう尋ね、俺は「おん？」と聞き返す。直人は呆れた顔で俺を見ていたが、やがて諦めたかのような表情で言った。

「なんか用事があつてここにたむりつたんじゃないのかよ？」

「「あ」

俺たち3人は顔を合わせ、4人同時に噴出した。そしてチャイムが鳴る。

「またね、蓮」

「ああ。じゃあな」

そう言って手を振つて去り立つすると、三上が俺の手を掴んで

「今日の放課後、教室にいて」

と耳元で囁いた。真剣なその表情は、どこか怒っているようにも見える。だから俺は、チラッと彼女を見てから、頷いた。

彼女は彼女で、直人に声をかけられていて、同じように俺を見てから頷いていた。

「……さて。直人」

「あ？」

「お前、いつニ上と会つてたんだ？」

歩きながらそう尋ねれば、直人は案の定、バツの悪そうな表情で頭をかいていた。

「話せば長くなるから、次の休み時間でいいか？」

「お前がそれでいいなら、俺は全然かまわねえよ」

残念なことに席が離れた俺たちは、授業中に話すことはできず、かといってサボるわけにもいかないので、真面目に授業を受けることになった。

その間、俺は今までの自分と今の自分が変わっていることに気づいた。

『少しあ構つてくれてもいいじゃない!』

『知るかボケ』

『蓮は意外に口悪いよ～』

俺は演じてきた。演じさせられてきた。俺のイメージに。
だから俺は、俺の変化に、驚く。

女子に、あんなことを言われたことは、ただの1度もない。近寄
つてくる女子に優しく接し、できるだけ、平等に構つようにしてい
たから。

そうしなければ、女子の間で喧嘩が起きてしまうことを、中学の
頃に学んだから。

会つたばかりの、しかも女子に、あんな暴言を吐いたこともなか
つた。できるだけ言葉を選んで、できるだけ丁寧に。“爽やか”を
演じて。

直人は別だったとしても、他の女子にも、男子にも、それを心が
けてきた。

他人に、あんなことを言われたのは、人生初（直人は別）。菖蒲
にだつて、そんなところを見せたことはない。ずっとイメージを壊

す」ことなく、演じていたのだ。

それなのに、さつきの俺はまるで真逆だ。

天使のよつ？いやいや、悪魔。

爽やか？いやいや、冷風。

カツコ？いやいや、怖い。

だから分かった。彼女がどれだけ俺に変化を与え、変わつていったのかを。

「少し前までは、全然だったのになあ……」

確かに、入学したての頃は、女子からの差し入れのクッキーをもらつて、

『なら、一ついいからくれ

『駄目だよ』

『これは、あの子達が
俺につてくれたやつなんだから、
俺が食わなきゃ駄目だろ』

なんて言つていた気がする。

『もてる男は一味違つねえ』

『凡人の俺たちと言つことが違う』

『完璧なやつほど嫌な奴はいない』

なんか、遠い昔のような気がする。でも、つい数ヶ月前のことなんだ。そつ思つと、なんだかおかしかった。

そして思つのだ。

「こんな自分も悪くはない」と

2、他者の思い

「そうだったのか……。直人だったな、それは」

「そーかよ」

呆れたような表情の直人を見て、欠伸をしてからうなる。

直人の前の席の奴から椅子を借り、直人の机に一人揃つて、頬杖をつく。

鏡のような合わせ絵に、女子は嬉しそうに頬を赤らめている、
…らしい。

「つとこ……ねみい」

そう言いながら目をこすり、周りを見る。

女子はいつも通り相変わらずだが、俺の態度が冷たくなったことに、気づいていないはずはないだろう。それでも、黄色い声援とやらが聞こえる。

……正直、ウザく感じるよな……今は。

彼女ができるのだから、そろそろ別の奴を見ればいいものを。

「……それができるなら、菖蒲だって泣かねえよ」

キヨトンとした視線だけを直人に寄越し、小さく笑った。

自嘲を表す笑みで。

「……そうだな」

真っ直ぐに、俺を見ずに女子たちを見ていたあいつの目は、敵意が少なからず含まれていた。それが、俺には嬉しい。

菖蒲を本気で愛してくれている。 その証拠だと、分かるから。

「なあ、直人」

「あ？」

間抜けな声を出して、俺の席の前に座っていた直人は、頬杖をしたまま俺を見る。

「人生つてのは、残酷だつて思うか……？」

「はあ？」

素つ頓狂な声を上げた直人は、顔ごと俺の方を振り返る。頬杖をついていた手から顔が離れ、怪訝そうな表情で、俺を真っ直ぐに見ていた。

それを見ることなく、俺は黙つて同じ言葉を繰り返した。

「人生つてのは、残酷だつて思うか？」

「…………」

無言のまま俺を見ていた直人は、その後、「さあな」と言つて、机から教科書を取り出した。

「少なくとも俺は、残酷だとは思わねえよ

「…………」

意外な言葉に顔を上げれば、俺を見ずに、また女子たちがいるほうに視線を向けた。

「残酷だつて言つなら、俺は、……菖蒲に出会えなかつたはずだ」

「…………お前」

『そんなこと、ない、よ……？』

別れの間際に聞いた、菖蒲の声。泣きそうなのを必死に我慢して、俺に伝えてくれた言葉。

『だつて、運命が残酷だつて、言つなんら』

『私は、蓮に……出合えなかつたもん』

…………そつだつたよな。そうだ。

「…………？何笑つてんだよ」

クツクツと笑つてゐる俺を見て、直人は心底不思議そうな、怪訝
そうな表情で俺に声をかける。

だが、そんなことを気にすることなく、俺は笑う。

「お前、ぜつてえ菖蒲と上手くやつてけるわ

「はあ？」

キーンゴーンカーンゴーン。

予鈴が鳴り、俺は笑つたまま席を立つ。

「ま、頑張れよ」

「ま、頑張れよ」

自分の席へと向かおうと一歩出したとき、

「でも」

?

直人の声が聞こえ、肩越しに振り返る。

俺を見ずに、前を見たままのあいつの表情は、複雑な表情だった。

「……ありがとう。お前にそう言わると、自信つく

「ああ」

複雑な表情。

嬉しいけれど、悔しい。照れくさいのに、苛立つ。

負の感情と隣り合わせの感情でできたあの表情は、今まで見たことがないくらい情けなくて、それと同じくらい、いい顔だと思った。

俺は、できていただろうか？

菖蒲を思い、菖蒲のことを考え、菖蒲のために、そんなにも余裕が無く情けの無いくらい、あいつが好きだと呟つ表情を。

きっと、できてなかつたんだらうな。

自嘲しながら席に座った俺は、空を見ようと視線を寄せた。

晴れ渡つたその空に書つたのは、一つ浮かぶ小さい雲。

「 」

あの雲は、今、どんな気持ちなんだろ？な……。

今日は自主練が主だから、サボつてもバレはしない。どうよつ、サボつてる奴のまつが多かつたりする。

……まあ、普段なりひやんと、練習してるけど。

今日は、二上に教室にいるよつ言われていたため、仕方なく着替えてから教室に待機していた。そして、じばらくしてから姿を現した奴を見て、俺は小さくため息を吐いた。

「とつあえず、その殺氣をしまつてくれないか……？」

「い・や・だ」

昼間の俺の真似か？

苦笑しつつ、壁に背をよりかからせながら、俺は「で？」と話を振った。

「話って、なんだよ？」

「…………千沙の」と

ああ、やつぱり。

そう思いながら田を伏せ、次の言葉を待った。

「千沙の過去を、知ってる……？」

「…………いや」

まつたく、これっぽっちも知らない。

分かつていてことといえば、彼女がこんな騒がしい奴と親友だつてことくらいだ。

「じゃあさ。私たちの学校で、一人だけ、卒業式前に死んじやつた人がいるって、知ってる？」

「…………ああ。入学当時、ちょっとした話題になつてたな。それ

「その人の名前、知ってる？」

「いや？ つーか、何でそんな奴の話になるんだ？」

確かに俺は、三上の話を聞くためにここに居た。が、最初に“彼女のこと”と言つていたはずだ。

もしかして、関係ある、とか……

「…………真山 棍馬って言つて、私の元彼氏で、千沙の 初恋

の相手だよ

「… 初恋…」

「死んじやつた上に、私の彼氏だつたから、千沙の恋は叶わなかつたけど」

「それで…お前は、俺にその話を聞かせるために、わざわざ呼び出したのか?」

あまり、気分のいい話ではない。自分の彼女の初恋の奴が、死んでしまつてゐるといふことは。

彼女はまだ、好きなのだろうか。俺のように、完全には思いを消すことなく、無くすこともできずに、持て余しているのだろうか。

だとしたら、俺はあいつに向ひに向を言えぱいい? 向をしてやればいい?

「うふ。でも一番伝えたかったのは、本題は、ここから」

「本題?」

なんだか、嫌な予感がする。

「うつとつきに限つて、その予感と重ひのせたたのだ。」

「マウ……榛馬は、高瀬君によく似てるの」

ドクン。

違ひの意味で、嫌な予感がした。やつを感じていた予感は、千沙のことについて、聞きたくないことを、教えられるよつた気がしたから。

でも、今感じた予感は、それとはまるつきつ別だった。

ドクン。

もしかして……。

「似てる……？仕草とか、口調とか？」

微かに動搖しながら、「……」と、それはもう、見事に言い切りやがった。

「マウはもつと、ト寧な言葉遣いだったもん！ あんな嫌味は言わないしちゃ！」

そう言つて、どこか懐かしそうに手を細めて、悲しげに笑つた。その瞳から微かに除く、『愛しだ』。

そして、『切なさ』。

ドクン。

……ああ、そつか……。

既にもつ、確信にも近い思いを、俺は抱えた。

「ぱつと見ると、顔も似てる。仕草は分からぬけど、表情とか、

雰囲気とか。そこへんは、すべりよく似てる。……だから、気になつてたんだよ

“だから、気になつてたんだよ”。

主語のないそのフレーズで、ハッキリと確信する。

そうなのか。

「気づいてしまったことに後悔しながら、でも、気づかないフリを努める。

「まあ、千沙も、さうだったんだろ?」

「つまらかに、ちつぱーつ、あること気づく。

“すいべゆく似てる”。それも、パツと見だと、見間違えてしまふ。

ドクン。

……もしかしてあいつも、“マヤマ”って奴に似てるから、俺を好きになったのか?俺自身じやなく、俺を通して、“マヤマ”を見てこるのか?

「……

違うと、そんなことなこと、否定したいの、できない。

寂しそうな顔をしたり、俺を見てハツとした表情になつて驚いた

り。まるで、俺と別の誰かを重ね合わせてこらめかのよつだと、付き合いだしてから度々思っていた。

だから、呑呑の言葉が出てこなかつた。“もしかしたら”、と嘗め可能症のほうが、上回つてこるよつて想えるから。
「結局、私が言いたいのは……。千沙が、高瀬君と付き合つの反対だ、ってこと」

真つ直ぐ俺を見て放つた言葉は、俺の心を抉つた。

まあ、そうだひうな……。お前の心せ、やつ、叫ぶんだひうな。

「千沙はさつと、高瀬君のことが好きだと想つ。

でも、千沙にとては、過去は……マウとの想い出せ、想い出したくないことだと、思うから。千沙の心をかき乱して、狂わせて、苦しめるだけだと思つ

俺は、ここにつけて何を言えばいい？ 彼女の過去も、もちろん、このつの過去も何も知らない。そんな俺が、何を言える？

「…………」

何も言えない。ただ、一つだけ、ハッキリとしてこらむことがある。

「俺と付き合つことで、あいつは苦しむかもしない。悲しむかもしれない。悩んで、迷つて、泣くかもしない。

けど俺は、あいつの口から事情を聞いて、あいつの意思を聞いてからでなきや、答えられない」

三上は驚いた表情をし、

「高瀬君は、それでいいの？本当に、千沙でいいんだね？
何があつても、どんなことがあつても、千沙を見捨てない？千沙
の心がどれだけ沈んでいても、どれだけ傷ついていても、どれだけ
……どれだけ荒んでも……絶対、絶対手放さない？」

そう懐を押すように、何度も尋ねてくる。

涙で濡れた瞳に、悔しそうな切なそうな表情を浮かべて。その悔
しさや切なさには、少なからず、“彼女以外への想い”も、含まれ
ていると分かつて。

「俺は、千沙が好きだ」

ハッキリと、そう言い切った。

「だから、手放したりはしない。見捨てたりもしない」

手放せるわけがない。見捨てられるはずがない。

こんなにも好きなのに、離してやれるはずがない。そこまで俺は、
大人じゃなければ心が広いわけでもない。

そして、彼女以外を見ようとは思わない。彼女以外に、手を差し
伸べようとも思えない。

俺は、お袋たちとは違う。

彼女がどんな姿を隠してしようと、過去の姿がどんなものであつ

ても、きっと俺の気持ちは、一つも変わらない。

千沙が好きだと言つての気持ちだけは、変わるはずがないんだよ
……やつぱわ。

「だから、お前も泣くなよ。俺が健太に、殺されちまうだろ?」

「うん……うん……っ!」

嬉しそうに、どこか切なそうに、悲しそうに……。

何度も頷く彼女を見て、胸が痛む。親友の為に泣き、同時に自分の抱える“オモイ”で泣く彼女を見ていると、直人の顔が浮かんできた。

唯一、あいつにだけ託すことができた。それだけ信頼してると、頼りにしてる。あいつじゃなければ、あいつがいなければ、俺は絶対に、菖蒲から手を離すことができなかつた。

彼女に会つて、彼女に恋をしたとしても。その想いを隠して生きていこうとしたはずだ。それくらい、俺にとって菖蒲という存在は大きい。

女として見ることはできない。けれど、既に大きく膨れ上がりてしまっていたその想いを、沈める術も、消す術も知らない。どう対処して、処理すればいいのか。

どれだけ大きくて、膨れ上がっていても、これは“姉弟愛”だ。
そう分かってても、押さえが利かない。

それをギリギリで保っていられるのは、直人と言つ存在があるからだ。

「『めんね、時間割いてもらひて

「いや、別に。千沙のことだったら、いくらでも時間を作るわ」

「……そつか

小さく笑んだ三上は、最後に思い出したかのよつに「あ」と声を上げた。

「千沙ね、きっと高瀬君に話せない過去の話が、一つあると毎つの。その過去の話は、私も知らない。

そしてもちろん、これとマウは全く関係ないの」

「は？」

「……千沙は、3つ、人に隠しておきたい過去があるの。1つがマウ。2つが家族。3つは」

「3つは？」

「言つたでしょ？“私も知らない過去”だって。聞かれても分からぬの！ じゃあね～」

笑つて、今度こそ出て行つたあいつの後姿を見ながら、俺はため息を吐く以外に何もできなかつた。

1つ目が、“マヤマ”。2つ目が、“家族”。3つ目は、誰も知

らない。

手紙にしてまでも“知つてほしかったこと”って言ひのば、過去の話なのだろうか？それとも、もっと別のことなのか。

「…………

なあ、千沙。何だか今、無性にお前に会いたいよ。

隣のクラスに行けば、お前はいるのかも知れない。直人に呼び出されていたらしくから。でも、会いたいくせに会いたくないんだ。

お前は、俺を好きになつてくれたのか？それとも、“マヤマ”が好きなのか？

お前は、俺にさつ田の過去を教えてくれるか？それとも、俺じゃ役不足か？

「はあ～～～

なあ、隼人。

お前なら、どうする？

3、試練

とつとつやつてきた、日曜日。彼女の家を訪問する予定の日だ。

「……でも、本当によかつたのか……？」

俺は、荷物も何も持っていない手を見て、ため息を吐いた。

昨日の夜、“お菓子を持って行くから、何が食べたい？”と聞いたら、“お菓子は絶対に持つて来ないで”と言われたのだ。だから、何を持つていけば良いのか聞いたのだが。

『大丈夫だよ、家に色々あるからー!』

と言われ、結局手ぶら。

「…………」

俺、本当に大丈夫か？失礼じゃないだろうか……。いや、絶対に失礼だ！

そう思いながら待ち合わせの駅に行けば、既に彼女がいた。白いコートを着っていて、上品で清楚感が溢れているように見える。

「千沙」

「あ、蓮！」

声をかけて気づいたのか、千沙は嬉しそうに笑顔を向け、俺を見て頬を少し赤らめてくれた。

それだけで嬉しかった。

「あ、あの、ね……」

「うん?」

「…………か、かつ、いい……」

「サンキュー」

チユツ。

「ひゃ?!」

「アッハハ!」

額に軽くキスしただけなのに、千沙は過剰反応で悲鳴を上げる。それがまた可愛らしくて、思わず笑ってしまった。

「もう、蓮!」

怒つて俺の後を追う千沙を見て、きゅっと手を繋ぐ。少し冷たい手先に、眉が自然とひそめられた。

「悪い、待たせてた……?」

「ううん。私がちょっと早く、来過ぎちゃっただけだから」

笑いながら、手を引っ張つて誘導してくれる彼女は、目的地へと行く途中何度も、「先に謝つておくね」とそわそわしながら言っていた。

……謝るって、何に？

そう思いながら歩き、辿り付いたのは

「喫茶店？」

「…………うん」

そう言えども、前にも喫茶店の話が出たよなあ。確か、お袋とどっけ？…………ああ、俺、来年から智治の兄貴と住むんだっけ。

半年くらい前に、お袋から聞かされていた話だ。住むところがなくなるから、俺たちの家に転がり込むって話。

んで、そここの末っ子は俺と同い年で、事情持つ。

「…………」

……ん？

「なあ、千沙。俺、千沙の家に来たんだよな？」

「…………うん」

「…………家？」

「…………」

無言のまま、喫茶店の右隣にある建物を指差す千沙。表札には“中山”の字が刻まれていた。だが、俺たちがいるのは、お隣さんの喫茶店の入り口前。

「？」

「蓮、言つてたでしょ？香りの正体が知りたいって……」

「ん？ああ、言つたな……」

確かにそう言つた。だが、これじゃまだ分からぬ。

もしかして、とは思つたが、確証があるわけではない。だから、違つと思つたのだが。

「覚悟、しておいてね……」

「は？」

真剣な表情のまま扉を開けた彼女は、最初はホッと安堵の息をつき、中に入った。それにつられるようにして入り、彼女が身体を硬くしてこぐにこぐに氣づく。少し青ざめたような、怒ったような表情。

と、疑問に思つたのは一瞬だった。

「？」

「くひええええええええええええええーーーー！」

なるほど、嫌といつからによく分かった。

「ハツー！」

ベシッ！ズッテ——————ン ガンツ！

……。

……。

「へ？」

目を開けた彼女は、俺の後ろに倒れ、見事に入り口の扉に顔面をぶつけている男を見て、

「浩兄？！」

と、驚いた声を上げていた。

「え、あれ、れ、蓮？何したの……？」

「何つて……」

猛ダッシュで黒い塊が来たから、彼女とは反対のほうに体をひねつて、そのまま足崩しをした、というだけ。特別に殴ったり蹴ったりはしていない。

それを伝えると、彼女はボカーンとした後、

「すうじゅー！」

と、拍手喝采してくれた。

いや、嬉しくないわけじゃない！ ただ、

お前、助けてやるといつなかつただる」「うう

卷之三

言葉に詰まつた彼女は、一たつで、と口を尖らせた。

浩児の躊躇は痛しから……

呆れ口調で言えば、彼女は「ごめんなさい」と謝り、それが可愛らしくて思わず頭を撫でた。と、その手を振り払われた。

「ちょっと浩兄！」

俺と彼女の間に立ちはだかつた男 多分彼女の兄が、俺を睨んだまま口を開く。

「……お前が、千沙の彼氏か？」

「お兄ちゃん！いいから早く」

「やつですよ」

キッパリと言つてやれば、彼女は頬を赤らめながら兄の手を引いている。

「……まあ……顔は悪くない……。だがしか

ガツン

…………。

「えーっと……」

とりあえず状況説明をすると、俺の顔をまじまじと見た男が、「だがしかしーし！」と言おうとして、上半身を起こしそうとしたところ、後ろから来ていた男が持っていたフライパンに頭を直撃。

そして、涙目になりながら後ろの男を睨んでいた。

「兄さん、不躾だろ？ あんまり失礼なことをしてると、千沙が本気で怒っちゃうけど、いいの？」

「う、っ……！」

ちらりと隣に視線を向けた男 もとい、兄を見て、彼女は口を尖らせた。

「……お兄ちゃんなんか知らない」

トイツ。

「なつ…………！」

ガガガガガ――――――ンツ！

…………。

「……まるで漫画だな」

そんな俺の突込みを無視して、フライパンを持っていた男（多分彼女の兄）が、近づいてきた。そして、俺の隣で、彼女と彼女の兄の言い争いを、面白そうに見ていた。

「騒がしくて悪いね」

「あ、いえ……。千沙のお兄さん、ですよね？」

ちらりと視線を向けると、穏やかで和やかな雰囲気を持った男が、こちらを向いた。

色の薄い髪は、どちらかと言つと長い。女みたいに綺麗に整った顔つきで、それでも男だと分かる。

軟弱そうにも見えるが、腕まくりをしているところから見える肌

を見れば、それなりに鍛えられているのだと知られる。

「ん？」Jの顔、どつかで見たことあるよ？な……。

「ああ、名前、まだ言つてなかつたね。 中山 弘晃、23歳。 千沙の兄で、中山家の次男だよ」

「高瀬 蓮です。一応、双子の姉がいます」

「へえ……確か、千沙と同じ年だよね？」

「はい」

少し緊張気味に頷けば、ヒロアキさんは柔らかく笑つた。

「緊張しなくてもいいさ。僕より、兄さんとの会話に気をつけたほうがいいかな」

「兄さん……って、あの人、ですよね？」

既に言い合ひは終わつており、彼女は兄を連れて、厨房の方へと行つてしまつっていた。俺はヒロアキさんに促され、近くにイスに座つた。

「中山 浩輔、25歳。中山家の長男で、この店のオーナーみたいなもんかな。そもそも、結婚するんじゃないかなあ……」

そう言つて笑つた彼の目は、嬉しそうなのに、少し虚ろにも見えた。

……？

「僕と同じ年の彼女がいるんだよ、兄さん。僕はまだいなければね」

「……まだいない、って……本当ですか？」

気づけば、そう尋ねていた。

ヒロアキさんも驚いたように俺を見て、キヨトンとした表情をした後、苦笑した。

あ……。

その表情が彼女と重なつて見えて、今すぐ納得した。兄妹なんだつて。

「彼女はいないよ

「じゃあ、好きな人が……？」

「うん、まあいる。ただ、今は少し、迷つてる

そう言ったヒロアキさんは、厨房にいる彼女を呼び出し、ジュースを持ってくるよつに頼む。

「蓮は何がいい？」

ホクホクした表情で尋ねる彼女を見ると、本当に今すぐ抱きしめてしまいたくなる。

それをぐつと我慢して、紅茶を頼んでみる。今は冬で寒いから、
冷たいジュースはじめんだ。

「紅茶……ミルクティーとストレート、どちらがいい？」

「ん……千沙のおすすめは？」

「え？ 私？ ……私は、ミルクティーかな……」

少し恥ずかしそうにかんだ彼女を見て、俺は笑う。

「じゃあ、それで」

「うん。 弘兄は？」

「僕はコーヒー。 ……今度は、間違わずに入れてくれると嬉しいけどな」

「も、もう間違いません！」

顔を赤くして厨房に戻つていく彼女を見て、俺は首を傾げた。

「どんな間違いしたんですか？」

「はは、すごい間違いえ。

カフエラテを頼んだのに、コーヒーが来てね。しかも、コーヒー豆が多くて……。いつも一杯なのに、何故か三杯も。それなのに砂糖もミルクも入つてなくつてさ……。

死ぬかと思ったね、あれは

やつ言つて苦笑を漏らすヒロアキさんを見て、少し意外に思つ。

「苦いの駄目なんですか？」

「うふ。僕は甘いほうが好きだな。蓮君はどう？」

「あー……俺はどちらかって言つと、苦いほう……ですね」

「へえ。何か、甘いものってイメージあるけど」

「そうすか？ そう言われるのは、初めてですけど。
でも……まあ、差し入れで大分、甘い物も食べれるようになります
ましたけど……」

そのおかげで、大分訓練された気がする。まあ、訓練のおかげで、千沙が作ったスコーンも食べれたから、よしとする。

…… そつ言えば、千沙が気にするほど硬くはなかつたな……。た
だ、甘かつたけど。

「やつぱりモテるんだね。そんな感じだ」

「あーっと……まあ、多分。でも、千沙もモテるんすよ」

「千沙が？」

意外そつに驚くヒロアキさんを見て、俺は苦笑を漏らした。

文化祭のときは、危うく焼きもち焼いて彼女を困らせるところだつた。……と言つても、その後色々あって、結果的に困らせたけど。

「それより、今日はなんですか？」千沙の部屋に上がればよかつたの」「

笑いながらヒロアキさんを見て、俺は苦々しく笑つた。

「俺の理性を試さないでくれますか」

「ハハツ…まあ、蓮君なら、僕は大歓迎だけね」

「ヒロアキさん！」

思わず声を少し荒げて呼ぶと、ちゅうど飲み物を持ってきた千沙が、驚いて固まっていた。

「あ……と……えっと……」

じつじょうか迷つている様子の千沙を見て、ヒロアキさんが苦笑を漏らした。

「大丈夫、ただちょっと、彼をからかっただけだから」

するとホツと安堵の息をつき、俺の前にミルクティーを、ヒロアキさんの前に「コーヒー」を置いた。

「もつ……、浩兄みたいな」としないでよ、弘兄

「ひどいなあ。兄さんはからかつたりしないって。どちらかと言えば、兄さんは脅すんじゃないかな」

面白そうに笑うヒロアキさんを見て、千沙は頬を膨らませる。

そんな子供っぽい反応も新鮮で、すく抱きしめたくて仕方がない。必死に手を握り締めて我慢するものの、辛い。

「蓮に変なこと吹き込まないでね！絶対だからね！」

「はいはい」

クスクスと笑うヒロアキさんを見て、彼女はむうっと膨れている。そして、俺を見て笑った。

ドキン。

「今アップルパイ作ってるんだけど、もう少し待つてね」

「ああ、サンキュー。楽しみにしてる」

「うんー」

パタパタと戻っていくその背を見て、ため息。

可愛すぎるだろ……さつきの笑顔とか。笑顔とか。笑顔とか！

もう一度ため息をつきながら、前髪をかき上げて上半身を沈ませていく。ゴンッとテーブルに額がぶつかり、中途半端な姿勢となつた。

「……我慢できるなんて、偉いね」

からかうよいうな口調で言われ、俺は顔を少し横に向けた。腕の隙間から見えるヒロアキさんは、田だけは笑っていない。

……最初から試してたのか。

「合格だよ。君になら、本当に千沙を任せられるね」

「…………アリガトウゴザイマス」

正直、今は我慢するので精一杯だ。部屋に行つたら、無理矢理やつちまいそうで、ちょっと厳しい。

……耐えろ、俺！

「そんなに好きか」

ヒロアキさんより低い声が聞こえ、俺は顔を上げた。そこにいたのは、エプロンを外している男「ウスケさんだった。

短い黒髪に、がっちらりした体つき。暑苦しい、とまではいかないが、……やつぱつちよつと暑苦しい。

「千沙のことが、そんなに好きか……？」

「…………好きですよ。マジで惚れています」

真つ直ぐに浩輔さんを見て言えば、彼は腕組をして、ため息をついた。そして、俺を真つ直ぐに見下ろした。

威厳がある、父親のような彼を見て、結婚の申し込みをしている

わけではないのに、物凄く緊張した。

それだけ、あいつを大事にしてるってことだよな……。

そう思つと、じつもそれなりの覚悟をしなきゃいけないと、そう感じさせられた。腹を括つて見上げていると、パタパタと軽い足音が聞こえてきた。

「弘兄へ、オープンに違つお菓子が入つてて使えな、い……つて、何してるの?」

キョトンとした表情で俺たちの状況を見ていた千沙は、ヒロアキさんに引っ張られるようにして厨房へ入つて行つた。それを見届けたコウスケさんは、またため息をつく。

「……俺が言つことじやなことと思つんだけどな」

「?」

「あこつは、やめたまつがこいと想ひだ

。

。

「え?」

意味が分からず聞き返すと、コウスケさんは真面目な表情で俺の隣に座つた。

「見かけによらずズバズバ言つし、からかうと返つて来るのは鉄拳。
……意外に強暴だぞ？」

…………。

…………。

「それがあいつなら、俺は受け入れるだけですよ」

…………。

…………。

「…………はあ」

ため息をついたコウスケさんは、「そーかい」と疲れたように頷いた。

「しかたねえ……。弘晃の了承得ちまつてるから、な。認めてやるよ」

そう言つて席を立つたコウスケさん」、

「ありがとうござります」

頭を下げれば、苦笑いを返されてしまった。

とにかく、これで兄2人の許可は得ることができた。今日は、それで良いと思つ。

.....ん？何か、当初の目的を忘れてる気がする。

そう思いながら、俺は彼女が作ったアップルパイを食べたのだった。

4、疑問

そうだ、匂いだ。

それを思い出したのは、喫茶店を出すぐ。辺りは既に日が暮れており、夕日の色が空を覆っていた。

「なあ、千沙」

「うん?」

小首を傾げて微笑む彼女を見ると、本当に抱きしめたくなる。ただ、今ここでは駄目だろ?。

人通りが多い、とは言えない。だが、まったくないわけでもない。

ちらほらと人影が見える以上、恥ずかしがり屋の彼女の為にも、……と言つよりもしろ俺のために、下手なことをしないほうがいい。

窓を見れば、ホールから俺を睨んでいるコウさんと、ほわほわとした笑顔を浮かべながら見守っているヒロさんがいた。

アップルパイを食べ終わってから、コウさん、ヒロさんと呼ぶよう言われたのだ。

「お前、いつも手伝つてんのか? 喫茶店」

「あ……うん。だから多分、蓮が言つてた匂いも」

「ああ。今出で、よつやかく氣づいた」

そういうや、入るときは大変だったもんな。一気に飛んでしまうへりい。

だが、ずっと温かい気持ちでいた。外に出て寂しく思つてしまつくらい、あの香りが好きになつていたらしい。

……若干、情けないし恥ずかしいけど……。

「あ、そうだ。聞いとかなきやいけないことがあつたんだ」

入るとき、で思い出した。確かに智治の兄貴が仕事してた店も、喫茶店で。状況が似ていたような気がしたんだ。だから、後で確かめようと思つていた。

だが、何だか少し落ち込んだような表情をしている彼女を見て、思わず首を傾げてしまった。

「どうした?」

「え?」

「なんか……落ち込んでないか?」

すると彼女は少し考へた後、「うーん……」と声を洩らす。

「うん、えつと、まあ、自分の不甲斐なさに……」

「は？」

思わず返事を返した。すると彼女は、小さく声を洩りじて笑う。そんなときの仕草まで、本当に可愛くて。

「あー……ほんと、何でこんなにかわいーんだか……」

「何でもないよ」

やういう彼女に、本當か尋ね返せば、笑つて頷かれた。だから、「やつか」と呟きながら、微笑み返す。

「…………ん？あれ、ビルまで話したっけ？ってか、何の話して……あー、そうだ」

兄貴のことだ。聞かなきゃいけなかつたんだつた。

「なあ、ソレにもう2人、従業員つているだろ？」

「え？あ、うん。……あれ？教えたっけ？」

やつぱつ。

不思議がる彼女を見たまま、俺は「いや」と声を洩らす。

「多分、聞いてない。聞いてたとしても、聞き流してたと思つ

「……じゃあ、どうして？」

「その人の名前、高瀬 智治って言つだひ?」

「何で知つてゐるのー?」

思い切り驚いた声を上げる彼女を見て、俺は笑う。

彼女の顔が可愛かったから、ところのもあるが、何より氣づかなかつた彼女の純さに敬服しそうだ。

「なあ、千沙。俺の苗字、覚えてるか?」

「蓮の?……高瀬でしょ?」

「智治つて人の苗字は?」

「……えーっと……確か、たか……あ

思い当たつたらしく、彼女は「もしかして」と声を上げる。

可愛くて、愛しくて、何だかもう、本当にたまらない。

こんな瞬間に幸せを感じる俺は、どうかしてこる。

別に、彼女が俺を褒めているわけでも、愛を語ってくれているわけでもない。ただの世間話で、彼女は普通にリアクションを返して、返答して、それだけだ。

それが、こんなにも嬉しく思つのは、どうしてなのか。

「俺の母親の兄なんだよ、智治の兄貴は。俺の伯父つてわけ

「ええええっ？！」

素つ頓狂な声を上げて驚く彼女を見ると、もつ本当に我慢できません。

「ブツ！・！」

思い切り噴出してしまつた。

なんか、すつごく複雑なんですが?」

一 ああ、悪い悪い（笑）」

絶対思って無いじやん！」

「あ、バレた？」

一
モルヒニン

いつも通りのやり取り。それが楽しくて、彼女と曰があつて、自然と笑い合つた。

「じゃあ、もしかして家の事情も知ってる……？」

少し寂しそうに笑う彼女を見て、

「……まあ、少しほ

と答える。

すると彼女は、「そつか」と小さく笑つ。

それがすこく寂しそうに見えて、けれど、どうすれば笑ってくれるのか。今、彼女が何を求めているのか。俺にはそれが分からぬ。ただ、今はそばを離れたくなくて、もう少し、彼女の話を聞きたくて。

「……なあ。この近くに、公園つてある?」

「え? ……少し遠いけど、あるよ。どうし?」

最後まで言い切らない彼女の腕をそっと引っ張り、俺は笑う。

「じゃ、行こう!」

「え? ……あ、ちょ、蓮?...」

彼女の腕から手に、自分の手を移動させて、浴衣に言つ『恋人繫ぎ』にする。そして道を歩きながら、考える。

公園に言つて、何を聞けばいい? 何を言えばいい? どうすれば、彼女は笑ってくれるのか。どうすれば、あんな顔をしなくなるのか。

時々、思つ。

俺は、彼女の役に立つていないんじやないか、と。彼女に相応しくないのでないか、と。もっと大人で、包容力のある人間がそば

「こらへきなんぢやないか、ど。

だけど、こらの気持ちに嘘偽りはない。

だからこら、やつぱつ思つ。

彼女が今求めているのは、誰なのか

「……って、ちょっと蓮ー方向逆ー逆だからー。」

辿り着いた公園は、人気がない。田が暮れているのだから仕がないだろ？。

「すげえ……結構広いな……」

「うん。こらの近くに幼稚園と小学校があるから、その帰りに寄る子も多いんだよ。たまに、散歩してるおじいさんやおばあさんが、そこのベンチに座つて休んでたりするけど」

「へえ……。んじゃ、そのベンチにでも座るか？それともグラシーノ

滑り台のほうがここのか…………？　うーん……

話を見ながら、玲音がベンチへしゃべる。ブランコへもじくは砂場。

「…………蓮？」

「こや、何でもない。ベンチに座つてりよ。俺、ジューク買つてくれる。何がいい？」

「あ…………」

「オッケー」

自動販売機でミルクティーハーモニーを買つて、思わずため息をついた。

今になつて、三上の言葉が脳裏に過ぎる。

『…………榛馬は、高瀬君によく似てるの』

『表情とか、雰囲気とか。

やうじやくなは、すいへよく似てる』

『結局、私が言いたいのは……

千沙が高瀬君と付き合つのは反対だつたこと』

『…………マウとの想に出は

思に出したくなことだと想つかり

『千沙の心をかき乱して、

狂わせて、苦しめるだけだと想つかり

「…………」

持っていたコーポーの手を握り締め、熱くて慌てて反対の手に持ち帰る。無意識にやつたことであつても、感覚があれば当たり前の反応だと思つ。

「はああああ……」

ため息をついて、彼女の元へと向かつ。俺が今したいのは、悩むことじゃない。彼女の話を、聞くことだ。

彼女の口から真実を聞くまでは。それまでは、悩むべきじゃない。

「ほら

「あ、ありがと……」

そつと手を伸ばして受け取った彼女は、嬉しそうに微笑む。その笑みを見て、ホッと安堵した。

黙つて隣に腰掛けて、どうやって切り出せつか考える。いきなり尋ねるのは不躊躇だし、だからと言つて遠回しに聞いても、あまりいい印象は与えないだろつ。

セヒ、どうするか。

「……」「めんな

ポツリと呟かれた言葉に、俺はちらりと彼女を見る。申し訳無さそうにしながら、太ももの上で缶を口ロコロと転がしているのが目に入つて、俺は無言で缶コーヒーの栓を開ける。

力チャヤ……。

音がして、湯気が空へ向かつて伸びる。それを見ながら一口飲み、

「……別に

と、ぶつかり戻した。

緊張して、あまり言葉が出てこない。いつもなら何て言つていたのかすら、もう思い出せない。

多分、前の俺なら……『気にしなくても大丈夫だつて』とか何とかいうだらうけど。なら、今の俺なら? 昨日までの俺なら、何て言つてた?

……いつも通りつてのは、案外難しい。意識すると、とんと難しく感じる。

「……」「

痛いほど静かな沈黙が、俺たちの間にある。

俺が強引に連れて来たのに、何も言わない。これほど最低なこと
も…………なくはないが、今の彼女の心境から考えても、あまり歓
迎されるものじゃない。

せめて、どうしてここに連れて來たのか、くらいは話すべきだ。

そう想つの。アリス

「…………」

言葉が出てきてくれなかつた。

俺の知らない、彼女の過去を聞きたくないから。マヤマツて言う
男の話を、聞きたくないから。聞いてしまつた後の俺を、見られた
くないから？

いや、全部違う。本当は、本当は聞きたくないんじやない。
知りたくないんだ。

俺を好きになつたのは、マヤマツて奴に似てたからだ、なんてこ
とを知りたくないから。それを知つてしまつのが、何より怖いから。
だから俺は、今、こんなにも緊張して。こんなにも、怖いん
だ。

「……な、なあ、千沙」

「……え？あ、何？」

ボーッとしていたらしい彼女に声をかけ、必死に言葉を探す。彼女の負担にならないような、彼女の心を刺激しないような、そんな言葉。

なのに、出て来たのは

「直人と三上の関係知ってるか?！」

.....。

馬鹿か、俺は。

思わずため息をつきくなつた俺は、「2人の?」と首を傾げる彼女を見て、小さく苦笑した。

「そ、2人の。幼馴染なんだとさ」

「嘘?！」

「ホント、ホント。直人から聞いたから」

もう一度「一ヒーを飲み、「へえ……そうだつたんだ」と呟く彼女を横目で見ながら、いつの間にか開けられた缶を見る。ふちが茶色に染まっているのを見ると、既に何度か口にしているようだ。

「で、一時期付き合つてたんだつてさ」

「ええ?！」

本当に初耳らしく、彼女は飛び上がるよに驚いていた。それを見て、ホッと息をつく。

「でもでも、中学のとき、直人君は別の学校で……」

「ああ、まあな。……いつだつたかなあ……中1か?いや、小6の夏……?まあ、それくらいの頃に、直人がこっちの学校に転校してきたんだよ」

「へえ……あれ?別に転校する必要なくない?電車で通えば……多分、大丈夫なんじゃ……」

「ん?ああ、知らないのか。九州のほうに一回行つたらしんだよ。で、こっちの学校に越してきたらしい。借りたアパートから一番近かつたらしい」

「そうだつたんだ……」

結局自然消滅だつたらしいと言えば、彼女は少し寂しげに笑つた。

「……私、初めて聞いたよ、そんな話。ハル、一度も教えてくれなかつた……」

「…………俺もだ」

何を考えて言わなかつたのかは、何となく分かる。あの時のあの苦渋な表情を見れば、なんとなく。

でも、それを千沙に言つのも違う気がして、俺は小さく笑つた。

あいつが、今まで俺に言わなかつたのは、三上が、彼女に言おつとしなかつた理由は。

「直人から聞いたよ。あいつが菖蒲を好きになつたのは、俺よりずっと前だつて」

「…………」

「詳しいことは分からぬけど、直人が転校する前から、三上はマヤママつて奴が好きだつたんじゃないかな…………」

カラーン、カラーン……。

音に少し驚いて彼女を見れば、手に持つていた缶が地に落ちて、まだ入つていた液体がこぼれた。それを見ながら、彼女は固まつていた。

「…………どうして」

「？」

「なんで、蓮が……真山君を、知つてるの……？」

絶対に俺を見る事無く、彼女は微かに震える声でその名を紡ぐ。微かに震えている手を見て、俺は空を仰ぎ見た。

結局、遠回りして聞くことになつちまつたな……。俺、本当に情けない。

「…………||上から、聞いたよ」

「ハル、が……？」

頷いて、星を眺める。今が何時なのかは分からないが、風がさつきよりも冷たくなっていた。星が見えると言つことは、それなりに遅い時間なのではないか。

そう思ひの帰るうとしないのは、彼女の過去を知りたいから。

彼女の想いを、知りたいから。

ああ。吐く息が、白い……。

「卒業前に死んじまつた、つてさ。三上の元彼氏で……お前の初恋の相手だつて」

「…………」

皿を伏せて唇を噛む彼女を盗み見ながら、俺は更に言葉を続けた。

「ママは俺によく似てる、だつてさ。ぱっと見の顔とか、雰囲気とか、表情とか。だから、俺と千沙が付き合つのは反対だつて、そう言われたよ」

既に冷くなつた缶コーヒーを握り締めたまま、次の言葉をどうやって紡ぎだそうか考える。

けれど結局何も言えずに、俺は缶を煽る。中身を飲み干してから、彼女が下ろした缶を拾い上げ、呟いた。

「捨ててくる。ちょっと、待っててくれるか？」

彼女は小さく頷くと、俺の手を見る事無く、ずっと俯いていた。

4・5・1 弘晃視点

「行つた、か……」

兄さんの声を聞いて、僕は立ち上がつた。

「コーヒー入れるよ。……ブラックでいいよね」

「ん？ ああ、悪い」

ビニールの窓の兄さんを見て、僕は何も言わず、厨房に引っ込む。

「コーヒーくらい、カウンターで作れる」と言つよつ、コーヒーの材料は全て、カウンターに置いている。

それなのに、わざわざ厨房に来たのは、兄さんの傍にいたくなかったから。

「…………」

千沙が店を出て直ぐに、兄さんはポツリと、呟いた。

『弘晃。

すまなかつた』

何が、“すまなかつた”、だよ……。

そう思いながら、でもどこかで分かつていて言葉に、僕はやつぱり、何も言えなかつた。

「…………ふう」

千沙を見でゝると、いつも思つ。

幸せになつてほしこと。

でも、兄さんを見ると、いつも思つてしまつ。

不幸せを、願いたいと。

「…………はい」

「ああ、ありがとな。…………つてー」

一口飲んだ兄さんは、眉を顰め、渋面を浮かべる。

「…………やけに苦いな…………」

「田代めこは良いかと思つて。……徹夜した日は、最高級に苦いブラック、だろ?」

「…………それは、よく氣の利く」と

「それに、今日もまた、徹夜みたいだしね」

「…………」

苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべる兄を見て、僕は静かに、微笑を浮かべた。

兄さんは、徹夜していたことや、自分が努力しているところを、あまり見せようとしない。見られてしまうのを、何故か嫌がる。

今苦い顔をしたのは、“気づいていたのか”と、自嘲するかのように、嫌がるような、そんな意味を持っている。

千沙が僕に持ってきた、失敗コーヒー。あれは、兄さんの為に作つたものだったのだ。僕と兄さんに渡すとき、逆に渡してしまつたらしい。

……いや、もじりちゃんと渡しても、兄さん、飲み干せなかつただろうな……。

「弘晃」

考え方をしているときには前を呼ぶ。でも、返事を返すことにはしなかつた。視線を向けることもしない。

「　すまない」

その一言に、どれだけのオモイが込められていくのだろう。

どれだけこの人は、罪悪感を覚えているのだろうか。どれほど深

い愛情を、彼女に注いでいるのだらうか。

「…………」

『気にしてないよ、なんて、言えなかつた。

思ひ出るのは、彼の言葉。

『…………まだいない、って……
本当にですか?』

的を射たその言葉に、俺は思わず、苦笑を浮かべていたと思ひ。

“ああ、これが千沙の好きになつた男なんだ”って、素直に思つた。……千沙なら、好きになるのだろうな、と。

「…………僕は、兄さんに謝つて欲しいわけじゃないよ。それは、兄さんもよく、理解してゐるはずだけど」

「…………ああ」

神妙な表情のまま、床を見つめて動かない兄さんは、あの時と同じ。

「…………だが、すまない」

その“すまない”に、一体、どれだけのオモイを込めたのだろう。

いつも、言われるたびに思う、自分の素直な疑問。……否、断定。なんとなく、分かつて。兄さんが、どれだけの思いを込めているのか。どれほどの想いを、込めてしまっているのか。

分かるから、僕はきっと、兄さんの不幸せを願うしかないんだ。

「真由美は、兄さんを選んだんだ。なら僕は、それでいい」

「…………」

何か言いたそうな、思い詰めた表情の兄さんを見た。何も言わないその表情は、昔よく見た、“父”的表情で。

僕はきっと、2択のうち、最も辛い選択を選ぶ。そして、辛いままでのだろう。

何故かそう、思い知られた気がした。

「それで、いいんだよ……僕は」

それでいい。それだけで、もう十分だ。

「……まるで、あいつと同じだな、お前は」

「…………？」

意味が分からなくて、初めて兄さんの方をまともに見れば、そこ

「ほもう、背を向ける兄さんしかいなかつた。

「俺はそろそろ、仕事をする。お前はもうあと休んで、あつあつ仕事に行け。」

……明田は、朝、早いんだが

「…………」

「千沙のことがない、俺が後で、頃合を見て迎えに行へからよ

もう言つて、厨房に姿を消した兄さんの背を、やつぱり僕は、見つめるだけで。

「…………」

僕は、それだけでいいと、思つてしまつんだ。

パタン。

扉を閉めて、ズルズルとその場に座り込む。

『真由美は、
兄さんを選んだんだ』

『なら僕は、
それでいい』

「嘔吐けよ……」

“それでいい”？んなわけねえだろ。

「……どんだけ、一緒にいると思つてんだ、あの馬鹿……」

弘晃は弟だ。ずっとそばで、あいつと妹を見続けてきた。

だからこそ分かるのは、あいつが優し過ぎて、他人を思いやり過ぎて、“自分”が消えていくといふこと。

千沙もそうだった。あいつもまた、“自分”が消えていた。でも、あいつを救うのは俺じゃない。今日来た、あいつが、それをするべきなんだ。

「……まあ、笑つよくなつたか……」

まだ完璧とは言えないが、それでも、以前より格段に良くなつた妹を見て、蓮とこう男を認めることにした。いや、認めていた。

弘晃が一番に気づいて、そして、一番に認めていた。

他人を受け入れ、ちょっととした変化に気づき、対応できるのが、あいつのいいところだ。臨機応変に、そして着々と仕事をこなす。

ただ、そこに“自分”といつものがない、と言つだけなのだ。

『それで、いいんだよ

……僕は』

それを聞いて、直ぐに思い出した、懐かしい言葉。

『田を覚ましてくれなくとも、いい

『そばにいらっしゃるのなら、

彼がビリであつても、私は構わない

『私が彼から離れることは、絶対にないから』

『だから、いいの』

『私はもう、それでいい

諦めた表情を浮かべて、どこか晴れやかさにも似た声音で言った
彼女と、弟はとてもよく似ていた。

“それでいい”。

自分に言い聞かせるその言葉は、更に奥深くまで突き刺さつてい
るはずなのに。

抜く」ともなく、もつと深く、深く深く刻もうとする。

だから俺は、“あいつら”を放つておけないんだ。

例えそれが

俺のエピであつたとしても

5、過去の欠片？

「……真山君は、生まれつき心臓が悪くて、小学6年生になつて、よく入退院を繰り返すよつになつたの」

缶を捨てて、戻つて来た俺は、上に羽織つていたコートを彼女にかける。礼を言つて、すぐに俯いた彼女の隣に腰を下ろし、しばらくの間が空いた。

10分、経つただろうか？……その頃になつて、彼女がポツリと呟いた。

俺は、何も言えない。

「私はずっと、彼が好きだつた」

「……ツ」

ズキンと、胸が痛む。

分かつていてことだつたとしても、それでも、痛む胸は隠せない。

彼女の口から聞いた言葉だからこそ、彼女が語る真実だからこそ、痛みは鋭い。

もう話を切り上げて、帰つてしまおつか？そつ思つてしまふくらいいに、膚んだかのように、ズキズキと痛む。

だといつのに、彼女は口を開かない。ただ黙つて、自分の手を見つめていた。

俺からの反応を待つているのか、それとも、次に何ていえばいいのか迷つてゐるのか。

そんな彼女の隣で、俺は、どうすればいいのか。

「私のお父さんと、お母さんがね。小学3年生のとき、交通事故で亡くなってるの」

「…？」

初めて聞く事実に、俺は驚いて彼女を見る。でも、その目は俺を映すことなかつた。

三上が言つていた。

『……千沙には、3つ、

人に隠しておきたい過去があるの』

『1つがマウ。2つが家族。3つは

結局、3つ目は分からなかつたが、それでも、彼女は人に隠しておきたいうちの2つの過去を、俺に話してくれているのだろう。

それが今の俺には、救いだつた。頼りにされているのだと、俺を信頼しているのだと、そう思えたから。

「凄い、バカツブルでね。いつもラブライブで、記念日の日は、いつも2人でお出かけしてて。

でも……現実は、残酷で。

居眠り運転してたトラックと正面衝突して、即死だつた」

「…………」

「私、まだ小学生で……お金も手間もかかつて大変だから、親戚の人は、私を引き取れなかつたの。兄弟をバラバラにするのも可哀想だ、つて……でも、3人を引き取れるほどのお家は、親戚になくて……」

「…………それで？」

「お父さんの、お母さんが引き取つてくれたの。でもお婆ちゃんも、去年亡くなつて」

「…………そつか」

「…………うん」

頷いた彼女は、微かに震えていた。

寒くて震えているのか、怖くて震えているのか、泣きたくて震えているのか、悲しくて震えているのか。

……俺には、彼女の思いが、考えが、気持ちが、分からなかつた。

「身近な人の……死を、間近で見てきたから。だから、思わず、真山君に言つちやつたの。“どうせいつかは死んじゅうんだ”“真山君は私より早く、逝つちやうかもしないじゃない” つて。最低、だよね……。真山君自身が、一番辛くて、怖いのに……それなのに」

体が、勝手に動いた。

必死に我慢しようとしている彼女を、言葉を紡ぐとしている口を、どうにかしたくて。

気づけば、彼女を抱き寄せていた。そして、軽くキスしていた。すぐに離した唇は、吹いた風にさらされ、冷たく感じた。

彼女の頭を俺の肩に押し付けて、耳元で、囁く。

「我慢、するなよ。……俺の前で、我慢なんかすんな

「…………でも…………」

「何のためにいるんだよ、俺は。……お前が思つてるほど、俺は弱くないよ。好きな奴の涙くらい、悲しみくらい、受け止められるさ」

ポンポンと背中をたたくように撫でながら、「だから」と、祈るよつて言葉を紡いだ。

彼女の全てを、俺は知りたい。

「泣いてくれ

彼女の全てを、受け入れたい。

「…………俺の腕の中で、泣いてくれ。

頼むから

泣くことを強要したのは、初めてのことだ。でも、彼女を泣かせる方法を、彼女が甘えてくれる方法を、俺は知らない。

俺はまだ、彼女を知らない。

だから、頼むしかなかった。彼女を“促す”んじゃなくて、“頼む”しかできなかつた。

情けない……。

彼氏であるはずなのに、彼女の彼氏であるはずなのに。それなのに、彼女の心を軽くさせれる言葉の一つも浮かばない。

彼女を喜ばせる言葉も、悲しませる言葉も、怒らせせる言葉も、分かつてゐる。でも、今ここで、何を言えば彼女は泣いてくれるのか。

それだけは、全く分からなかつた。

情けない。

腕の中で、ただ静かに泣く彼女を力いっぱい抱きしめながら、そう思う。

情けない……情け、無き過ぎる……。

守りたいと思った、彼女を。だから、強くなりたいとも思った。
それなのに、俺は、彼女の泣かせ方を知らない。彼女を甘えさせる
方法を知らない。

彼女自身を、知らない

それがこんなにも辛いことで、苦しいことで、歯がゆいことなの
だと、今初めて知った。

彼女のことを探りたいのだと、そう強く思った。

「「めん……」

抱きしめながら、呟く。

「「めん……」「めん……」

情けなくて、悔しくて、歯がゆくて……俺が、泣きそうだった。

こんなにも強く彼女を想つていて、それなのに、その想いを抱けば抱くほど、彼女自身が遠ざかっていく感覚がある。

走つても走つても、彼女に追いつかない。彼女に手が届かない。
あの時のように、彼女が行き止まりに着くことも無く、空に向こう
続く道を、ただひたすら駆けている。

行かないでくれ。

走り行くその後姿を見ながら、願う。

そばに、いてくれ……！

俺は、一体、どうしたいんだ。

彼女が好きだ。それだけは変わらない。でも、じゃあ、俺は彼女に何を求めているんだ？ 彼女は俺に、何を求める？

俺は

「……ないよ

「……？」

「蓮の、せいじょなによ……！」

腕の力が緩み、俺の頬を、彼女の両手が包む。見えたのは、瞳一杯に涙を浮かべた君。

ああ、そつか。

「蓮のせいじょなによ！ 蓮は、蓮は何も悪くなんか無いの！」

ボロボロと、次々涙を流す彼女を見ながら、俺は微笑んだ。

泣いた。泣いてくれた。俺のために、彼女は泣く。

「れ、の……せいじや……つ！」

「……ああ

そつと手を伸ばして、彼女の頬に触れた。すると、まるで堰を切ったように彼女は泣き出した。

俺の胸にすがり付いて、涙を流し続ける彼女を抱きしめながら、俺は空を見上げた。

星が見える。綺麗に輝く、たくさんの星が。

「……なあ、千沙」

ヒックヒックと、声を上げながら、まだ微かに泣いている彼女に呼びかける。

「俺、千沙に一つだけ、約束するよ

「……や、べ、やべ……？」

子供のように、尋ね返してくる彼女の頭を撫でながら、俺は微笑みながら頷いた。

「俺は、お前より長く生きる。お前より先に、死んだりしない」

「……！」

「千沙が死んで、1秒しか生きられないかもしない。でも、それでも、絶対に約束してやる。

俺は、お前より先には、絶対に死ない」

この言葉が、どれだけのものなのか。俺は分からない。でも、彼女は身近で死を十分すぎるほど体験してきた。

なら、少しでも大切な奴が死んでいくのを見なくていいように。1人でも多く、見取る必要が無いように。

俺だけは、お前より先に死ないと、誓つてやる。

「…………ほん、と…………？」

首を傾げた彼女の目は、真っ赤になつていて。

俺の服を握る手は、震えていて。

「…………本當だ」

その手を握りながら、俺は頷く。

「絶対に……絶対…………？」

「絶対に絶対。…………誓つよ」

ふわりと、羽根のような口付けをすれば、彼女は涙を流しながら、

綺麗に笑つた。

その笑顔が眩しくて、俺は思わず、一筋だけ、涙を流した。

1、先輩

あれからまた、何度か彼女の家（正確には喫茶店）に遊びに行つた。

そしてその度ごと、口をきかせようと拳やりを交え、たまにヒロさんと腹黒対決。

……良い婿修行（？）だ……本当に、帰る頃には疲れ果てて頭痛がするくらい……。

そんな日が続いた俺の冬休みは、すぐに終わりを迎えた。学校が始まつたのは、2週間前。

「…………」

冬休み中も交換し合つていたため、newから手紙は増え、今では20くらいになる。

内容はいつも通り、日常に関することがばかり。でも最近は、少しずつ過去の話が入つていて。

『蓮さんへ。』

今日は友達のノロケ話を聞いていました。正直、憎らじです（

(笑)

その友達は、昔私が好きだった人と付き合つていて、けれど別れてしまつたから、ずっと気にしていました。最近は楽しそうなので、とても嬉しいです。

実を言えれば、私もまだ完全に吹つ切れていません。でも、優しい彼氏がいてくれるから、毎日落ち込まずに済みます。少しづつになるとは思つけど、話せれば良いになつて思つてます。

これは、私のわがままでしょうか？

『never』

俺がいることに意味がある。そう思える内容に、思わず笑みを浮かべてしまつ。

手紙をポケットにしまつた俺は、空を仰ぎ見て、ため息を吐いた。

「あー……ねみい……」

そのまま後ろに倒れ、視界一杯に広がる空を見て、目を細めた。と、

「じゃあ、一緒に寝るっ。」

そんな声が聞こえてきて、俺は「は？」と声を返した。

振り向けば、そこには見知らぬ女が立つていて、俺を見ながら笑つている。

長い茶髪に、黒い瞳は切れ目。大人びた印象を与える顔つきは、美人と言つていいだらう。着崩した制服が、よく似合つている。

が、こんな女と知り合いになつた記憶はない。

「……誰だ？」

「さあ、一体私は誰でしょ？」

「……はあ？」

楽しげに微笑む女を見て、俺は思い切り胡乱げな声を出してしまふ。すると相手は更に楽しげに声を出して笑い、俺は冷めた目を向ける。

「……しらけるなあ、もう」

俺の周りには同じような反応をする女子しかいないのだろうか。

瀬川といい、三上といい、こいつといい……。

「君が、高瀬君……だよね？」

「……やつ言つあんたは」

冷たく、突き放すように睨めば、彼女は肩を竦ませた。

「そう睨まないでよ。私の名前は、美嘉。佐々木 美嘉だよ。これでも3年」

「あつた。……で？お前は、俺に用があるのか？」

「冷たいなあ。彼女さんの前とは大違い」

そう言つて笑う佐々木を更に睨めば、ため息をつきながら俺の隣に座つた。

「まつたく……、今の一年坊は、眞じんなに愛想ないのかねえ」

「知るかよ」

ぶつきら棒に返す俺に、けれど気にした様子もなく、ケラケラと笑つていた。

……何だか調子が狂う奴。

「……で？」

「ん？」

「用があつたんじゃねえのかよ……」

呆れたようにそついえ、佐々木は笑つて、「だから」と口を開く。

「私は3年だつて、言つてん……だろーがつ……！」

「だつ？！」

思い切り頭を殴られ、俺はわけも分からず田を見張る。

田の前には、頬にキレマークを浮かべていろ、わわ……、佐々木先輩がいて、思わず冷や汗が背中を伝つ。

「…………」

「…………さ、サーベン…………した…………」

「ふん、分かればよろしい。…………って、ああ、そんなこといつも

…………。

「何なんだよ、」「…………」

半ば呆れながら、「はー?」と面倒がつて聞き返せば、先輩はこつこつと笑つたのだった。

「私、君のことが好きなんだ」

…………。

…………。

…………。

「は?」

「…………本當に、由する反応してくられるよな、君つて」

呆れた表情を浮かべる先輩を見て、「いやいや」と手を振った。

「やつはいつの台詞だつて」

「“だつて”？」

「……です」

「よひじこ」

逆らえまいと、また手が出るのだけれど。流石に勘弁だ。

「……で、佐々木先輩、やつきの[冗談ツスよね]？」

「じつじつとひのい本氣だよ

「……俺、彼女居ますけど……」

「関係なし！」

……。

「……はあ

思い切りため息をつけば、彼女は更に楽しげに笑った。

「障害があればあるだけ、楽しいと思わない？」

「思わないですね。俺は、あいつ以外を好きになるつもり、毛頭ないですし」

「ベタ惚れね。……でも、絶対に振り向かせてあげる。楽しみに待つってね」

そう言つた先輩は、ヒラヒラ手を振つて出て行つた。その背を見ながら、俺は先輩の目を思い出す。

黒目のある瞳は、どこか切なさを内包していたような気がした。それが少し、気になつていた。

「…………

まあ、俺には関係ないか。

そう思つた俺は、ため息をつきながら、教室に戻つたのだった。

情報とは怖い。

「高瀬君が告白されたつて聞いた？」

「聞いた聞いた！3年の先輩でしょ？」

「美嘉先輩だつて」

「ああ、あの人！」

「誰々？」

「陸上部の……」

「ああー。」

どうやら佐々木先輩という人は、結構な人気者らしい。女子たちが「応援する?」とか言っている。

……ふざけんな。

「私は応援しよ」

「オイ」

「ひざいいくらい騒ぐ女子に近づき、見下ろしてそう言えども、一斉に青ざめた顔をする。それに構わず、苛々をぶつけるかのように睨む。

「……黙れよ」

「「あ……」」

「応援だ? ふざけんじゃねえよ。……人のことに首突っ込むな

吐き捨てるように言つて、俺はその場を離れる。不愉快この上ない。

……千沙に会いたい。

あいつに会えば、すぐに癒される。あの笑顔に、あの優しさで、心がほぐれる。穏やかな気持ちになれるのに。

「……はあ」

ため息をつくと、いつの間に隣に来たのか、直人が笑っていた。

「聞いたぜ？」

「……何を」

「先輩の話だよ」

「……ああ」

ウザつたそつに呟けば、「お前も大変だな」と呟く。

「もう三つお前は、どうなんだよ」

「俺？……俺は……まあ、気にすんな」

……？

妙に歯切れの悪い直人を見て、俺は目を細める。よく見れば、いつもつけているリングが一つない。

「……直人。お前、リングはどうした？菖蒲からむらつたって、嬉しそうにしてただろ」

そう言つと、直人は諦めたかのような苦笑を浮かべ、ポケットから取り出した。

何故つけないのか尋ねれば、強い表情で、笑つた。

「けじめだよ」

「…………」

「あいつが俺を望んでくれるまで、これはつけない。そう言って、あいつの前ではすしたんだ」

強い、表情だった。

どこまでも強く、しつかりとした意思に、俺は何も言えなかつた。

「…………強いな、お前」

ポツリと呟けば、直人は苦笑を洩らす。

「強いなら、けじめなんつつけねーよ」

「は？ 強いから、けじめをつけられるんだろ？」

そう言つと、直人は「いや」と呟いた。

「…………弱いから、けじめをつけるんだ。」

弱いから、あいつの前でけじめをつけて、守りつつ意識を高めたんだよ。不安で不安でしかたねえ弱い気持ちを、強くするために。あいつとの未来を、夢見るために」

ぐつと握り締めた手を見て、直人は、笑ったんだ。

笑顔でいられた直人が、眩しくて。

「……そつか

でも俺は、そんなお前が、……強いと思うよ。

心の中だけで、そう呟いた。

ブブツ、ブブブツ……。

部活後になつたバイブルに、汗を拭きながら携帯を見れば、千沙からだつた。

『話がしたい』

それだけのメールが、何だか妙に気になつて、俺は『前に話をした公園について』と送る。

『蓮、先輩が“自主練しねえか””、だつてよ

『悪い、直人。俺、先帰るわ』

「は？　つて、おい、蓮！」

止めるよつに聞こえる直人の声を振り切つて、俺は学校を飛び出した。

2、一つの影が、割れる時

公園に行けば、千沙がベンチに座つてボンヤリと宙を仰いでいた。それを見て、少し安堵する。

「……千沙」

呼べば、彼女はすぐにこちらを見て、肩の力を抜いた。でも、その顔に笑みはない。

何だか気になりながらも、彼女の隣へと移動する。彼女の視線は、下に向いていた。

「……」

何も話さない彼女を見て、俺は財布を確認した。中に入っていたのは、177円。近くにあるのは、販売機。つまり、ジュースは一本しか買えないということだ。

「……千沙、ミルクティーでいいか?」

「え? あ……いいよ、大丈夫」

遠慮してそう言つた彼女の手を、俺は少し強引にとつた。その手はもちろん、冷え切つて赤くなつていた。

「これのどこが、大丈夫なんだ?」

「…………」

「いいから、少し待つてる。な？」

確認するよひに言えれば、彼女は「クンと頷く。それを見てから、カバンを地面に置き、急いで販売機に向かう。

「ミルクティー……ミルクティー……つて。

「…………あちゃー」

ちょうど売り切れになつてゐるそれを見て、俺はどうしたもんか考える。彼女の好きな飲み物は、ミルクティー以外分からぬ。

「俺、本当に千沙のこと、何も知らないんだな……。

そう思つたら、胸が微かに痛んだ気がした。

俺たちは、他の恋人と比べたら、何も知らないのかも知れない。相手の誕生日も、血液型も、好きな食べ物、飲み物、スポーツに趣味。

「…………」

とりあえずココアを買った俺は、ベンチに俯きながら座つてゐる彼女を見て、今更気づく。彼女が、制服のままだということ。

「千沙」

「え？……あ

ココアを渡してから、上着に触れれば、それは雪のように冷たい。ジャージじゃあまり温かくはないかもしないが、ないよりはましだと考え、上を脱いで彼女に着せた。

部活後、着替える間もなく走ってきたため、下は半袖。寒くないはずがない。だが、彼女に風邪を引かせるくらいなら、自分が寒いほうが断然いい。

「駄目だよ！これじゃ連が」

「いいから、黙つて着てろ」

無理矢理チャックも閉めれば、彼女はダボダボのジャージに腕を通して、申し訳なさそうに俯いた。

「……汗臭かつたら、悪い」

「……大丈夫……」

呟いた彼女の表情は晴れない。俺はとりあえずカバンをよせて、彼女の隣に座った。

前と同じように、缶をコロコロと動かす彼女を横目に見ながら、俺は白い息を吐き出した。

「……どうした？って、聞いてもいいか

「…………」

無言で頷いた彼女を見て、そつと手に触れた。ピクッと動いた彼女は、でも、抵抗することはない。

震えるその手が、何かあつたところを知らせてくれた。

「……どうした？もしかして、先輩の話、聞いたのか？」

「…………」

「もしもそうなら、悪かった。早くお前に、言いに行けばよかつたよな」

そう言って、もう一度「悪かった」と言えば、彼女の手が更に震える。それに驚いて彼女を見れば、目には涙が溜まっていた。

「え、あ、ちよ……千沙？！」

驚いて声を上げれば、彼女は更に俯き、ボソッと呟いた。

「…………」

「え？」

聞こえなくて問い合わせば、

「別れて……」

そつ、確かに聞こえた。

意味が分からなくて、言葉が返せなくて、

「……今、なんて……？」

信じたくなくて、問い合わせたその声は、情けないことになっていった。

「別れる……？」

「それは一体、どうこう意味だ……？」

「別れて、下さい……」

俺のほうを向いて、頭を下げる彼女を見て。その場を去りつくる彼女の腕を掴んだ。

引き止めたくて、待ってほしくて、話が聞きたくて、聞いて欲しくて。

「行くな

腕の中に閉じ込めて、そう呟いた。

「……頼む。行くな

ぎゅっと抱きしめれば、彼女から甘い香りがする。俺の大好きな、癒されるあの香りに、涙が溢れそうだった。

今度は微かに抵抗する彼女を、俺は力の限り抱きしめた。

「…………。離して、蓮」

「…………」

「お願い……もつ、離して……」

「離したら、逃げるんだろ？俺のところから、居なくなるんだろ？……だつたら、意地でも離さない」

離せるはずがない。

「こんなにも好きで、こんなにも愛しいのに。

別れたいから、離してくれ……？」

納得できるはずがない。

納得なんてしない。

……頼むから……。

「理由くらい、教えてくれ……。じやなきや俺は、どうやつたってこの手を、お前を、離してやれない」

彼女の幸せを望む。

だからこそ、彼女の幸せが、俺の隣にあるのなら。

でももし、彼女の幸せが、他の男の隣にあるのなら。

「……お前にもし、他に好きなヤツができるって言つなり、……この手を離す。俺のことが嫌いになつたなり、ちやんと離してやるから。

だから頼む。理由を、教えてくれ

何も言わずに別れることは、したくない。

もしかすればただの勘違いかもしない。

『私、君のことが好きなんだ』

昼間の先輩の言葉を思いで、俺は強く思つ。

もし、先輩との間を誤解しているのなら、それを解きたい。だから、理由が知りたい。不安にさせたなら、ちやんと、安心させてやりたい。

別れたくない

「…………」

それでも何も言わず、俺の腕を掴んで黙り込む彼女を、本当に愛しく思つ。

「これは子供の恋かもしれない。恋愛“じつこ”かもしれない。でも、それでもいい。今は絶対に、彼女を離したくないんだ。で

初めてだった。

自分のことを、人に知つて欲しいと、願つたのは。相手の重荷を、背負つてやりたいと思つたのも、護りたいと願つたのも、自分の隣に幸せがあるよう、……祈つたのも。

夜眠れなくなるほどに、愛しい人を見つけたのだって。

学校に行けば、彼女に会いたい気持ちで一杯で。授業には真面目に出るけど、始まつてすぐは彼女のことを考えてるし、もう少しで終わるつて頃になれば、会いたくて会いたくてウズウズする。

メールが来れば嬉しいし、彼女に名前を呼ばれるだけで、今でもまだ胸が高鳴る。

それほどに愛しいのに……。理由も知らないまま離すことだけは、絶対に、絶対にできない。

「……もし、お前が先輩の告白を気にしてるなら、気にする必要なない。俺は、千沙が好きだ。お前以外のヤツを好きになれないくらい、本当に、お前が好きなんだ」

「…………」

「だからもし、先輩が原因なら……。頼むから、別れないでくれ……」

もしかしたら、ウザいかもしね。

女々しいと、思われただろうか。

でも、そう思われてもいいくらい、彼女が好きだ。

彼女がそばにいてくれるなら、どんな印象を持たれても構わない。いいから、だから、そばにいて欲しい。

そう思つてみると、彼女が俺の腕から逃れよつともがく。それを見て、俺は腕の力を緩めた。

ああ、駄目なのか……。

俺じや、駄目なのか。

ツキン、と。胸が痛んだ気がした。でもそれを無視して、俺は苦笑を浮かべた。

「悪い……女々しい、よな……。本当に、ごめん」

今でもまだ、彼女を離したくないと想ひ俺は……。

今まで、どれだけ彼女を思つてきたのか。

「……別れるなら、最後に、名前を呼んでくれないか? そうすれば、けじめがつく」

真正面に立つ彼女を見てそう言えれば、その瞳から、涙が流れる。

…………どうして、泣くんだよ……?

別れたいなら、別れるよ。……どれだけお前を思っていても、お前が嫌がるのなら、俺は別れるから。

だから、泣くなよ……。

「泣くなよ。……お前がどうやつたら笑うかなって、俺は知らないんだ」

そう、知らない。

俺は何も、彼女のことを探らないんだ。

そう思つたら、胸が抉られるように痛んだ。

「……蓮

トクン。

……ああ……もう、十分だ。

そう思えた。素直に、そう呟いた。

だから、

「別れたく、ないよ……」

「……へ?」

続いた言葉に、思わずマヌケな声を出してしまった。

「……あ、は、え？」

「私が、別れたいって言ったのは……先輩じゃない……」

「あ、ああ……そつ

じゃあ、何だ？

俺は一体、何故別れなければならなかつたんだ？

意味が分からず、俺は少し混乱する。

「……でも、別れたいの……」

……。

……。

「千沙、頼む。分かるように、説明してくれないか？」

どれだけ学力で主席を取つていても、流石に恋愛で主席はそれない。というより、取れるなら取りたい。彼女の気持ちが分かるのなら、とうつとうつと思う。

が、今の俺に、それだけの免疫はない。

これが2人目の彼女で、実質的に言えば、初めてと同じ感覚だ。菖蒲とは、恋人らしいことはあまりしていないから。

「……私、蓮のこと、何も……知らない」

「…………」

「でも、私も……まだ、蓮に何も教えてないから…………」

だから、教えて欲しいとは、言えない…………？

「だから、別れたいの…………」

「…………」

…………。

…………。

…………。

今ので分かる人、手を上げてくれ。

俺は分からん。

「…………なあ、千沙。一つ、確認させてくれ。…………お前は、俺が嫌い
か…………？」

首を、それはもう、凄い勢いで横に振る彼女を見て、俺は凄い安堵する。でも、それだと尚更意味が分からぬ。

好きなのに別れなきやいけないのは、何故？

「俺も、お前が好きだ。…………なら、別れなくてもいいんじやないか

？」

「…………

無言で、小さく首を振った彼女を見て、俺は頭を搔く。

ビーストじゃいーんだ……？

「お母さん…… 美嘉先輩に、言われたの…………」

ドクン。

佐々木に…………？あいつ、何を言ひやがったんだ。

フツフツと湧き上がる怒りは、彼女の言葉によつて流された。

「ラブラブだね、って…………」

…………。

…………。

…………。

「…………で？」

本当に呆れた声で返した俺を、チラッと見て、彼女はポツリポツ
りと、言葉を搾り出した。

「……私、最初はその言葉に、何も言えなかつたの。……でも、1人で色々と考えて……気づいたの。私、蓮のこと……何も知らないんだなあって」「…………」

「…………」

「美嘉先輩は、たくさん知つてたの。

流石に、過去のことは知らないって言つてたけど、誕生日も、血液型も……全部。好きな食べ物とか、ジュースとか……たくさん、たくさん」

それは今、俺も思つていたことだ。だから別に、疑問はない。

でも、それがどうして、“別れる”という選択肢になるのか。

「……それは、これから知つていけばいいだろ？知りたいことなら、何でも教える。だから」「…………」

その言葉に、でも彼女は首を振る。

「駄目、なの…………」

「は？」

「今の私じゃ……駄目なの…………」

“今の彼女”じゃ、駄目……？

意味が分からず眉を顰めると、彼女は泣き出しそうになりながら、

呟いた。

「私はね……。過去に、たくさんたくさんあって……。でもまだ、蓮にそれを教えてない」

「…………」

「それだけじゃない。」

「私はもしかしたら、蓮を……真山君に重ねてるのかも知れな
いって、先輩と話してて思ったの」

「…？」

その一言に、何も言えなかつた。

前兆はあつた。俺を見ているのに、俺を見ていらない時が、ないと
は言い切れなかつた。その度に、俺は確かに、不安を感じていた。

「先輩の話を聞いて、“違つ”つて思った。それは、“蓮”じゃな
いって。……でも、でもそれは、私が真山君と重ねてるからじゃな
いかつて、そう思つて……。」

思つたら、止まらなくなつて……。」

「…………」

「分からなくなつて、私が好きなのは誰なのか、全然分からなくな
つて……。」んな思いのままじや、蓮と一緒にいられない。傷つけ
るだけで、終わらせてしまうかもしれない……。」

それくらいなら、いつそのこと、別れたほうがいいって……そう
思つたの」

傷つけるくらいなり。

こんな想いのままでは

そのどれもが、俺を思つての言葉だった。

それが嬉しくて、切なくて、悲しくて。

「……千沙

そっと、彼女を抱きしめた。

長い髪に指を滑りせながら、俺は彼女に囁いた。

「 別れよ」

3、直人という存在

彼女に別れを告げて、一週間が経つ。

そんな今日、俺は直人と一緒に、マックに入っていた。

「……で？」

「おん？」

いつもはあまり飲まないコーラを飲みながら、俺は妙に上の空の声で返した。

「何で別れたんだ？」

「…………」

「その様子じや、嫌いだから、つてわけじゃねえんだろ？」

鋭い一言に、俺は思わず苦笑した。

コイツとの付き合いは長い。

でも、俺はどこかで、“まだ、菖蒲のことが忘れられないか？”と、聞かれるのかと思っていた。

意外なことに聞かないこいつを見て、付き合いが長いんだなと、

今更思った。

「菖蒲が原因か、って……聞かれると思つたけどな」

「何年つるさでると思つてんだよ?……普段のお前を見てりや、ビンだけ中山が好きかなんて、嫌つしつらほど分かるよ」

それこそ、菖蒲が見ていたら泣くくらいに、と。妙に分かり易くて、分かりづらいう言葉に、俺は曖昧に笑うしかなかつた。

「……お前は本当に、態度に出るからな」

「いいことなのか? それは」

「いいんじゃねえか?……まあ、言葉は足りねえけど」

確かにそうだ。

今回彼女と別れたのも、俺の言葉が足りないから、といつのが、入つていられないわけじゃない。もつと話し合つていれば、少し距離を置く、こうだけで終わつたかもしれない。

でも今は、それじゃ足りない。完全に距離を置いて、互いに見つめ直す必要があると、そう思つた。

彼女の言葉が、俺にそう思わせた。

「……言われたんだよ、千沙こ

「何を?」

「……俺のことが好きなのは、マヤマツで言つ初恋のヤツと重ねて
るからじゃねえか、つてさ……」

意外と鋭く胸に刺さつたその言葉は、啖くたびに胸を刺す。思つ
だけで、思い出すだけで、胸がズキズキと痛んだ。

「……さちーな……それ」

「だろ?」

苦笑して「一ラを飲めば、「だからか」と直人が笑つた。

「おん?」

「お前が「一ラを飲むときは、荒れてるときだからな」

「…………」

鋭いヤツ。

ため息をついた俺は、頬杖をして、彼女の香りがするジャージを
顔にくつつける。

休日を挟んで3日後に、彼女は律儀に洗つて返してくれたのだ。
彼女に別れを切り出して、6日目の出来事だ。つまり、昨日の話。

どこか余所余所しい態度に、胸が痛んだのは、記憶新しい。

『うれ……、ありがと。高瀬君』

彼女を、抱きしめたかった。

彼女に、触れたかった。

彼女の名前を、呼びたかった。

「俺さ」

「ん?」

ポテトを食べる直人を見ず、外を眺めながら、俺は呟くように愚痴を漏らした。

「……あいつから、“好きだ”って……言われたことないんだよな

「……でも、付き合つてたんだろう?」

「その日以来、一度もねえよ。

不安が、なかつたわけじゃ……ねえんだよ。でも、あいつの態度が、日に見えて変わらないから……無理言わせなくともいいか、つて……思つてたんだけどな

もう少し早く、気づけばよかつたのだったつか?

そんなことを考えて、俺は自重するかのように笑つた。

「んなこと言ひへるけど、俺だつて……あいつ自身を好きになつた
かなんて、分かんねえけどな」

「……どひこつ意味だよ?」

問い合わせ返す直人の目は、微かに厳しい。そんな直人の指に、菖蒲から
のリングはまだない。でも、順調だという話を、少し前に聞いた
気がした。

「菖蒲と別れて……高校で初めて好きになつたつて、言つただろ?
でもさ、あいつのどこを好きになつたつて聞かれたら、……答えら
れないんだよな」

「……」

「菖蒲と重ねてたんじやないか、つて言われたら……絶対に違う、
なんて、断言できなんんだよ。俺もたまに、あいつの行動を見て、
菖蒲を思い出してたから」

いい例が、文化祭の田だ。

何かを喋ろうとした彼女は、舌を噛んで、言葉を上手く出せなか
つた。それを俺が指摘して、彼女が批判して。その時に、菖蒲との
初デートの日を思い出していた。

そして、俺は彼女を好きになつた理由を知つたんだ。

菖蒲のよつこ、ドジな子だからだろうな、って。

「……俺も、千沙のことばつか言ひてらんねーよな……」

菖蒲と、重ねていたのだから。

そう言つた俺を見て、直人は笑い出した。

こきなりのこと驚いて、飲んでいたコーラをとりあえず置く。それでも笑い終えない直人を見て、俺は「何だよ」と厳しく言葉を返した。

そして、直人の一言は、あまりにも的に射ていた。

「お前、馬鹿だよな！……お前が中山を好きになつたのは、性格を見てからなのかよ？」

「…………」

……性格を見てから……？

「どうこつ意味だよ？」

「菖蒲みたいにドジなところを見て、お前は、中山を好きになつたのか、って聞いてんだよ。確かにお前は、“菖蒲みたいにドジだ”って思つたかも知れねえけど……。

……惹かれたのは、そこじゃなかつたんだろ？」

……そうだ。

俺が彼女を好きになつたのは、気になりだしたのは、とりあえず匂いだ。

「……変態じやね？俺……」

「まあ、否定はできねえわな

グサツ。

意外と刺さった棘を抜きながら、俺は思い出す。

newとして手紙を出した彼女の文を見て、俺は微かな好意を寄せていたんだと思う。あの文面を見て、護りたいと思つた。そこまではもしかすると、“同情”だったかもしれない。

けび。

泣いていた俺を見て、彼女もまた、泣いた。

あの涙が、まるで宝石のよつて綺麗で、泣く彼女がどこまでも綺麗で。

泣き顔に、惚れていった

「あ……」

「な？」

「やりと笑つた直人は、ポテトを口に放り投げた。

「お前は考えすぎなんだよ。……お前は頭で考えるより先に、体で好きになるほうなんだよ。理屈じゃなくて、身体でな。
……前にも言つただろ?」

もちろん、後からちゃんと、性格も見るけどさ。

そう言つた直人は、のんびりとコーラを飲んでいた。そんなこいつを見て、俺も、よつやく笑了い。

「 そうだな」

newの文面を見て、彼女の泣き顔を見て、同一人物だと知つて。
俺は、嬉しいと思つた。そして、胸が苦しくなつた。

護りたい。

強く、そう思つていた。

あの時気づかなかつただけで、俺は、あの時からずつと、彼女に千沙に、惹かれていたのだ。

「思えば、…………そうだな。

確かに、菖蒲みたいだつて思つ前に、千沙を見る男に嫉妬しそうになつてたしな」

「だから言つただろ?……お前は、考えないほうが、恋愛上手なんだよ」

「……馬鹿みたいじゃねえか？」

「いんじやね？ 勉強では主席なんだしよ」

まあ、そうか。

そこで納得した俺は、親友がコイツでよかつたと、本当に思った。
だからこそ、願う。

「コイツが、菖蒲と上手くこくよひ。」

「コイツの想いが、報われるようひとこと。」

次の中、俺は図書室に向かった。今日は金曜日で、手紙交換の日。
そんなことを思つて、いつもの場所に向かおうとする。

「あの」

声をかけられ、振り返った。そこにいたのは、図書室の係りの先輩だった。確か、今日の当番は2年のはず。

「俺？」

頷いた彼女は、俺に紙を差し出した。

「……これ、渡してほしいって

「？ 誰に？」

「……ネーベ、って……言つてました……」

ネーベ？……“n e v e”？ネーヴェ！……

慌てて受け取った俺は、「ありがとうございますー」と言つて、それを持って図書館を出た。

早く家に帰つて、ゆっくりと読みたい。いつもの場所になかったところには、いつもと内容が違うところだ。

もしかすれば、重大なことかもしれない。そう思つたら、走らずにはいられなかつた。

でも。

「蓮！」

叫んだ声に、俺は思わず足を止めた。そして、呼んだ人を見て、ため息をついた。

「……なんスか、佐々木先輩」

「あれ？なんだか不機嫌」

そう言つて笑つた先輩は、最近、よく俺のところに来る。千沙と別れたという噂は、半田で学校中に広がつたらしく。

何が楽しいんだよ。

わつ思つて苛つきたが、今はそれどころじゃない。

「今急いでのんです。用事がないなら」

「……来てほしことにひがあるの」

妙に真剣な表情に、俺は口を閉ぢた。

「明日、4時にグランドにて来て。……待つてるから」

それだけ言つた先輩は、背を向けて階段を下りていく。流れる髪を見ながら、俺はまた、先輩の瞳が気になつていた。

どこか切なげに揺れた、悲しい瞳。……そこに、俺はいない。

「……」

先輩もまた、俺に誰かを重ねているのだろうか。

いい迷惑だ、とは……流石に思えなかつた。ただ、先輩がそれに気づいて、ちゃんと想いを伝えられたらと、わづついた。

4、過去の欠片？

『蓮さんへ。

ここにちは。今回は、あなたに全ての過去を打ち明けようと思いつて手紙を書きました。

長くなると思ってますので、できれば時間のあるとき、ゆっくり読んでください。

私の両親は、私が小学3年生の時に、交通事故で亡くなりました。とても仲のいい両親で、結婚記念日だと書いて、2人でドライブに出かけたんです。

その日に、トラックに正面衝突し、亡くなりました。

その後、私は祖母に預けられました。そして、お父さんたちがやつていた喫茶店を、お父さんのお友達さんが代わりに経営してくれました。

最近になつて、私の兄が、その跡を正式に継ぎ始めました。私ともう一人の兄は、喫茶店を一番上の兄に任せ、違う進路を進もうと思っています。

これが、私が人に隠していた過去の、3つのうちの1つです。
2つ目は、恋愛です。

私は、真山榛馬（ハルマと読みます）といつ人が、好きでした。

彼は小学6年生の時から入退院を繰り返し、卒業式に参加できな
いまま、亡くなりました。そんな彼は、私の親友の彼氏でした。

最近、彼の彼女であつた、私の親友から、真山君からの手紙をも
らいました。

彼からの、最後の手紙です。今までずっと、それを読めませんでした。
読んだら、何かが揺らいでしまう気がしたから。

私には、彼氏がいます。とても優しくて、意地悪で少し口が悪い
けど、カッコよくて、素敵な彼氏です。私を見て、私の全てを受け
止めようとしてくれる人です。

そんな彼への思いを、全て否定してしまいそうな気がして。彼氏
ではなく、彼氏に真山君を重ねて見ているのだと、そういう知らさ
れる気がして、ずっと、読めませんでした。

でも、彼と別れて、初めてその手紙を読んで、読んでよかつたと、
本当に思いました。

真山君と彼氏は、全く違いました。

確かに、表情や仕草は似ていました。でも、よく見れば、そこに
だつて違いがあった。それに、顔だつて、彼のほうがずっと大人つ
ぽかったです。

考え方も、気持ちも全て違う。彼は彼で、真山君じゃない。そし
て私は、真山君よりも、彼氏のほうがずっとずっと好きだと、そう
思えました。

真山君のことは、本当に好きでした。でも今では、彼氏のほうが
ずっとずっと好きだつて思える。

だから、会いたいと、そう素直に思えた。

近いづかいで、会おうと思っています。これはもう、決意しました。

最後に、今まで誰にも話したことの無い過去を、あなたにだけ、
話します。

私は過去に、人を見殺しにしたことがあります。

名前は、“りさ”といいます。その時の私の遊び相手で、1番仲
の良かった女の子です。

ある日私は、彼女と一緒に遊びに出かけました。確かこの時、真正君のお見舞いに行つたんです。病院に行つた記憶があるから、確かそのはずです。

そして帰りに、私たちは近くの森に入りました。森、だつたのか、山だつたのか。分からぬけど、木々が多いしげるところに入りました。

そこで私は、光る何かをガケの下に見つけたんです。その何かを知りたくて、私は恐る恐るのぞき込んでいたと思います。その時に、りさちゃんが来て、私はあれをとりに行こうと言いました。

彼女は慎重な子で、危ないと言いました。その頃の私は短気で、一緒に来てくれないりさちゃんに怒りを覚え、彼女を突き飛ばしました。

彼女の後ろには、ガケがありました。

スローモーションのように見えました。

彼女が、ガケの下に落ちていくのを、黙つて見ていました。彼女は手を伸ばして、その口で、たすけて、と言つたのに。

私は、手を伸ばしませんでした。

落ちていくのを黙つて見て、落ちた彼女から血が出るのを、やつぱり黙つて見ていました。

私は、血が嫌いです。それは、こんなトラウマがあるから、と言えば聞こえはいいですが、血を見るとその時のことを思い出すからです。

罪悪感を覚えるから。だから、血が嫌いです。

その後どうしたのかを、覚えていません。助けを呼んだのか、それとも黙つて見ていたのか。

覚えているのは、彼女の遺体を見て、泣き叫ぶ彼女の両親。その両親に、土下座をする兄2人と、祖母の姿。

それ以来私は、心に決めていました。

「このことは誰にも話さない。そして、絶対に、兄と祖母に迷惑をかけない。心配をかけない。」

もう2度と、泣かないと。

でも、私は泣きました。

彼氏の涙を見て、つられるように泣きました。泣くことを許していなかったのに、泣けました。

その人の涙が、まるで宝石のように見えたから。

彼が他の人のことを思つて流す涙が、とても綺麗だつたから。

だから私は、その涙から目が離せなかつた。そして、その後に見
た微笑に、胸が苦しくなつた。

その人を、好きになつていきました。

私はその涙を見て、微笑を見て、真山君を思い出してはいなかつ
た。だから本当に、私が好きなのは彼なのだと、そう思えた。

そして同時に、好きでいいのかと思います。

私は、人を殺しています。

周りの人は事故だと言ってくれました。でも、私は事故だなんて
思えませんでした。

私が殺したと、そう思つ以外できませんでした。

こんな私が、あんなにも素敵な人を、好きでいいのかと。

こんな私が、幸せになることを許されるのかと。

でももし、許されるのなら、私は、彼と幸せになりたいと思つ。

これが、私の過去と、私の今の想いです。

前に書いたことを、覚えていますか？あなたは、私が会いたいと言つたら、会いに行かせてくれると、そう書いてくれました。そして、自分の悩みを聞いて欲しいと、そう言つてくれました。

私は、あなたに会いたい。

そしてできるなら、あなたの悩みを聞きたい。過去を知りたい。力になつてもらつて分、私も、あなたの力になりたい。

あなたに会える日を、お待ちしております。

中山 千沙よ

り』

千沙の手紙を読んで、最初に思つたのは、喜びだつた。

千沙が自分に、過去を打ち明けてくれたことに。

千沙が自分を、好きだと思つてくれたことに。

千沙が自分と、幸せになりたいと願つてくれたことに。

だから俺は、千沙に会おうと思つた。

『千沙へ

来週の金曜、5時にいつもの公園で待つてる。ちやんと厚着をして、寒くない格好をするよつこ。

蓮よつ

俺はこの手紙を、明田図書室に行つて挿めようと思つた。佐々木先輩に呼び出されているから、土曜だけ学校に行くことになったし。

「…………」

そう言えばと、思い出す。

『なあ、蓮』

『おん?』

『佐々木美嘉つて先輩、知つてるだろ?』

『知らねー…………って、言ひてえ…………』

『やう言つなよ。…………あの先輩、どひ思ひ?』

『あーあー、美人だよなー。…………千沙のまつが数百倍可愛いけど』

『惚氣んな。…………じゃあさ、陸上部の中村海つて知つてるか?』

『かい……？ 知らん。そいつが、じつしたんだよ。』

『それが』

「.....」

もし、直人の言つことが本当なら。

「.....明日、ちやんと話さないとな」

といふえず今は、健康の為に寝よう。

もう言つて聞かせ、俺はベッドに入り込んだのだった。

5、最後の決断

午後4時。

グラウンドに、先輩の姿はない。と暫つか、冬のグラウンドには、誰もいなかつた。

陸上部、野球部は中で練習だろう。いないし。スキー部は確か、大会のはずだ。……あんま覚えてないけど。

キヨロキヨロと周りを見渡すと、一人ポツンと座り込んでいる人影があり、近づいた。

陸上部の部室近くに座っていた先輩は、俺を見るなり笑った。

「来てくれたんだ」

鼻の赤い先輩を見て、俺はため息をついてマフラーを投げつけた。

「ぶつ?...」

「さつさと着ければ?...今だけ、貸すよ」

「今だけ、ね。彼女さんだつたら?」

「やる」

「やつぱつ

クスクスと笑う先輩を見て、俺はため息をついた。

「……話は？」

「……」

無言になつた先輩を見て、俺は、直人の言葉を思い出す。

『あの先輩、その中村つて後輩が好きらしいぜ。』

……後輩、つつつとも、俺らの一つ上だけじゃ』

『だつたら、何で俺に告白してんだよ』

『……親友に、取られたんだつてわ。なんかぞ、中山みたいじやね?』

中山みたい、か……。

確かにそうかもしね。でも、決定的に違うところがある。

「……俺は、高瀬蓮です」

「……は?」

「中村海つて先輩じや、ないツスよ」

「…？」

驚きで顔を上げた先輩は、やがて、自嘲した。

「……か悲しみを内包するその笑みは、本当に少し……彼女に似ているよ」の気がした。

「……知つてたの？」

「聞いたんスよ。親友にとられた、って」

「……取られたんじやないよ。譲つただけ」

そう言つて苦笑した彼女は、俺を見ながら、俺を見ていなかつた。

俺を通り越しているその瞳には、何が映つているのか。

「ずっと、海が好きだつた。でも、奈々にそれを言い出せなかつた。でもつて、告白もできなかつた。だから、忘れようと思つたんだ」

「だから、性格の似てる俺に話しかけた？」

「……そうだね。不器用つてところが、似てたからさ……。実際に話すと、色々と違つたけどね」

それでも、自分は彼が好きなんだと、そう言い聞かせていたと彼女は言つ。

「間違つてゐつて、分かつてた。でも、怖くて……告白はできなかつた」

「だから、3年は来なくていい時期になつても、学校に来てたつて
わけか」

「失礼な。私はあなたの事がなくとも、自主的に勉強しに來てるの」

クスクスと笑う先輩を見て、俺はため息をついた。

「……俺は、あんたの田が、気になつてた」

「……田?」

「どつか、切ない感じに見えたんだよ。だから、……気になつてた」

いや、同情していた。

幸せになればいいなと、思つた

俺こそ、先輩に彼女を重ねていたのかもしれない。でも、そう思わずにはいられなかつた。

「俺はあんたを好きになれないし、好きだとは思わない。あんただつて、俺が好きなわけじゃないなら、ちゃんと気持ちを伝えたほうが、良いと思うけどな」

「……」

「砕けることが前提だとしても、気持ち的に色々と違う。……伝え
るもの、一つの手段だと思つ」

そしてこれはきっと、彼女も分かっていることだ。

先輩と彼女の違い。それは、重ねてみたとして、俺を、好きなヤツの代わりとして扱ったかどうか。

彼女は扱わなかつた。でも、先輩は扱つていた。

それが、一番大きな違いだ。

「……俺はもう行きます。もし先輩が、伝えたいと思つなら、それを使って勇気を出してください」

先輩が巻いているマフラーを指差すと、「は?」と返された。

「……先輩もなかなか、白ける反応してくれますよね

「絶対に蓮ほびじゅない」

「はいはい。それ、何か香りがしませんか?」

マフラーをくんくんと嗅いだ先輩は、「あ」と声を出した。

「レモン……」

「先輩つぽかつたんで」

アッサリとしていて、元氣で、明るくキッパリとした性格。

そんなイメージがあつたし、実際にそう言つ人だった。思つたことを口して、率直に伝える人。そんな人は、レモンつてイメージが

俺の中にある。

偏見だろうか？

「どうせつけたの？」

「レモン汁絞って」

「…………」

「嘘ツスよ。お袋が持つてたアロマセラピーで、匂いをつけただけです」

お袋に散々文句言われながら。

“今日はラベンダーの気分なのに……” ……つて。

「俺は、先輩は何でもかんでも、ズバズバ言つ人だと思つてます」

「…………どうイメージよ」

「そういうイメージです。だから、レモンの匂いで、自分の性格を思い出してくれば、きっと思つたんスよ」

先輩は黒いマフラーを持って、小さく笑つた。

初めて見た、先輩の本当の笑みに、俺も笑つた。

「……伝えられる」ことを、祈つてやります

「何それ、上から田線じゃん。後輩のくせに」

「後輩に後押しされてる人に言われたくないですよ。……それじゃ、俺は用があるんで」

そう言つて歩き出した俺の背に、先輩の声が聞こえた。

元氣で、ハキハキとした、先輩らしい声。

「ありがと!」

「……頑張つてください」

「ラジヤーーーあ、ブをつけると下着だね」

「意味分かんねえつてのー!」

先輩“らしい”返答に笑いながら、俺は図書室へと向かった。

静かな図書室には、誰もいない。休日だから当たり前だ。

いつも通り、いつもの本を開いて、何かが違うことに気がつく。

「……?」

本を閉じて、もう一度開き、でも何が違うのか、気がつくことができなかつた。

「なんだ……？」

「…………」

とりあえず本の間に紙を挟め、閉じた瞬間、よつやかに氣づく。

「匂いがしない……？」

いつもなら香る匂いがせず、なんだか気になつて挟めた紙を取り出した。そして、パラパラと捲る。

「あ。」のページ。

初めて手紙を見つけたときの、ページを見つける。懐かしいと思
いながら捲り、最後のページを開いていた時、

「…………？」

ピラツと、紙切れが床に落ちた。

拾い上げたそれは、二つ折りになっていた。開いても、香りはない。

「…………？」

だと呟つのに、紙の一番下にはそう書かれていた。

『蓮さんへ

いつもお手紙ありがとうございます。

こきなりで驚くと思いますが、あなたに会いたいです。次の金曜日、5時に屋上に来てください。

待っています。

neve』

「…………」

ああ、そうこうとか。

本を開いて匂いがしなかつたのは、誰かが本を変えたから。そしてこの手紙も、他の誰かが入れたもの。彼女じゃない。

だからあいつ、委員の人に渡してもらつよう頼んだのか。

「千沙はこんな字、書かねえつての」

ふざけた手紙をぐしゃっと丸めた俺は、本を全然違う場所に入れ、玄関へと急いだ。もちろん、図書室のゴミ箱に、丸めたゴミを捨てて。

「……なあ、隼人」

お前は今、この窓見てるか？

すげえ青くて……手が腫もれたり黒ずんでるけど、透き通つたこの
青空を。

『“成るよりしかならない”』

『……前、やつはわれたんだよ』

『だから、

ここに迷つてこないで』

『思い切つて、逃げたりと迷つ

『……砕けるかもしれないけどな

『でも、諦めるへりこなり』

『砕けたほうが、ずっとましだつて、

やつ思つから』

『また会いに来るまでに、

その夢、諦めるんじゃなこぞ？』

『お前はまだ……若いんだからや』

俺は、今もまだ、お前を待つてる。

「……さつせと、会いに来いよ……隼人」

俺の夢は、何一つ、変わらないんだから。

「会いに来て……教えてくれ」

俺の知らないことを、また、たくさん……教えてくれ。

「なあ……、隼人……」

俺は彼女に、ちゃんと伝えられるよな　?

“好きだ”って

去つて行く背を見つめながら、涙を堪える。

『……俺は、

あんたの田が、気になつてた』

私のことを好きじゃないの? それでもちやんと、相手のことを見て気づくことか。

『びつか、切ない感じに見えたんだよ』

『だから、

……気になつてた』

同情かもしれないけど、それでも、相手の心を遣り遣り優しくとか。

『俺はあんたを好きになれないし、好きだとは思わない』

本人を田の前にしているくせに、何の戸惑いも、躊躇も無く、本音をぶつけるところとか。

『もし先輩が、伝えたいと思うなら、それを使って勇気を出してください』

『俺は、先輩は何でもかんでも、ズバズバ言つ人だと思ってます』

『だから、レモンの匂いで、自分の性格を思い出してくれたら、つて思つたんスよ』

最後の最後に、自分にできる精一杯のことをしてくれるとこか。

『……伝えられることを、祈つてやります』

不器用だから、少し恥ずかしがりやだから、上から田線で垂らしていくとか。

でも、少し空いた間が、彼が心を込めて、本当に熱い想ひで伝えてくれたのだと、教えてくれる。

相手のことをよく見て、知りつっこいで、氣づいて、後押しをする。

そんな彼を、私は海と重ねていた。そして同時に、海に似ているのに、似ていない彼を、好きになりかけていた。

「……ばか」

君は最後まで、私の気持ちは偽りだと、そう思っていたのでしょうか？

『俺はあなたを好きになれないし、好きだとは思わない』

『あんただって、
俺が好きなわけじゃないな、
ちゃんと気持ちを伝えたほうが、
良こと思つねどな』

でもね、素直に言えれば、本当は君のことも好きだったの。

確かに最初は、海に似てるからだった。でも、海と違うところを見て、惹かれていたのも事実で。

だけど残念。この恋は、“偽り”で終わらせないと。

「……ぱいぱい、私の恋心

芽生え始めたその芽を、私はそつと摘んだ。そして、もう2度と彼への気持ちが育たぬよう、冷たい風に流す。

「……

少し悲しくて、切ない。でも、君が私の背を押すなら、私はちゃんと、伝えてくるよ。

「私は……君たちが、好きだよ……」

不器用で、照れ屋で、目の前がしつかりと見えている、強い君たちが。

心が優しくて、ちょっとした変化にすぐ気づけて、救える君たちが。

好きな人の為に、どこまでも心を碎ける君が。

好きな人の為に、自分を抑える彼が。

「……よし

投げつけられたマフラーを持つて、私は歩く。

最後に残る未練を、打ち碎くために。

「待ってね。もう少しで、前に進めるから」

「いや踏み出した一歩を、私は忘れない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6801x/>

君からのメッセージ

2011年11月20日02時13分発行